

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

2

前田遺跡

1993

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

2

前田遺跡

1993

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団



調査区全景（東より）



梵鐘埴型（龍頭・乳）

## 序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成2年度と3年度に実施した板野郡土成町前田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

当遺跡は阿讃山脈南麓に位置しており、弥生時代中期末～後期初頭の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、本県では検出例の少なかった中期末の長方形住居跡を含む集落跡が確認できました。また鎌倉時代の集落跡や野鍛冶に関する遺構も確認されており、当地域の中世の村落景観を復元する良好な資料となりました。

さらに江戸時代の梵鐘の鋳造に関わる遺構は、出土した鋳型や溶解炉などと共に近世の梵鐘鋳造技術を考える上で重要な資料といえます。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様にご多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成5年9月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近藤 通 弘

## 例 言

- 1 本書は平成2年(1990)度から平成3年(1991)度にかけて調査を実施した前田遺跡(板野郡土成町所在)の調査報告書である。
- 2 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
  - ・発掘調査 1次調査 平成2年5月10日～平成3年2月4日(試掘後本調査に移行)
  - 2次調査 平成3年4月9日～平成3年4月12日(試掘)
  - 平成3年7月1日～平成3年10月4日(本調査)
  - ・整理業務、報告書作成 平成4年4月1日～平成5年7月31日
- 3 発掘調査は徳島県と日本道路公団高松建設局の委託契約を受け、徳島県からの委託契約により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

### 凡例

SA	掘立柱建物跡	SH	炉跡	SP	柱穴
SB	竪穴住居	SK	土坑	SR	自然流路
SD	溝	SO	窯跡	ST	墓

- 5 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位(T.P.)を表わす。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠、竹原秀雄編『新版標準土色帖』1989年度版によった。
- 7 遺物番号、挿図番号は全て通し番号とした。
- 8 第4図の地形図は建設省国土地理院登録の1/25,000の地形図「市場」を転載したものである。
- 9 調査に当たっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所 同脇町工事事務所  
 徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所 土成町

- 10 発掘調査、整理期間を通じて次の方々に御協力、御教示を得た。

石尾和仁 五十川伸矢 一山典 尾上実 片桐孝浩 勝浦康守 柴田昌児 高岡裕  
 高島康貴 高橋圭次 寺島文則 中山光夫 能登谷宜康 橋本久和 福家清司  
 北条ゆう子 森島康雄

(五十音順・敬称略)

- 11 出土遺物の自然科学的分析は、銅滓の分析を榑三宝伸銅の久野雄一郎氏に、鉄滓の分析を中山光夫氏にそれぞれ依頼した。
- 12 報告書作成は遺物実測図のトレースを辻 佳伸、九十九塚、遺構実測図のトレースを中野健次、遺構一覧表・遺物観察表の作成を市原健次、安友克佳、桑原正晴、遺物の写真撮影を島巡賢二、本書の執筆は1-1を菅原康夫、その他を辻佳伸が行い、辻が編集した。

## 遺跡抄録

遺跡名	前田遺跡
説 明	まえだ
所在地	板野郡土成町土成字前田55-1他、吉田字牛屋谷134-1他 $X = 123.950 \sim 124.060$ $Y = 77.610 \sim 77.980$
種 別	集落
時 代	旧石器・縄文・弥生・中世・近世
主な遺構	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・土壇墓・鍛冶炉・炭窯・鋳造遺構
主な遺物	旧石器・縄文土器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器・鋳型

# 本文目次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	6
(1)	調査の経過	6
(2)	発掘調査の方法	6
(3)	調査日誌抄	9
II	遺跡の立地と環境	11
1	地理的環境	11
2	歴史的環境	11
III	調査の成果	16
1	層序	16
2	遺構と遺物	20
(1)	縄文時代	20
	土坑	27
(2)	弥生時代	28
	竪穴住居跡	28
	掘立柱建物跡	44
	土坑	58
	その他の遺構	66
(3)	古代	68
	土坑	68
	自然流路	71
(4)	中世	74
	掘立柱建物跡	74
	土坑	78
	土墳墓	84
	鍛冶関連遺構	84
	炭窯	88
	その他の遺構	92
(5)	近世	94
	梵鐘鑄造遺構	94
(6)	包含層出土遺物	114
3	弥生時代の遺物と遺構	134

4	中世の遺物と遺構 .....	141
5	考察 .....	146
(1)	前田遺跡の在地生産瓦器について .....	146
(2)	梵鐘鋳造関連遺構について .....	152
6	まとめ .....	160
IV	自然科学的分析 .....	161
1	徳島県板野郡土成町前田遺跡出土の鉄滓等の金属学的調査 .....	161
	中山光夫	
2	前田遺跡(徳島県板野郡)出土銅塊および銅滓の金属学的調査 .....	169
	朝三宅伸嗣 久野雄一郎	

## 挿図目次

第1図	西国縦貫自動車道(徳島～姫)路線図 .....	3	第28図	S A1002実測図 .....	44
第2図	グリッド配置図 .....	6	第29図	S A1002出土遺物実測図 .....	45
第3図	調査区位置図 .....	7	第30図	S A1003実測図 .....	46
第4図	周辺の遺跡分布図 .....	12	第31図	S A1003出土遺物実測図 .....	46
第5図	基本土層柱状図 .....	17	第32図	S A1004実測図 .....	47
第6図	透視配置図(1) .....	21	第33図	S A1004出土遺物実測図 .....	47
第7図	透視配置図(2) .....	23	第34図	S A1005実測図 .....	48
第8図	縄文・弥生時代の遺構配置 .....	25	第35図	S A1006実測図 .....	49
第9図	S K1064実測図 .....	27	第36図	S A1006出土遺物実測図 .....	49
第10図	S K1065実測図 .....	27	第37図	S A1007実測図 .....	50
第11図	S K1065出土遺物実測図 .....	27	第38図	S A1007出土遺物実測図 .....	50
第12図	S B1001実測図 .....	28	第39図	S A1008実測図 .....	51
第13図	S B1001出土遺物実測図(1) .....	29	第40図	S K1004実測図 .....	52
第14図	S B1001出土遺物実測図(2) .....	30	第41図	S K1004出土遺物実測図(1) .....	54
第15図	S B1002実測図 .....	31	第42図	S K1004出土遺物実測図(2) .....	55
第16図	S B1002出土遺物実測図 .....	32	第43図	S K1060実測図 .....	56
第17図	S B1003実測図 .....	33	第44図	S K1060出土遺物実測図 .....	57
第18図	S B1003出土遺物実測図 .....	34	第45図	S K1015実測図 .....	58
第19図	S B1004実測図 .....	35	第46図	S K1016実測図 .....	58
第20図	S B1004出土遺物実測図(1) .....	37	第47図	S K1018実測図 .....	59
第21図	S B1004出土遺物実測図(2) .....	38	第48図	S K1018出土遺物実測図 .....	59
第22図	S B1004出土遺物実測図(3) .....	39	第49図	S K1024実測図 .....	60
第23図	S B1005実測図 .....	40	第50図	S K1024出土遺物実測図 .....	60
第24図	S B1005出土遺物実測図(1) .....	41	第51図	S K1027実測図 .....	61
第25図	S B1005出土遺物実測図(2) .....	42	第52図	S K1027出土遺物実測図 .....	61
第26図	S A1001実測図 .....	43	第53図	S K1031実測図 .....	62
第27図	S A1001出土遺物実測図 .....	44	第54図	S K1037実測図 .....	62

第55回	S K1037出土遺物実測図	62
第56回	S K1039実測図	63
第57回	S K1043実測図	63
第58回	S K1044実測図	63
第59回	S K1045実測図	64
第60回	S K1045出土遺物実測図	64
第61回	S K1049実測図	65
第62回	S K1049出土遺物実測図	65
第63回	S K1063実測図	65
第64回	S K1063出土遺物実測図	65
第65回	柱穴出土遺物実測図	67
第66回	S K1025実測図	68
第67回	S K1025出土遺物実測図	68
第68回	S K1034実測図	68
第69回	古代～近世の遺構配置	69
第70回	S K1034出土遺物実測図	71
第71回	S K1052実測図	71
第72回	S K1052出土遺物実測図	71
第73回	S R1001実測図	72
第74回	S R1001出土遺物実測図	73
第75回	S A1009実測図	74
第76回	S A1009出土遺物実測図	74
第77回	S A1010実測図	75
第78回	S A1011実測図	75
第79回	S A1012実測図	76
第80回	S A1013実測図	76
第81回	S A1014実測図	77
第82回	S A1015実測図	77
第83回	S A1016実測図	78
第84回	S K1001実測図	78
第85回	S K1002実測図	78
第86回	S K1005実測図	79
第87回	S K1029・S K1030実測図	80
第88回	S K1036実測図	80
第89回	S K1036出土遺物実測図	80
第90回	S K1053実測図	80
第91回	S K1054実測図	81
第92回	S K1055実測図	81
第93回	S K1055出土遺物実測図	81
第94回	S K1056実測図	82
第95回	S K1057実測図	82
第96回	S K1058実測図	82
第97回	S K1058出土遺物実測図	82
第98回	S K1059実測図	83
第99回	S K1061実測図	83
第100回	S K1061出土遺物実測図	83
第101回	S T1001実測図	84
第102回	S T1001出土遺物実測図	84
第103回	S H1001実測図	85
第104回	S H1001出土遺物実測図	85
第105回	S H1002実測図	86
第106回	S H1002出土遺物実測図	86
第107回	S H1003実測図	86
第108回	S H1003出土遺物実測図	86
第109回	S H1004実測図	87
第110回	S H1006・S H1007実測図	87
第111回	S O1001実測図	88
第112回	S O1002実測図	88
第113回	S O1003実測図	88
第114回	S O1004実測図	89
第115回	S O1005実測図	89
第116回	S O1005出土遺物実測図	89
第117回	S O1006実測図	90
第118回	S O1006出土遺物実測図	90
第119回	S O1007実測図	91
第120回	S D1003実測図	92
第121回	S D1004実測図	92
第122回	柱穴出土遺物実測図	93
第123回	S H1005実測図	95
第124回	S H1005出土遺物実測図 (1)	99
第125回	S H1005出土遺物実測図 (2)	101
第126回	S H1005出土遺物実測図 (3)	102
第127回	S H1005出土遺物実測図 (4)	104
第128回	S H1005出土遺物実測図 (5)	106
第129回	S H1005出土遺物実測図 (6)	106
第130回	S H1005出土遺物実測図 (7)	107
第131回	S H1005出土遺物実測図 (8)	109
第132回	S H1005出土遺物実測図 (9)	111
第133回	S H1005出土遺物実測図 00	113
第134回	包含層出土遺物 (1)	115
第135回	包含層出土遺物 (2)	116
第136回	包含層出土遺物 (3)	118
第137回	包含層出土遺物 (4)	119
第138回	包含層出土遺物 (5)	120
第139回	包含層出土遺物 (6)	121
第140回	包含層出土遺物 (7)	122

第14回	包含層出土遺物 (8).....	123	第14回	包含層出土遺物 (8).....	132
第15回	包含層出土遺物 (9).....	124	第16回	前田遺跡弥生墓落模式図.....	139
第16回	包含層出土遺物 (10).....	125	第17回	前田遺跡出土中世遺物の分類.....	141
第17回	包含層出土遺物 (11).....	127	第18回	土師質土器類の法量分布.....	141
第18回	包含層出土遺物 (12).....	128	第19回	土師質土器類の法量分布.....	141
第19回	包含層出土遺物 (13).....	129	第20回	漆解引復元例.....	153
第20回	包含層出土遺物 (14).....	131	第21回	S H 1005出土漆解引復元案.....	156

## 表目次

第1表	因国藏岩自動車道 (徳島～篇) 埋蔵文化財調査地.....	4	第32表	S A 1007出土遺物観察表.....	191
第2表	前田遺跡石材別石器組成表.....	136	第33表	S K 1004出土遺物観察表 (1).....	191
第3表	阿波国内における畿内産瓦類の搬入状況.....	148	第34表	S K 1004出土遺物観察表 (2).....	192
第4表	第11調査区出土瓦器集計表.....	149	第35表	S K 1004出土遺物観察表 (3).....	193
第5表	検出遺構一覧表 竪穴住居.....	177	第36表	S K 1004出土遺物観察表 (4).....	194
第6表	検出遺構一覧表 割立柱建物.....	177	第37表	S K 1060出土遺物観察表 (1).....	195
第7表	検出遺構一覧表 集石土坑.....	177	第38表	S K 1060出土遺物観察表 (2).....	196
第8表	検出遺構一覧表 土坑 (1).....	178	第39表	S K 1018出土遺物観察表.....	196
第9表	検出遺構一覧表 土坑 (2).....	179	第40表	S K 1024出土遺物観察表.....	196
第10表	検出遺構一覧表 土壇瓦.....	180	第41表	S K 1027出土遺物観察表.....	197
第11表	検出遺構一覧表 鍛冶・鋳造遺構.....	180	第42表	S K 1037出土遺物観察表.....	197
第12表	検出遺構一覧表 炭窯.....	180	第43表	S K 1045出土遺物観察表.....	197
第13表	検出遺構一覧表 溝.....	180	第44表	S K 1049出土遺物観察表.....	198
第14表	S K 1065出土遺物観察表.....	181	第45表	S K 1063出土遺物観察表.....	198
第15表	S B 1001出土遺物観察表.....	181	第46表	柱穴出土遺物観察表 土器 (1).....	198
第16表	S B 1002出土遺物観察表.....	182	第47表	柱穴出土遺物観察表 土器 (2).....	199
第17表	S B 1003出土遺物観察表 (1).....	182	第48表	柱穴出土遺物観察表 石器.....	199
第18表	S B 1003出土遺物観察表 (2).....	183	第49表	平安時代遺構内出土遺物観察表 (1).....	200
第19表	S B 1004出土遺物観察表 (1).....	183	第50表	平安時代遺構内出土遺物観察表 (2).....	201
第20表	S B 1004出土遺物観察表 (2).....	184	第51表	中世遺構内出土遺物観察表 (1).....	201
第21表	S B 1004出土遺物観察表 (3).....	185	第52表	中世遺構内出土遺物観察表 (2).....	202
第22表	S B 1004出土遺物観察表 (4).....	186	第53表	中世遺構内出土遺物観察表 (3).....	203
第23表	S B 1005出土遺物観察表 (1).....	186	第54表	中世遺構内出土遺物観察表 (4).....	204
第24表	S B 1005出土遺物観察表 (2).....	187	第55表	中世遺構内出土遺物観察表 (5).....	205
第25表	S B 1005出土遺物観察表 (3).....	188	第56表	S H 1005出土遺物観察表 (1).....	205
第26表	S A 1001出土遺物観察表.....	189	第57表	S H 1005出土遺物観察表 (2).....	205
第27表	S A 1002出土遺物観察表 (1).....	189	第58表	S H 1005出土遺物観察表 (3).....	206
第28表	S A 1002出土遺物観察表 (2).....	190	第59表	S H 1005出土遺物観察表 (4).....	207
第29表	S A 1003出土遺物観察表.....	190	第60表	S H 1005出土遺物観察表 (5).....	207
第30表	S A 1004出土遺物観察表.....	190	第61表	S H 1005出土遺物観察表 (6).....	208
第31表	S A 1006出土遺物観察表.....	191	第62表	S H 1005出土遺物観察表 (7).....	208
			第63表	包含層出土遺物観察表 (1).....	209

第64表	包含層出土遺物観察表 (2)	210
第65表	包含層出土遺物観察表 (3)	211
第66表	包含層出土遺物観察表 (4)	212
第67表	包含層出土遺物観察表 (5)	213
第68表	包含層出土遺物観察表 (6)	214
第69表	包含層出土遺物観察表 (7)	215
第70表	包含層出土遺物観察表 (8)	216
第71表	包含層出土遺物観察表 (9)	217
第72表	包含層出土遺物観察表 (0)	218

第73表	包含層出土遺物観察表 (1)	219
第74表	包含層出土遺物観察表 (2)	220
第75表	包含層出土遺物観察表 (3)	221
第76表	包含層出土遺物観察表 (4)	222
第77表	包含層出土遺物観察表 (5)	223
第78表	包含層出土遺物観察表 (6)	224
第79表	包含層出土遺物観察表 (7)	225
第80表	包含層出土遺物観察表 (8)	226

## 図版目次

図版 1	(1) 調査区遠景 南より (2) 調査区近景 (1~9 調査区) 北より
図版 2	(1) S B 1001 炉内遺物出土状況 (2) S B 1001 完掘状況 南より
図版 3	(1) S B 1002 完掘状況 西より (2) S B 1003 完掘状況 東より
図版 4	(1) S B 1004 完掘状況 東より (2) S B 1001 周辺
図版 5	(1) S B 1002 から S B 1004 (2) S B 1005 遺物出土状況 西より
図版 6	(1) S B 1005 高杯出土状況 (2) S B 1005 完掘状況 西より
図版 7	(1) S A 1001 東より (2) S A 1002 西より
図版 8	(1) S A 1003 西より (2) S A 1004 東より
図版 9	(1) S A 1006 東より (2) S A 1007 北より
図版 10	(1) S A 1008 東より (2) S K 1004 検出状況 北より
図版 11	(1) S K 1004 エゴノキの実出土状況 (2) S K 1004 エゴノキの実出土状況
図版 12	(1) S K 1060 遺物出土状況 北より (2) S K 1060 遺物出土状況
図版 13	(1) S K 1060 遺物出土状況 (2) S K 1024 完掘状況 南より
図版 14	(1) S K 1037 完掘状況 北西より (2) S K 1045 遺物出土状況 西より
図版 15	(1) S K 1063 遺物出土状況 北より (2) 第 3 調査区南平 北より

図版 16	(1) S K 1034 遺物出土状況 北より (2) S K 1061 遺物出土状況 北より
図版 17	(1) S H 1001 完掘状況 北より (2) S O 1002 検出状況 東より
図版 18	(1) S O 1005 検出状況 東より (2) S O 1006 検出状況 東より
図版 19	(1) 柱穴内遺物出土状況 (2) 柱穴内遺物出土状況
図版 20	(1) S H 1005 遺物出土状況 (2) S H 1005 遺物出土状況
図版 21	(1) S H 1005 遺物出土状況 (2) S H 1005 完掘状況
図版 22	出土遺物 (1)
図版 23	出土遺物 (2)
図版 24	出土遺物 (3)
図版 25	出土遺物 (4)
図版 26	出土遺物 (5)
図版 27	出土遺物 (6)
図版 28	出土遺物 (7)
図版 29	出土遺物 (8)
図版 30	出土遺物 (9)
図版 31	出土遺物 (0)
図版 32	出土遺物 (0)
図版 33	出土遺物 (0)
図版 34	出土遺物 (0)
図版 35	出土遺物 (0)
図版 36	出土遺物 (0)
図版 37	出土遺物 (0)
図版 38	出土遺物 (0)
図版 39	出土遺物 (0)

図版40	出土遺物	08
図版41	出土遺物	08
図版42	出土遺物	09
図版43	出土遺物	09
図版44	出土遺物	09
図版45	出土遺物	09
図版46	出土遺物	09
図版47	出土遺物	09

図版48	出土遺物	09
図版49	出土遺物	09
図版50	出土遺物	09
図版51	出土遺物	09
図版52	出土遺物	09
図版53	出土遺物	09
図版54	出土遺物	09
図版55	出土遺物	09

## 写 真

写真1	遺跡見学風景	9
写真2	作業風景	10

## IV 表 図版

1					
図1	前田S H1001小鉄塊	167	図3	前田S H1003鉄滓	167
図2	前田S H1002鉄滓	167	図4	前田S H1005銹鉄片	168
表1	徳島県板野郷土成町前田遺跡の小鉄塊・鉄滓・銹鉄片の化学組成	166	図5	前田S O1006鉄滓	168
2					
図1	銅塊外観	169	図12	銅滓組成像(×400)	173
図2	銅滓外観	170	図13	Cu (×400)	173
図3	銅塊、銅成像(×60)	171	図14	Si (×400)	174
図4	図3の拡大(×400)	171	図15	Ca (×400)	174
図5	Cu (×400)	171	図16	Al (×400)	174
図6	Sn (×400)	171	図17	K (×400)	175
図7	Pb (×400)	172	図18	Mg (×400)	175
図8	As (×400)	172	図19	Fe (×400)	175
図9	S (×400)	172	図20	O (×400)	175
図10	Ag (×400)	172	図21	Na (×400)	175
図11	O (×400)	173	表1	銅塊、銅滓の成分分析値(%)	170

## 付図目次

付図1	遺構配置図(第1・2調査区)	付図7	遺構配置図(第14・15・16調査区)
付図2	遺構配置図(第3調査区)		
付図3	遺構配置図(第6調査区)		
付図4	遺構配置図(第7調査区)		
付図5	遺構配置図(第11調査区)		
付図6	遺構配置図(第13・14調査区)		

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として整備された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年(1973)10月19日「道路建設特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施工命令が出され(昭和54年3月2日整備計画変更、施工命令)、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I、Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I、Cを結ぶ、区間延長44.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住I、C(追加I.C)の施工命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会(以下「県教委」という。)は、昭和60年～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局(以下「公団」という。)は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間にかかる58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年为目标となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター(以下「センター」という。)を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡(暫定分約340,000㎡)、事業地区面積のほぼ13パーセントにあたる文化財対象地が確定した。(第1図)

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターの委託契約は元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。ま

た、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行することによって層厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度には33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から工事の工程を勘案の上、調査を進め、当該区間の調査を完了した。(第1表)。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

ところで、本センターは発足の段階で多数の派遣教員を擁していたため、調査担当者の人事異動等により、発掘調査と整理業務の連携を図ることが必要であった。従って初年度より統一の調査基準を策定し、併せて検出された全ての遺構についてカード化(遺構の位置、計測値、埋積土、出土遺物、遺物の年代・種別の記入)を行い、基礎資料を整備し、状況変化への対応を図った。この作業は将来的にデータベース化し個々の遺構・遺物の検索に利用できることを目標としているが、記入にかなりの作業量を伴っている。

本報告は調査担当と整理業務担当が異なったため、遺構カードを基にした報告ではあるが、調査担当者の意図と報告内容の調整は今後も検討することが必要である。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長	日下 昭(平成元・2年度)	佐藤信博(平成3・4年度)
	柴田 広(平成5年度)	
総務課長	吉田 寛(平成元・2年度)	木内正幸(平成3年度)
	岡本一仁(平成4・5年度)	
主 事	佐藤 馨(平成2～4年度)	三木和文(平成5年度)
研究補助員	扶川道代	
臨時補助員	田村隆子 上田曉美	
	岸いくみ 大岸さとみ	
	福原幸恵 柴田みのり	
	藤川淑江 安芸敦子	
調査課長	桑原邦彦(平成元・2年度)	羽山久男(平成3・4年度)
	紀伊司郎(平成5年度)	

調整係長	菅原康夫 (平成元年度)	島巡賢二 (平成2～5年度)
技 師	森長 進 (平成元・2年度技術主任)	堀江隆治 (平成3・4年度)
	酒井彰彦 (平成5年度)	
調査係長	島巡賢二 (平成元年度)	
	菅原康夫 (平成2～5年度)	

調査担当

第1次調査

研 究 員	高岡 裕 (当時)	浅尾忠明 (当時)
	近藤隆弘 (当時)	

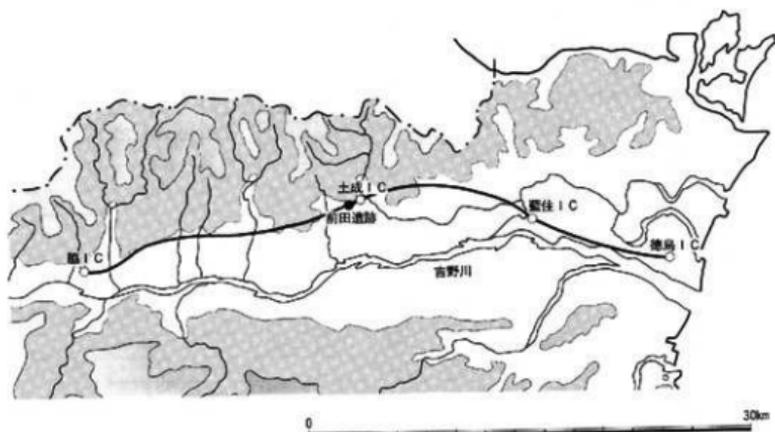
研究補助員	大森秀樹 (当時)	十川道雄 (当時)
-------	-----------	-----------

第2次調査

研 究 員	高岡 裕 (当時)	中野健次 (当時)
	近藤隆弘 (当時)	横畠道彦 (当時)

調査報告書作成業務

研 究 員	辻 佳伸	市原健次 (当時)
	安友克佳 (当時)	中野健次 (当時)
	九十九肇	桑原正晴 (当時)



第1図 四国縦貫自動車道(徳島～脇)路線図

第1表 四国縦貫自動車道（徳島～脇岡）埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		
5	赤坂遺跡 (I)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		報告書第1集所収
6	赤坂遺跡 (II)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		報告書第1集所収
7	赤坂遺跡 (III)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000		報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡 (I)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		
9	桜ノ岡遺跡 (II)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			
10	桜ノ岡～東正広 遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神～八ノ原 遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上喜米遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260	
14	大俣山路～大俣 字谷遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250	
15	上喜米経子～中佐 古遺跡	阿波郡市場町上喜米	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡 (I)	阿波郡市場町尾開	11			11	
17	八坂遺跡 (II)	阿波郡市場町尾開	360	360			
18	八坂遺跡 (III)	阿波郡市場町尾開	114			85	29
19	八坂遺跡 (IV)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000			
20	口吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡 (I)	阿波郡市場町切幡	60		60		
22	古田遺跡 (II)	阿波郡市場町切幡	510	510			
23	神山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60	
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2	
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町泊池	2,730	2,730			報告書第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100	本報告書所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		
30	北門～涼堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広呼～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50			50	
33	那ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	法教田遺跡 (I)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡土成町引野	2,140			2,140	
39	岡郷遺跡	板野郡土成町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡土成町引野	1,330		1,330		報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡土成町引野	3,980		3,110	870	報告書第1集所収
42	明神堂古墳群	板野郡土成町引野	194		80	114	

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650	
44	新浜遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142
46	萬葉谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330	
47	萬葉谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	萬葉谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷溝跡遺跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	聖天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷竈跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	353			65	288
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	340		340		
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220		
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	40	40			
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975	
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125	
66	東中富遺跡	板野郡紫住町東中富	760			550	210
67	前須遺跡	板野郡紫住町徳命	876			625	251
68	新辰須遺跡	板野郡紫住町徳命	190				190
		計	133,464				





平成2年度調査

平成3年度調査

0 100m

第3図 調査区位置図

### (3) 調査日誌抄

#### 1次調査

1990年

- 5月10日 機械掘削による試掘調査開始。  
遺物確認。
- 5月12日 試掘トレンチの土層図作成。写真撮影終了。
- 5月21日 調査区内に20mメッシュの基準杭打設。
- 5月29日 発掘調査開始。第8調査区機械掘削開始。
- 5月31日 第6調査区機械掘削開始。
- 6月6日 第8調査区人力掘削開始。
- 6月11日 第8調査区精査、遺構検出。
- 6月13日 第6調査区人力掘削開始。東側精査遺構検出。
- 6月20日 第6調査区西側精査、遺構検出。
- 7月6日 第8調査区遺構掘削開始。
- 7月9日 第8調査区遺構掘削終了。
- 7月10日 第6調査区人力掘削終了。遺構検出終了。
- 7月11日 第6調査区遺構掘削開始。第2調査区北より人力掘削開始。
- 7月17日 第7調査区南より機械掘削開始。
- 7月19日 第7調査区機械掘削終了。第1調査区機械掘削開始。
- 7月20日 第1調査区機械掘削終了。
- 7月23日 第7調査区人力掘削開始。
- 7月30日 第7調査区人力掘削終了。精査、遺構検出。第1調査区人力掘削開始。
- 8月7日 第9調査区機械掘削開始。
- 8月20日 第7調査区遺構掘削。第9調査

区人力掘削開始。

- 8月27日 第7調査区遺構掘削終了。
- 8月31日 第6調査区遺構掘削終了。第9調査区遺構掘削開始。
- 9月6日 空中撮影(6・7・8・9調査区)。  
第2調査区人力掘削開始。
- 10月1日 第2調査区精査、遺構検出。
- 10月2日 第1調査区人力掘削、精査及び遺構検出。第9調査区確認掘削。
- 10月9日 第1調査区遺構掘削。
- 10月15日 第1調査区遺構掘削終了。
- 10月19日 空中撮影(1・2調査区)第8調査区確認掘削。
- 10月22日 第1調査区確認掘削。鴨島第一小学1年生遺跡見学。



写真1 遺跡見学風景

- 10月23日 第10・11・12調査区、機械掘削による試掘調査開始。11・12調査区において遺物確認。
- 10月29日 第10・11・12調査区試掘終了。
- 11月2日 一条小学校児童見学。
- 11月5日 第3調査区機械掘削開始。
- 11月8日 第3調査区人力掘削開始。
- 11月14日 第3調査区精査、遺構検出。
- 11月15日 第6調査区確認掘削。
- 11月16日 第11調査区機械掘削開始。
- 11月20日 第12調査区機械掘削開始。第10

- 調査区人力掘削開始。
- 11月22日 第3調査区遺構掘削。
- 11月26日 第11調査区人力掘削開始。
- 11月29日 第3調査区遺構掘削開始。
- 12月5日 第10調査区精査、遺構検出。
- 12月6日 第10調査区遺構掘削開始。
- 12月13日 空中撮影（3・10調査区）。
- 12月14日 第11調査区精査、遺構検出。
- 12月17日 第5調査区確認掘削。
- 12月21日 第10調査区、第12調査区確認掘削。
- 12月25日 第11調査区遺構掘削開始。
- 1991年
- 1月9日 第11調査区遺構掘削終了。第10調査区確認掘削。
- 1月14日 第11調査区確認掘削。第12調査区人力掘削開始。
- 1月23日 第12調査区遺構掘削開始。
- 1月30日 第12調査区遺構掘削終了。
- 2月4日 調査終了。

## 2次調査

- 1991年
- 4月9日 機械掘削による試掘調査開始。遺物確認。
- 4月12日 試掘トレンチの土層図作成。写真撮影終了。
- 7月1日 第13調査区機械掘削開始。
- 7月3日 第14調査区機械掘削開始。
- 7月5日 第13調査区人力掘削終了。
- 7月10日 第14調査区人力掘削開始。
- 8月1日 第14調査区精査、遺構検出。
- 8月2日 第14調査区一部遺構掘削開始。
- 8月6日 第16調査区機械掘削開始。第15調査区機械掘削。

- 8月9日 第15調査区人力掘削開始。
- 8月20日 第16調査区人力掘削開始。
- 9月11日 第16調査区精査、遺構検出。遺構掘削開始。
- 9月20日 第14調査区遺構掘削終了。
- 9月30日 第16調査区遺構掘削終了。
- 10月4日 調査終了。



写真2 作業風景

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

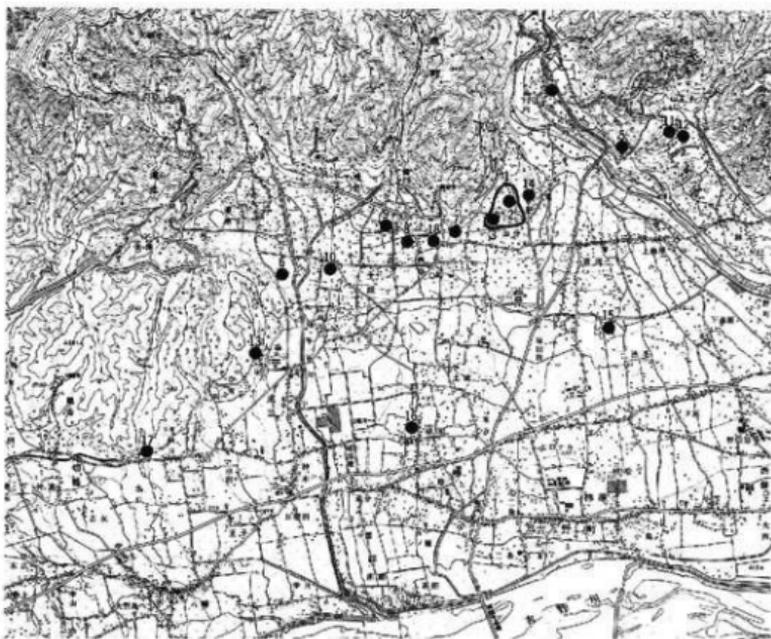
前田遺跡は、徳島県板野郡土成町前田に所在する。土成町は古野川左岸中流域にあって北を阿讃山脈が占める。この阿讃山脈は白亜系和泉層群により構成されており、これを浸食する形で東に宮川内谷川、西に九頭宇谷川が南流する。この両河川は浸食した阿讃山脈の土砂を下流へ堆積し、大規模な扇状地を形成する。さらに近隣の小河川(鈴川谷川、椋原谷川、熊谷川、日吉谷川、指谷川等)が形成する小規模な扇状地と重なりあい、県内最大規模の複合扇状地となっている。また遺跡の東側には宮川内谷川の浸食作用により形成される段丘地形が発達している。

前田遺跡はこうした複合扇状地上の狭視的にみれば遺跡中央を南流する熊谷川が形成した小規模な扇状地扇頂部に位置する。遺跡は南向きの緩斜面上にあり、現地表面の標高はおおよそ70~80mを調る。遺跡の内側は北池に接している。北池の成立年代は不明であるが、鈴川谷川の扇状地扇尖部の中央構造線上を東西にはしる2本の断層により形成された地溝状地(通称カミガクボ)内にできた自然池である。

### 2 歴史的環境

前田遺跡周辺の遺跡は、発達した扇状地上と阿讃山脈から張り出した支尾根上に展開される。

旧石器時代の遺跡としては、前田遺跡の東側、宮川内谷川右岸の中位段丘上に県内最大の旧石器散布地である椎ケ丸遺跡<sup>(1)</sup>が存在する。椎ケ丸遺跡は、主に表面採取により、サヌカイト製のナイフ形石器、撚器、翼状剥片等およそ1,000点以上の旧石器時代の遺物が確認されている。昭和53年に県教育委員会により調査され、ナイフ形石器をはじめとし、縄文時代~中世にわたる幅広い時期の遺物が確認された<sup>(2)</sup>。この調査地から更に南に下った地点が平成2年埋蔵文化財センターで調査を行った椎ケ丸~芝生遺跡<sup>(3)</sup>である。この調査においても安定した出土状態はみられなかったものの旧石器時代の遺物が多数出土している。また宮川内谷川左岸の古期扇状地上にはナイフ形石器が採集された宮川内遺跡<sup>(4)</sup>、中位段丘上には宮ノ尾遺跡<sup>(5)</sup>がある。また宮川内谷川の西を南流する九頭宇谷川により形成される扇状地上には金蔵~上井遺跡が存在する<sup>(6)</sup>。平成元年にセンターにより調査され、石材にチャートを主体とした旧石器が確認されている。このように当地域の旧石器時代の遺跡群は阿讃山脈



- |                |             |            |           |
|----------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 椎ヶ丸遺跡       | 6. 金蔵〜上井遺跡  | 11. 向山古墳群  | 16. 穴薬師古墳 |
| 2. 椎ヶ丸遺跡 (県教委) | 7. 土成前田遺跡   | 12. 岩屋古墳   | 17. 秋丹城跡  |
| 3. 椎ヶ丸〜芝生遺跡    | 8. 北原〜大法寺遺跡 | 13. 赤田山古墳  | 18. 前田遺跡  |
| 4. 宮川内遺跡       | 9. 北原遺跡     | 14. 御所神社古墳 |           |
| 5. 宮ノ尾遺跡       | 10. 峠延遺跡    | 15. 廻塚     |           |

第4図 周辺の遺跡分布図

より南流する河川に沿った扇状地上、あるいは段丘面上に展開する。

縄文時代にはこの付近では明確な形での遺跡の確認はされていない。唯一昭和62年に県教育委員会により調査された土成前田遺跡<sup>(7)</sup>において縄文時代に属する可能性のある土坑が2基報告されている。出土した土器はいずれも小片であり時期の特定は困難である。

弥生時代に入り当地域では遺跡数の増加がみられる。まず前述の土成前田遺跡からは中期末葉の集石土坑が確認されている。椎ヶ丸〜芝生遺跡からも弥生時代中期末葉の竪穴住居3軒、集石土坑1基が確認された。更に西側に目を転じると直近300mに位置する北原〜大法寺遺跡<sup>(8)</sup>は平成2年センターにより調査され、弥生時代中期末葉から後期初頭にかけての竪穴住居跡1軒、土坑群が確認された。鈴川谷川扇状部に位置する北原遺跡<sup>(9)</sup>は昭和61、62年にわたり県教育委員会により調査された。当遺跡からは弥生時代中期末葉の竪穴住居1軒、

集石土坑、土坑群が確認された。更に同扇状地扇央部には弥生時代中期の峰延、大木両遺跡が確認されている<sup>(90)</sup>。以上のように前田遺跡周辺の弥生時代の遺跡は中期に出現し、中期末から後期にかけて最も規模が増大したものであり、その分布範囲も宮川内谷川と九瀬字谷川の両扇状地上におよそ2kmにわたる。これらほぼ同時期と考えられる弥生集落はいずれも小規模なもので、前田遺跡において当地域の中心的な集落の一端が確認されたといえる。

当地域で古墳時代の集落は未確認である。そこで古墳を基に述べる。古墳は、阿讃山脈の南麓支尾根上に立地するもの、扇状地上に立地するものの2通り見られる。前者として向山古墳群<sup>(91)</sup>、岩屋古墳(向山1号墳)<sup>(92)</sup>、赤田山古墳<sup>(93)</sup>、御所神社古墳<sup>(94)</sup>があり、後者として姫塚<sup>(95)</sup>、穴薬師古墳<sup>(96)</sup>がある。岩屋古墳は横穴式石室を持つ円墳である。時期については副葬品などの報告例がないため不明である。赤田山古墳は出土遺物のうち玉類の写真が残り、これによると古墳時代後期に属する可能性が考えられる。姫塚は小円墳、穴薬師古墳は破損が著しいが横穴石室を持つ円墳である。

歴史時代の遺跡としては、峰延遺跡で平安から鎌倉時代にかけての建物跡が検出されている。前出の金蔵～上井遺跡では平安時代と考えられる炭窯群が報告されている。土成前田遺跡では9世紀末～10世紀頃の須恵器焼成窯の存在が指摘されている。また鎌倉時代後半と考えられる溝と鉄滓を多量出土した土坑が検出されており調査者は該期の小規模製鉄の存在の可能性を考えている。このほか未報告であるが土成町高尾の法教田遺跡<sup>(97)</sup>において戦国期から近世初頭頃の遺構と遺物が見ついている。

現在の土成町は旧御所村と旧土成村が合併して昭和30年に誕生した。それ以前は御所村は板野郡に、前田遺跡のある土成村は阿波郡に属していた。「和名類聚抄」によると10世紀の阿波国内には板野郡、阿波郡など7つの郡が存在していたことがわかり、阿波郡内には高井、秋月、香美、拜師の4郷が記載されている。近年平城京跡の調査で明らかになった長屋王邸宅跡からも「阿波国阿波郡小麦 宝亀七年」と記された木簡が出土している<sup>(98)</sup>。秋月郷についても、平城宮跡より「阿波国阿波郡秋月郷麻木物部小龍一俵」の記載のある木簡<sup>(99)</sup>が出土しており、阿波郡内から中央に向けて、米、小麦などの穀類の貢賦が行われていたことがうかがわれる。これら4郷はそれぞれ先学によりその所在地が比定されているが、前田遺跡の所在する土成町前田がどの郷に含まれるか、または含まれないかは不明である。

古代寺院は、発掘調査でその存在が確認されたものはないが、江戸時代末期熊谷寺西方の法地が谷の門堂より奈良時代の複弁八葉蓮弁の軒丸瓦と平安時代の軒平瓦数片が採集されており、法輪寺跡と推定されている<sup>(100)</sup>。高尾字西谷と吹越神社境内からは平安中期以前とされる骨蔵器が出土している<sup>(101)</sup>。現存する写真によるといずれも須恵器の葉蓋(高台付短頸蓋)であり、西谷の例は発見時の記述からすると蓋を伴っていたようである。

南北朝時代には秋月に阿波国守護細川氏の守護所として秋月城がおかれ、以後細川氏が板

野郡勝瑞に守護所を移すまで領国支配の拠点となった。その存立期間は建武三年(1336)～明徳二年(1391)と推定されている<sup>(21)</sup>。中世荘園としては「京都御齊東山御文庫記録」の応永二十年(1413)に「法金剛院領阿波国秋月荘守護押領致」の記載がある。そのほか日置荘、柿原荘、岡衝領都原が知られている。

## 注

- (1) 天羽利夫「徳島県の遺跡」『日本の旧石器文化』3 雄山閣 1976  
高橋正則「徳島県土成町椎ヶ丸遺跡の旧石器」『旧石器考古学』27旧石器文化談話会 1983
- (2) 徳島県教育委員会「椎ヶ丸遺跡(岡地区)」『徳島県文化財調査概報』昭和53年度 1978
- (3) 久保脇美朗「椎ヶ丸～芝生遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991
- (4) 高橋正則「徳島県宮川内谷川流域の遺跡」『旧石器考古学』31 旧石器文化談話会 1985
- (5) (4) に同じ
- (6) 徳島県教育委員会「金蔵～上井遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』1993
- (7) 徳島県教育委員会「土成前田遺跡」『泉道船戸切幅上板線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989
- (8) 久保脇美朗「北原～大法寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991
- (9) 徳島県教育委員会「土成町北原遺跡」『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1988
- (10) 菅原康夫「日本の古代遺跡37 徳島」保育社 1988
- (11) 土成町史編纂委員会『土成町史 上巻』土成町 1975
- (12) (10) に同じ
- (13) (10) に同じ
- (14) 徳島県教育委員会「御所神社古墳」『徳島県文化財調査概報』昭和53年度 1978
- (15) (10) に同じ
- (16) (10) に同じ
- (17) (6) に同じ。福家清司氏よりご教示。
- (18) 奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館 1991
- (19) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』6
- (20) (10) に同じ
- (21) (10) に同じ
- (22) 本田昇「守護所秋月城存立期間についての一考察」『史窓』21 徳島地方史研究会 1990

#### 参考文献

- 地学団体研究会吉野川グループ「土成町の地形・地質と古生物」『総合学術調査報告土成』 土成町  
阿波学会 徳島県立図書館 1990
- 土成町史編纂委員会『土成町史 上巻』 土成町 1975
- 『角川日本地名大辞典36 徳島県』 角川書店 1986
- 菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』 保育社 1988

### III 調査成果

#### 1 基本層序

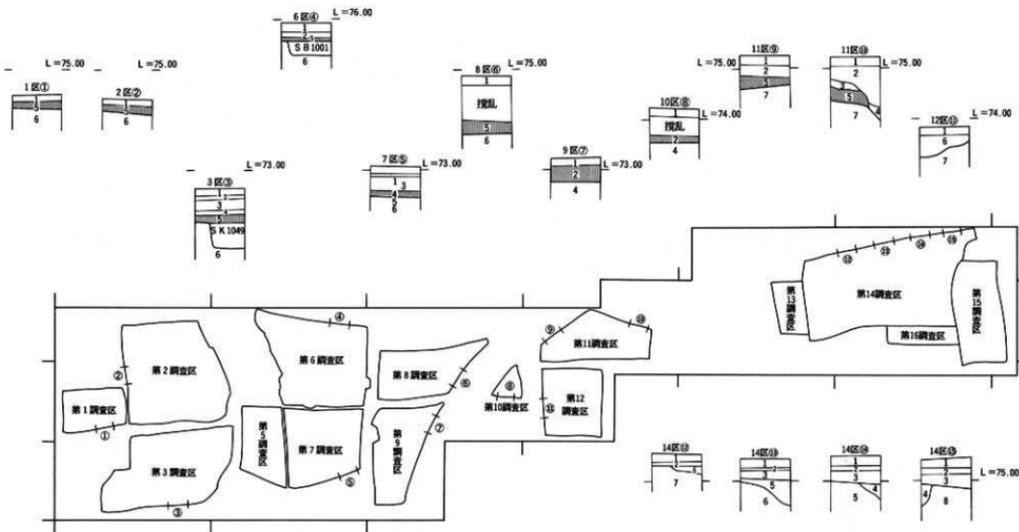
本遺跡は、前述の通り扇状地上に位置する。調査区は扇状地の扇頂部を東西に横断する形で設定され、内端の第1調査区から東端の第16調査区までの総延長距離は370mに及ぶ。各調査区の間は道路や用水路、河川などで隔てられている。また、旧流路も時期を変えて幾本か確認されており、この旧流路にともなうと思われる部分的な押し出しや、耕作にともなう削平、盛土が施される。このため地点により土層の堆積に相違が多く認められ、調査区ごとの土層のつながりや遺構面の対応関係については不明な部分が多い。そのため土層の説明については各調査区ごとに行う。本遺跡の土層断面の観察は基本的に各調査区の内壁について行ったが、記録はそれぞれの任意の地点を遺構掘削終了後幅1mにつき深掘りトレンチを掘削し、無遺物の基盤層までを含めた土層柱状図(第5図)を作成した。

本遺跡の現地表面の標高は最も高い地点が第6調査区の北側で約75.9m。また最も低い地点は第9調査区の南側で約71.2mを測り、扇状地の傾斜に沿って北から南に向かい緩やかに下る。各調査区の遺構面の現地表面からの深さは0.3~0.8mであるが、特に盛土を施していない場合は0.4m前後と比較的浅めである。以下に各調査区の基本的な土層の堆積状況を述べる。

第1調査区から第3調査区は調査前は水田や畑として利用されており表土の下に部分的に床上が認められ、その下に弥生~中世の遺物を含む包含層が堆積する。遺構面は地表から0.4~0.6mで、弥生、平安、鎌倉の各時代の遺構が同一面で確認できた。第1調査区は北側の半分に削平を受けており、南側の一部に包含層が確認された①。北側の削平部分の遺構面上に堆積する遺物を含む層は耕作に伴う盛土であると考えられる。遺構自体は、削平を受けている北側により多く確認されたが、これは削平がそれほど深くなかったためと考えられる。第2調査区も同じく北側の半分以上を遺構面の直上まで削平されており、南側に包含層が残る②。遺構自体も南側により多く検出された。第3調査区はそのほとんどが遺構面の直上まで削平されている。調査区の南東部には新田2枚の耕作土が確認されたがその下に薄く包含層が堆積していた③。遺構自体は削平の如何に関わらず調査区のほぼ全域で確認された。以上の1~3調査区は似通った堆積を示し、遺構も同一の遺構面上で確認できる。

第4・第5調査区は調査前は畑に利用されていた。耕作土の下は一而旧流路上にあたっており、明確な遺構面や遺構と思われるものは確認できなかった。

第6・第7調査区は調査前は畑として利用されていた。第6調査区は、耕作土の下に、中



第1調査区①～第3調査区③

1. にじい黄褐色10Y R5/4砂質土(表土)
2. 黄褐色10Y R5/8粘質(床土)
3. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土(盛土)
4. にじい黄褐色10E/4砂質土(旧耕作土)
5. 褐色10Y R4/4砂質土(包含層)
6. にじい黄褐色 10Y R5/4 砂質土、小礫多く含む(地山)

第6調査区④～第8調査区⑥

1. にじい黄褐色10Y R4/3砂質土(表土)
2. 灰黄褐色2.5Y R6/2砂質土(盛土)中近世の遺物含む
3. 黄褐色10Y R5/8粘質土(床土)
4. にじい黄色2.5Y R6/4砂質土
5. にじい黄褐色10Y R5/5砂質土(包含層)
6. にじい黄色2.5Y R6/3砂礫土(地山)

第9調査区⑦、第10調査区⑧

1. にじい黄褐色10Y R4/5砂質土(表土)
2. 洗黄色5Y R7/3砂質土(包含層)
3. 明黄褐色10Y R6/8粘質土

第11調査区⑨～第12調査区⑩

1. にじい黄褐色10Y R7/3砂質土(表土)
  2. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土(盛土)
  3. にじい黄褐色10Y R7/4砂礫土
  4. 砂礫層近世遺物多量含む
  5. 褐色10Y R4/4砂質土(包含層)
  6. 砂礫層(自然流路)
  7. 黄褐色10Y R5/5砂質土(地山)
- 第14調査区⑭～⑯
1. にじい黄褐色10Y R5/4砂質土
  2. 黄褐色10Y R5/8粘質土
  3. にじい黄褐色10Y R5/4砂質土(盛土)
  4. 砂礫層(自然流路)
  5. にじい黄褐色10Y R5/3砂質土
  6. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土(砂礫多く含む)
  7. にじい黄褐色10Y R5/4砂質土(礫多く含む)
  8. にじい黄褐色10Y R7/2粘質土(地山)

第5図 基本土層柱状図

近世の遺物を含む盛り土が施されている。その下に弥生～中世の遺物を含む包含層が堆積するが、これは東に行くほど削平が深く、西側において50cmの厚さでみられたものが東側では10cmたらずである④。また北から南にかけて、3筆の畑を築く際に2段にわたり遺構面直上まで段状に切り込んでいる。こうした削平を受けたにも関わらず第6調査区においては4棟の竪穴住居を含む多くの遺構が検出できた。第7調査区は北側半分が遺構面まで削平され、その土を南半分に盛り土している。このため北側においては遺構が検出できなかったが、南側においては比較的安定した包含層の下に多くの遺構が検出できた⑤。第8調査区では主に北半分で削平を受けており包含層の確認はできなかった。削平された土砂は調査区の南半分に客土されており包含層上に堆積している。更に調査区の東壁においては、渠道船戸・切橋線造成時のものと思われる盛り土が厚さ70cm余り盛られていた。この盛り土を除去すると下部より6・7調査区と同様の包含層が認められた⑥。なお6～8調査区の遺構面となるおよび黄褐色砂礫土は1～3調査区の遺構面と異なるものである。

第8調査区の南側の第9調査区では南側半分は基盤層に達する削平により包含層、遺構は確認できず、北側半分で包含層が確認された⑦。この包含層は内容的には1～8調査区の出土遺物と変わらないが、土色や礫の含有状況からすると、これらとは異なった堆積であると考えられる。また包含層の下に堆積する基盤層も粘土質であり、この調査区を境に西側と東側では堆積の状況が異なることがわかった。この堆積状況の差異は、第2調査区と第6調査区の間を南流する旧河道の影響によるものと考えられる。第9調査区と同様の堆積状況は渠道をはさんで東側に位置する第10調査区においても確認された。第10調査区も北側の半分は基盤層に達する削平を受け、その土砂が南半分に客土されておりその下層より包含層及び遺構面が確認できた⑧。以上のように第1調査区～10調査区までは大要3種類の異なる堆積の基に遺構面（弥生～中世）が確認された。

熊谷寺への参道をはさんで東側の第11調査区は調査前は水田に利用されており、耕作土、床上の下からは中世の遺物を多量に含む包含層が確認された⑨。この包含層は西から東に向かい厚さを増す。調査区の東端では基盤層が急激に低下し、砂利層となる。この砂利層中には江戸時代後半の陶磁器が多量に含まれており該期の熊谷川旧河道であると考えられる⑩。11調査区の南側の12調査区は11調査区との比高差が1.4mとかなり低下しており、北側の一部において11調査区と一連の包含層が確認されたにすぎない。その下層より2筋の自然流路が検出されている⑪。この2筋の流路は11調査区と同一の基盤層を削り込み南流し、いずれも幅8m以上と規模の大きなものである。このうち東側の流路中より平安時代の須恵器が出土している。西側の流路は埋土中より遺物の出土はなく時期は不明であるが、これら2筋の流路に挟まれて島状に基盤層が残る地点では、弥生時代後期初頭の集石土坑が1基のみ検出されている。

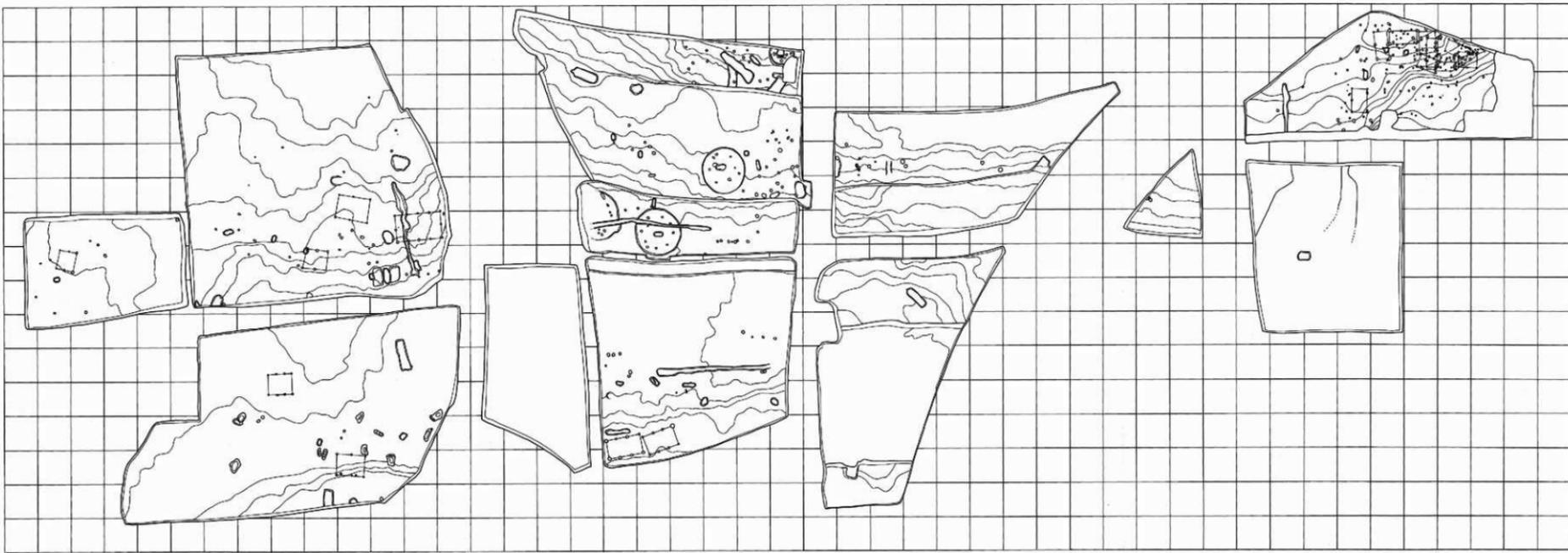
第13～16調査区は、平成3年度の2次調査による。いずれも調査前には水田として利用されており、耕作土の下には10cm前後の床土が盛られていた。床土以下の層序は各調査区により大きく異なっていた。特に西側の13調査区から東側の16調査区の半ばにかけては北西から南東方向に押し出す、礫を多量に含む層が3層にわたり堆積しており、地点により遺構面となる層が異なるため、遺構の把握には困難を極めた。これら流路の押しだしと思われる堆積は調査区の北西部を南流する熊谷川の旧流路によるものと思われる。遺構面の地表からの深さは地表から30cm余りと浅く⑫、堆積した押し出し層が後世の削平を受けていることがわかる⑬。基盤層である粘質土層は14調査区の東側に認められる⑭。調査区の西側では確認できなかったが、厚く堆積する押し出しの下部にあるものと思われる。また14調査区の中央部やや東寄りでは、幅10m余りの自然流路が検出されている⑮。この自然流路の埋土の上面において中世の炭窯が検出されている。

以上のように第1調査区～16調査区までの層序を概観してきたが扇状地扇頂部を東西に長く横断する調査区の設定となったため、熊谷川を中心とした阿讃山脈から南流する小河川による押し出しや流路変更等による影響を大きく受けた複雑な堆積状況を示すことが確認できた。

## 2 遺構と遺物

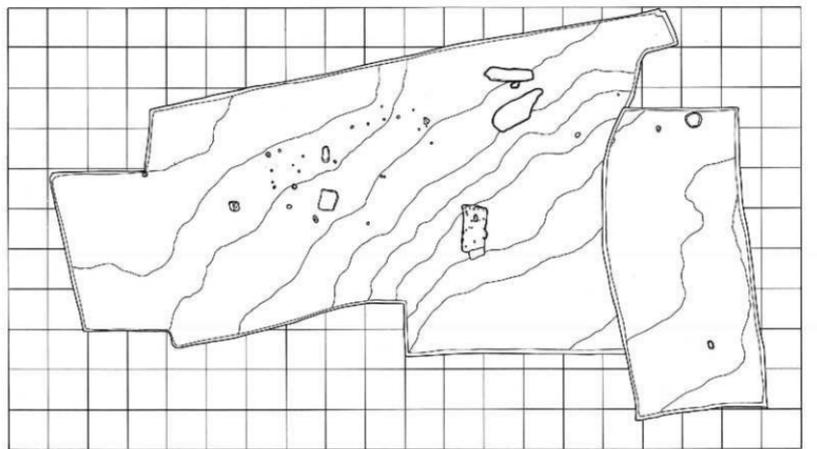
遺構の配置については第6・7図に示すとおりである。縄文時代の遺構としては調査地の東端において土坑が2基検出されている。出土遺物からみて縄文時代後期前半にあたる。調査地の西側に弥生時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡8棟、土坑16基が確認されている。これら弥生時代の遺構は北東から南西にかけて緩やかに下る緩斜面上に位置し、等高線に沿った弧状に配置された竪穴住居をとりかこむような形で掘立柱建物跡、土坑が検出された。また調査地の東端第14調査区において竪穴住居跡1軒、土坑1基が確認された。これら弥生時代の遺構は出土遺物からみて中期末葉から後期初頭にかけてのものと考えられる。平安時代の遺構は土坑が3基、調査地西側に集中してみられた。中世の遺構は調査地の全域にみられたが、掘立柱建物8棟は11調査区に、鍛冶遺構6基は第2調査区に、炭窯4基は第6調査区北側にと遺構ごとにとまわりをもって検出されている。これら中世の遺構は出土遺物からすると13世紀から15世紀にわたるものであるが中心となる時期は13世紀代のものである。近世の梵鐘鋳造関連遺構は調査地の東端第15調査区で検出された。周囲に近世の遺構はなく、1基のみが単独で検出されている。

### (1) 縄文時代

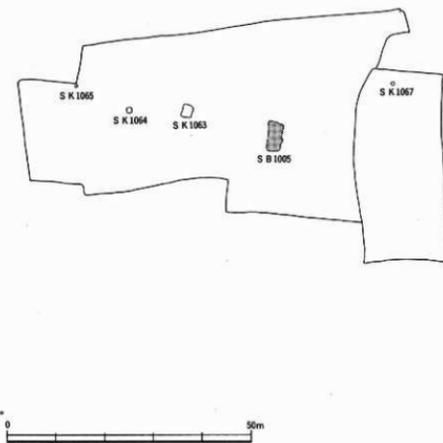
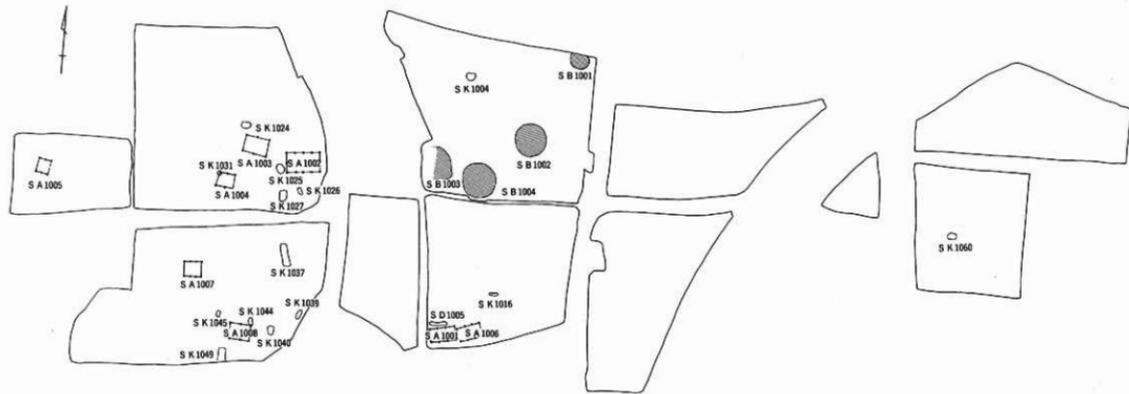


0 20m

第6図 遺構配置図(1)



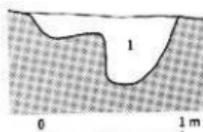
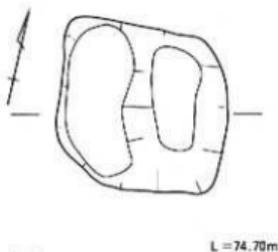
第7回 遺構配置図(2)



第8図 縄文・弥生時代の遺構配置

### 64号土坑 (S K 1064) (第9図)

第14調査区西側T-67で検出された。平面形は不整形を呈し、長軸120cm、短軸115cm、深さは西側の浅い部分で20cm、東側の深い部分で51cmを測る。壁は、西側で緩やかに立ち上がり、東側は急角度で立ち上がる。底面は浅い部分も深い部分も南北方向に長い楕円形を呈する。覆土は1層であり、西側の浅い部分と東側の深い部分での分層はできなかった。覆土中より縄文土器片が2点出土しているが図化不能である。

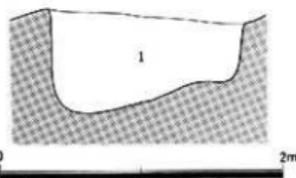
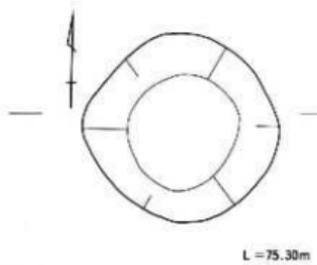


1. による黄褐色10YR5/3砂質土

第9図 S K 1064実測図

### 65号土坑 (S K 1065) (第10図)

第14調査区北東隅T-65で検出された。S K 1064の西側に位置する。平面形は不整形を呈し長軸70cm、短軸68cm、深さは深い部分で36cm、浅い部分で22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は東側から西側に向かい徐々に深くなる。覆土は1層であり、炭化物が多く認められた。覆土上部より縄文土器の破片が20点程出土している。



1. による黄褐色10YR4/3砂質土

第10図 S K 1065実測図

### 出土遺物 (第11図)

1は深鉢形土器の口縁部である。平口縁で口縁部から7条1組の沈線を垂下させる。口縁端部には棒状工具の側面圧痕による刻目を施す。縄文時代後期前半のものである。



第11図 S K 1065出土遺物実測図

## (2) 弥生時代

### 竪穴住居

#### 1号竪穴住居 (SB1001)

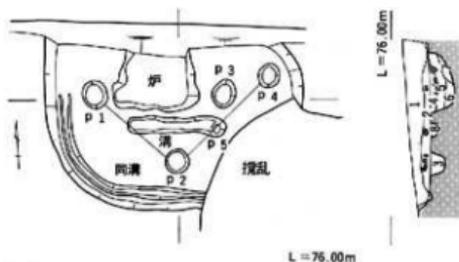
##### (第12図)

第6調査区の北東隅、Q-31で検出した。北側3分の1程は調査区外に延びており、南東部の一部を後世の擾乱により切られている。本住居は第6調査区で確認された4軒の竪穴住居中最も北側に位置するものである。平面形は擾乱等により全体が明らかでないが

残存部からして、隅丸の方形状を呈するものと思われる。長軸360cm、短軸は残存長で235cm、深さは最深部で34cmを測り、他の3軒の住居に比べて小形である。覆土は2層に分層でき、特に下層において礫を多量に含む。炉は床面中央部で検出した。長軸120cm、短軸90cm、深さ54cmの平面形方形のファイアーピットである。埋土は焼土、炭化物を多量に含んでおり、3層に分層できる。また、炉の埋土上層からは砂岩の礫と共に、壺形土器が2個体分出土している。柱穴は床面に4基確認しており、径36~40cm、深さ7~17cmを測る。主柱穴は柱穴の位置からして、P1・P2・P4であり、4本柱であったと考えられる。周溝は床面の南西部に隅丸の壁に沿う形で検出された。幅10cm、深さ3cmである。南東部に関しては擾乱のため不明である。また炉の南側には長さ140cm、幅20cmの浅い溝が確認された。住居内の間仕切りに関係したものと思われる。本住居跡の覆土及び炉内からは弥生土器片140点、土製品2点、石器4点、サヌカイト剥片、結晶片岩片が出土した。

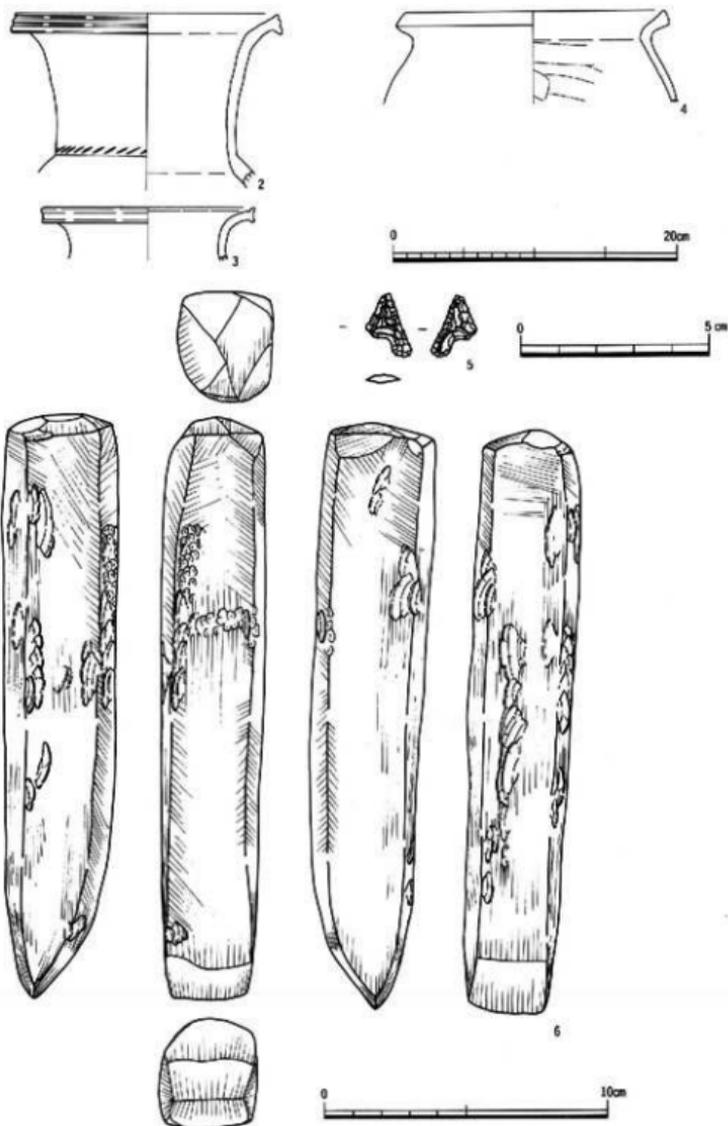
#### 出土遺物 (第13・14図)

2・3は炉内出土の壺形土器である。2は口縁端部に2条の凹線を巡らし、頸部と体部の境に左下がりの屈正痕文を1列巡らせる。3は口縁端部に幅広の凹線状のヨコナデを施す。4は覆土出土の壺形土器である。口縁端部はやや肥厚し、方形気味におさめる。内面は口縁直下まで横位のヘラケズリが施される。5はサヌカイト製の石鏃である。全面にわたり微細な調整が施され、基部に大きな袂りを持つ凹基鏃である。6は完形の柱状片刃石斧である。



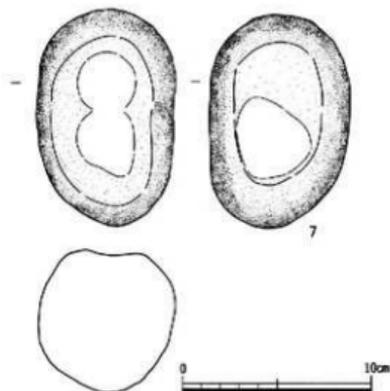
- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 1. 褐色10Y R4/1砂質土     | 5. 暗褐色10Y R3/3砂質土  |
| 2. 灰褐色10Y R5/2砂質土    | 6. 暗褐色10Y R3/3砂質土  |
| 3. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 | 7. 暗褐色10Y R3/3砂質土  |
| 4. にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土 | 8. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土 |

第12図 SB1001実測図



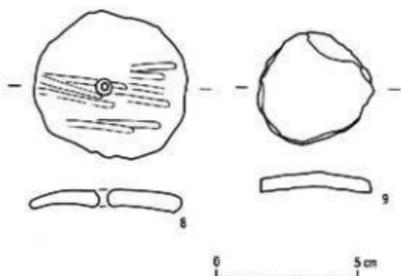
第13图 SB1001出土遺物実測図 (1)

全面にわたり研磨痕が認められる。研磨方向は、ほとんどは長軸に平行しているが基部において斜行するもの、直交するものが認められる。中央部の稜付近には一部敲打痕をとどめる。7は砂岩製の磨石である。長軸の表裏2面に使用面が認められる。8・9は土器片利用の紡錘車である。8は器面にヘラミガキをとどめ、縁辺を丁寧に調整し、中央部に穿孔する。9は未穿孔である。



## 2号整穴住居（SB1002）（第15図）

第6調査区の中央部、M・N-29・30で検出した。1号住居跡の南約10mの地点に位置する。床面の平面形は、ほぼ円形であり長軸660cm、短軸535cm、深さは最深部で20cmを測る。床面の面積は33.7㎡である。全体に遺構の遺存状態は良く、覆土は4層に分層できる。炉は床面中央部のやや北寄りに検出した。長軸152cm、短軸97cm、深さ30cmの平面形楕円形のファイヤーピットである。

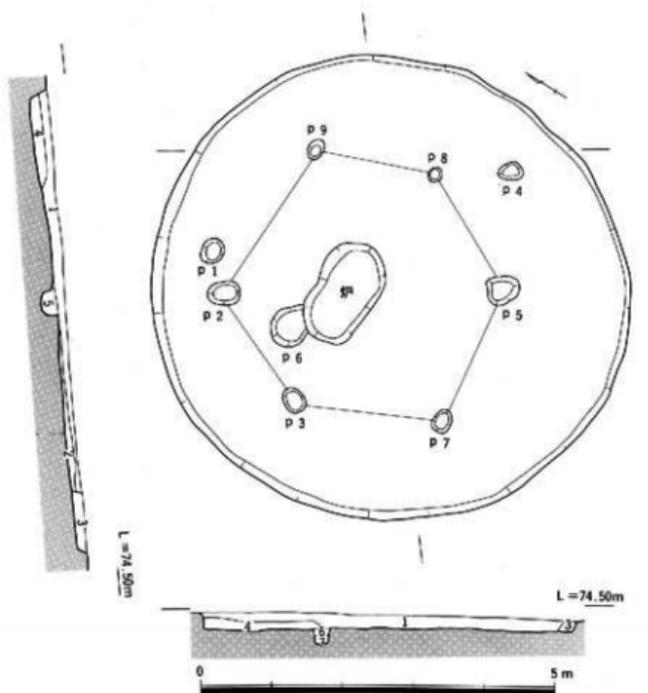


第14図 SB1001出土遺物実測図（2）

埋土は3層に分層できるが特に下層において炭化物、礫を多く含む。柱穴は床面に9基確認できた。径24～56cm、深さ17～26cmをはかり、埋土は概ね1ないし2層に分層できる。主柱穴は中央の炉を取り囲む形で検出されたP2・P3・P7・P5・P8・P9の6基であろう。床面中央寄りのP6は大きさや中央の炉によって切られるなど他の柱穴に比べ特異な点からすると柱穴ではなく炉に付随した施設とも考えられる。本住居跡の覆土からは、弥生土器片360点、土製品2点、石器10点、サヌカイト剥片、結晶片岩片等が出土した。

## 出土遺物（第16図）

10・11はサヌカイト製の石鏃である。10は長さ3.8cmの大型の有茎鏃である。11は長めの基部を持つ凸基鏃である。12～14は結晶片岩製の打製石庖丁である。いずれも扁平な横長の剣



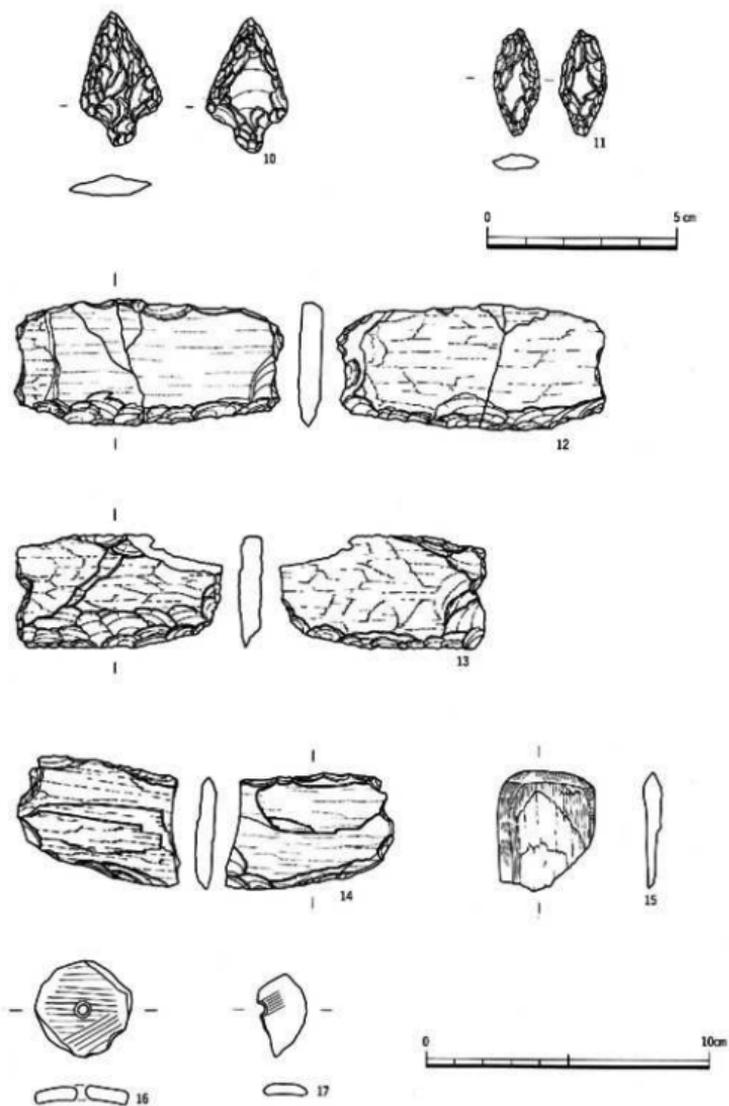
- |                  |                    |                    |
|------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 | 4. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 6. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 |
| 2. 暗灰色2.5Y5/2砂質土 | 5. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 | 7. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土 |
| 3. 黄褐色2.5Y5/3砂質土 |                    |                    |

第15図 SB 1002実測図

片を素材としている。12は完形で一側縁に刃部を作り出し、両端に袂りを持つ。13・14も欠損品ではあるが一端に袂りを持つ。15は扁平両刃石斧の刃部の破片と考えられる。刃縁部と側縁部のみ研磨されている。16・17は土器片を利用した紡錘車である。共に器面にハゲメをとどめ、中央部に両面から穿孔している。

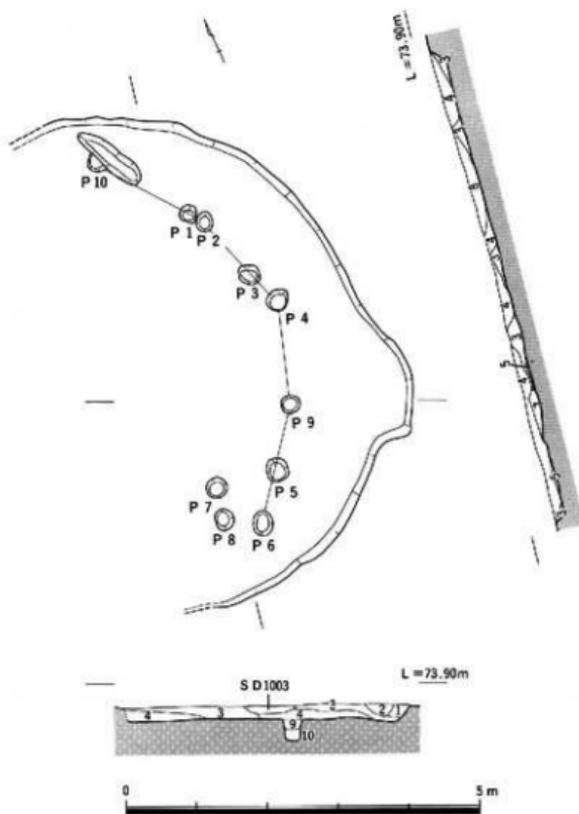
### 3号竪穴住居 (SB 1003) (第17図)

第6調査区の南西隅、L・M-25・26で検出した。本調査区の竪穴住居の中では最も西に位置している。本住居の中央部は、中世の溝SD 1003により切られており、西半分は後世の削平を受けて確認できなかった。床面の平面形はほぼ円形におさまるものと思われるが、南東部に200×50cmの長方形の張り出しを持つ。長軸682cm、短軸は残存長で410cm、深さは最



第16圖 S B 1002出土遺物実測図

深部で20cmを測る。覆土は8層に分層できるが、中世の溝や削平の影響を受けたためか複雑な堆積を示す。炉跡は、他の住居跡から考えて床面のほぼ中央部に位置すると思われるが確認できなかった。柱穴は床面の壁際に沿うような形で10基検出できた。いずれも直径30cm前後、深さ17~31cmを測る。埋土は1ないし2層に分層できる。主柱穴は床面東側にほぼ等間隔で壁に沿って並ぶ5基の柱穴P10・P2・P4・P9・P6から考えると8~10本柱で構成された可能性が高い。本住居跡の覆土中より弥生土器片110点、石器7点、サヌカイト剥片等が出土している。

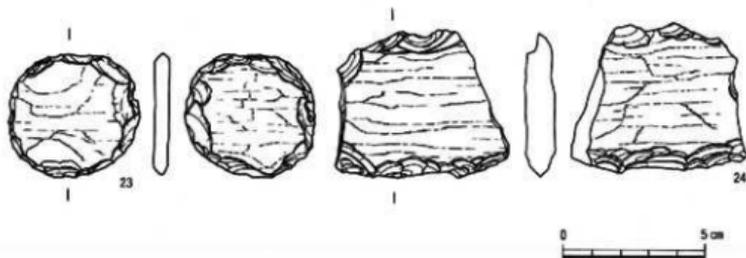
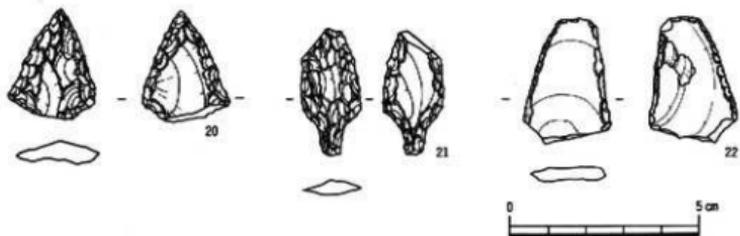
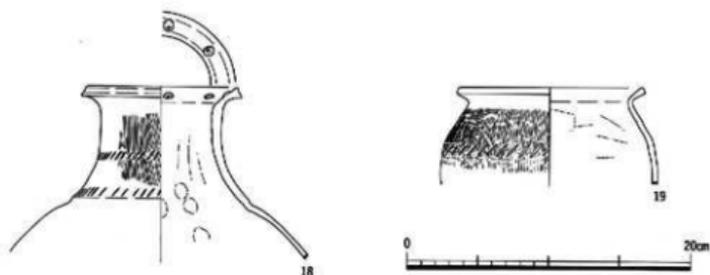


- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| 1. オリーブ黄色5Y6/3砂質土  | 6. にぶい黄色10Y R4/3砂質土   |
| 2. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 7. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土    |
| 3. 黄褐色2.5Y5/3砂質土   | 8. 黄褐色2.5Y5/4砂質土      |
| 4. 黄褐色2.5Y5/4砂質土   | 9. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土    |
| 5. にぶい黄色2.5Y6/4砂質土 | 10. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土 |

第17図 SB 1003実測図

#### 出土遺物 (第18図)

18は壺形土器である。口縁内面に円形浮文を貼りつけ上面に棒状工具による刺突文を施す。端部には弱い凹線状のヨコナデを施し、頸部外面にはクテハケを施した後に2列の竇圧痕文



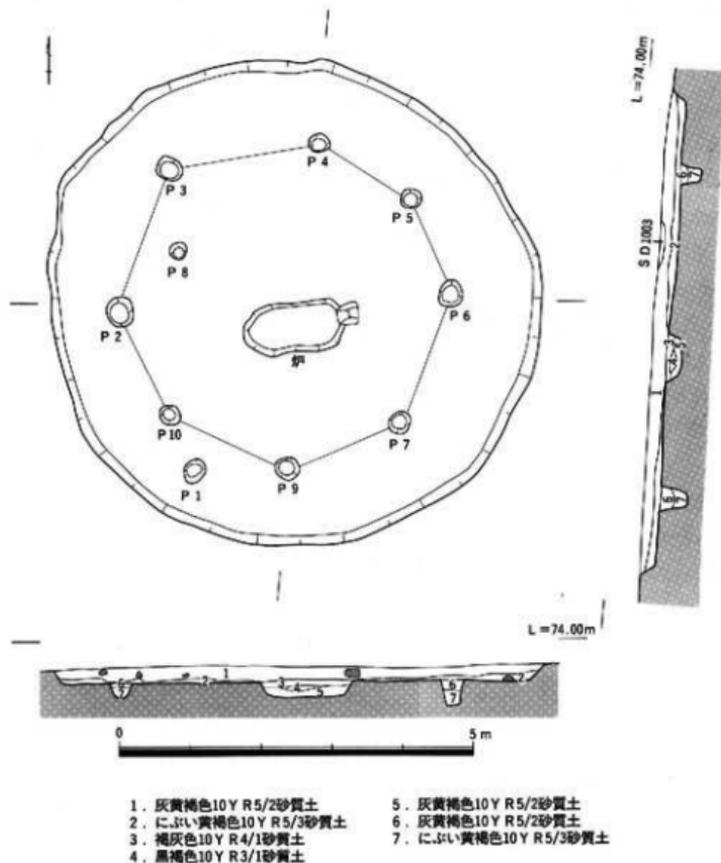
第18図 S B 1003出土遺物実測図

を巡らせる。19は、壺形土器である。口縁部は「く」字状に外反し、端部は方形気味におさめる。体部外面はタテハケを施した後に最狭部やや口縁よりに1列の寛庄痕文を巡らせる。20～22はサヌカイト製の石鏃であり、いずれも片面もしくは両面に一次剝離面をとどめる。20は基部を欠損しているが大型の有茎鏃である。鏃身は三角形を呈する。21は有茎鏃である。先端を欠損しているが鏃身はやや細目の木の葉形を呈する。22は表裏面に一次剝離面をとどめ、縁辺部にも調整を行っている。スクレイパーとも考えられるが調整が両面に及んでいるため石鏃とした。23は結晶片岩の周縁を円盤状に打ちかいたものである。中央部に穿孔の

痕跡は認められず、ここでは円盤状石製品としておきたい。24は結晶片岩製の打製石庖丁である。やや厚手の横長の剝片を素材としている。両端を欠損しているが両側縁に調整を施し刃部を作り出している。

#### 4号竪穴住居 (SB 1004) (第19図)

本住居跡は第6調査区の南端、K・L-27・28で検出した。4軒の竪穴住居の中では最も南に位置し、西側およそ5mの地点には3号竪穴住居跡がある。本住居跡も3号竪穴住居跡



第19図 SB 1004実測図

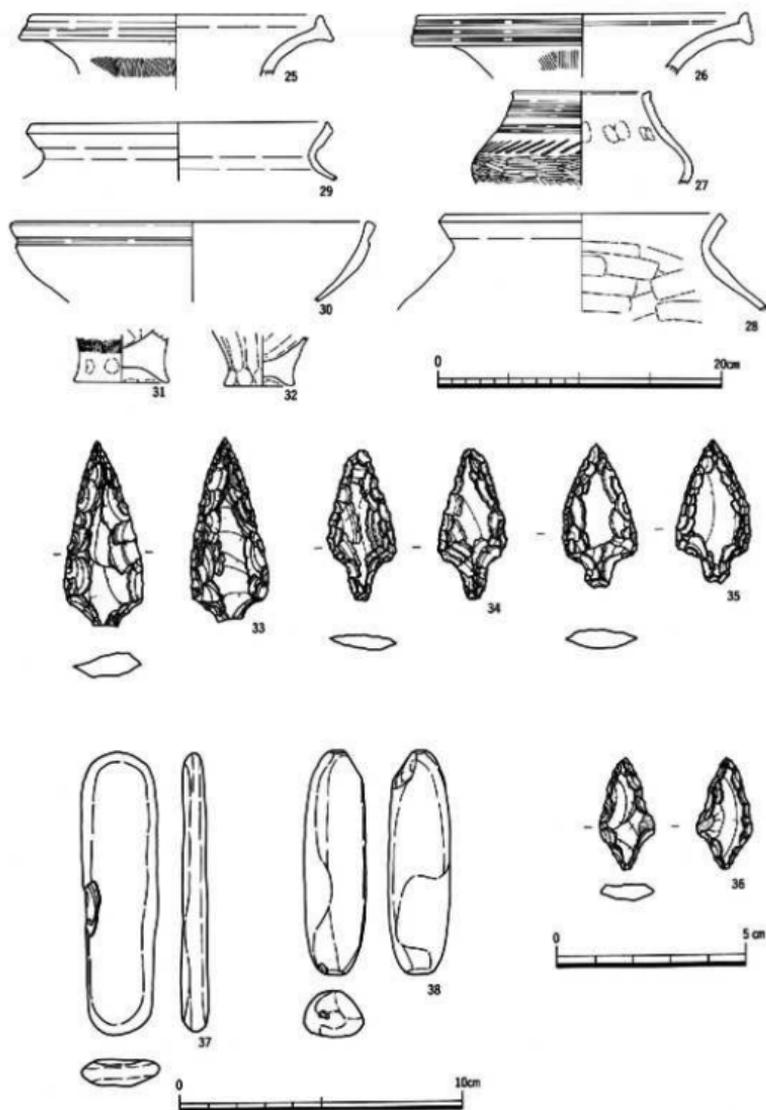
と同様に中央部北寄りを中世の溝SD1003に切られている。床面の平面形はほぼ円形で長軸695cm、短軸668cm、深さは最深部で22cmを測り、床面の面積は34.4m<sup>2</sup>である。覆土は2層に分層できる。炉は床面の中央部やや南寄りに検出された。長軸144cm、短軸68cm、深さ22cmの平面楕円形のファイアーピットである。埋土は炭化物を多く含み、3層に分層できる。炉の東端床面上から砂岩製の台石を検出した。柱穴は床面に10基確認できた。直径24~40cm、深さは14~34cmで埋土はすべて2層に分層できる。主柱穴は中央の炉を囲むようにほぼ等間隔で並ぶ8基の柱穴P2・P3・P4・P5・P6・P7・P9・P10が考えられる。本住居跡の覆土中より弥生土器片750点、土製品21点、石器23点、サヌカイト剥片130点が出土している。

#### 出土遺物 (第20~22図)

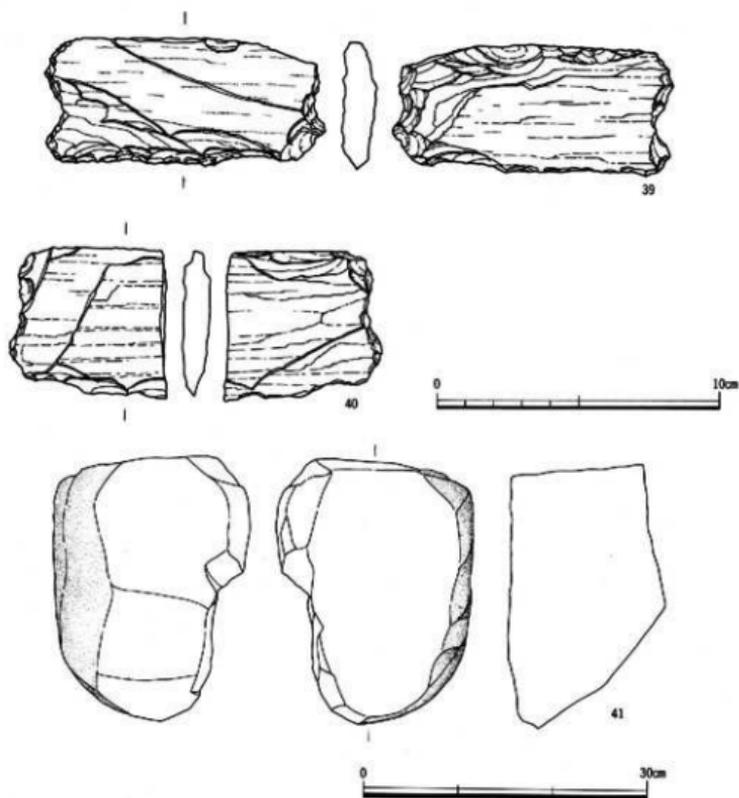
25・26は壺形土器の口縁部である。25は口縁端部に2条の不明瞭な凹線、頸部外面にタテハケを施す。26は口縁端部に3条の凹線、頸部外面にタテハケを施す。27は無頸壺である。口縁部外面に凹線5条、体部はヘラミガキ、体部との境に篋疔文を巡らせる。28・29は壺形土器である。口縁端部を28は方形におさめ、29はつまみあげて尖り気味におさめる。28は口縁部直下まで横位のヘラケズリが施される。30は鉢形土器である。口縁直下に凹線を1条施す。31・32は壺形土器の底部である。ともに上げ底である。33~36はサヌカイト製の石鏃である。33~35は大型の有茎鏃でいずれも一次剥離面を残し、調整は縁辺部のみに行われる。36は長めの基部を持つ凸基の鏃であり、一部に自然面をとどめる。37・38は磨石である。37は扁平な面に磨痕、側縁に敲打痕を持つ。39・40は結晶片岩製の打製石庖丁である。39は完形で一側縁に両面から調整を加え直線的な刃部を作り出しており、両端には挟りを持つ。40は一次剥離により一側縁に刃部を作り出しており、一端には挟りを持つ。41は炉の横に据えてあった砂岩製の台石である。上下二面に使用面を持ち、砥石としての機能が考えられる。42~62は土器片利用の紡錘車である。完形のもの、破損しているもの、未製品等21点が主に埋土から出土した。このうち器面に調整をとどめるものとしては、ハケメ(42・45・46・49・51~57・59~62)、ヘラミガキ(47)がある。全て土器の破片の周縁を打ちかいて成形されており、中心孔は全て両面穿孔である。60は土器外面からの穿孔が途中で放棄されている。61・62は未穿孔である。

#### 5号住居跡 (SB1005) (第23図)

本住居跡は第14調査区の中央部南寄り、Q・R-73・74で検出した。1~4号竪穴住居跡とは200m以上東側に隔っており、周囲には20m程西にSK1063と少数の柱穴が確認されているのみである。平面形は、南東隅の一角を攪乱により切られているものの、隅丸の長方形

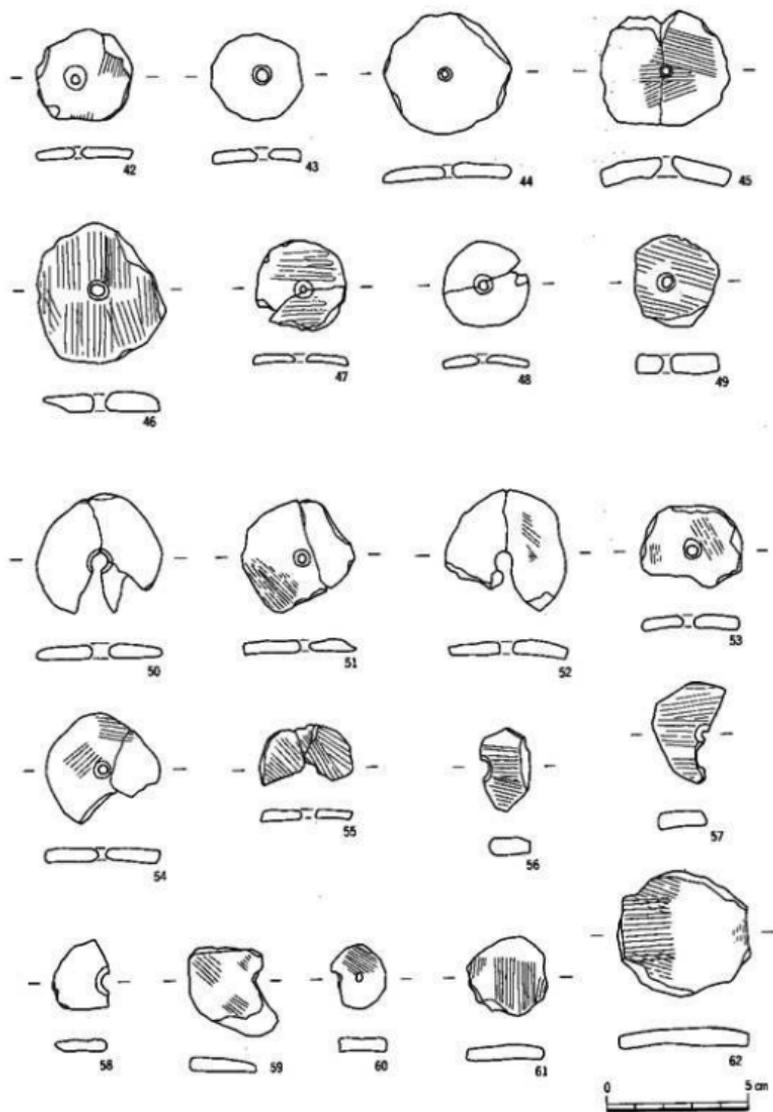


第20图 SB1004出土遺物実測図 (1)



第21図 SB1004出土遺物実測図 (2)

を呈する。東側長側縁の中央部には30cm×74cmの長方形の張り出しが認められる。規模は長軸600cm、短軸320cm、深さは最深部で28cm、床面の面積は16.7㎡を測る。炉は床面の北寄りで検出された。平面形は隅丸の長方形で長軸88cm、短軸48cm、深さ18cmを測るファイヤーピットである。埋土にはふい赤褐色の焼土であり、炭化物、土器片を含む。柱穴は床面に16基確認できた。いずれも不整形を呈し、直径22～48cm、深さ12～40cmで、埋土は2～3層に分層できる。主柱穴は壁際に並ぶ12基の柱穴（P1～P5・P10・P12・P13・P16・P15・P11・P7）で構成される。このうちP3とP14は床面の長軸両端に位置し、棟持柱としての機能が考えられる。P8とP9は炉をはさむ形で対になり検出されている。また北側と南西側の壁際に周壁溝が確認された。幅10cm前後、深さ5cmで途切れ気味に検出されているが



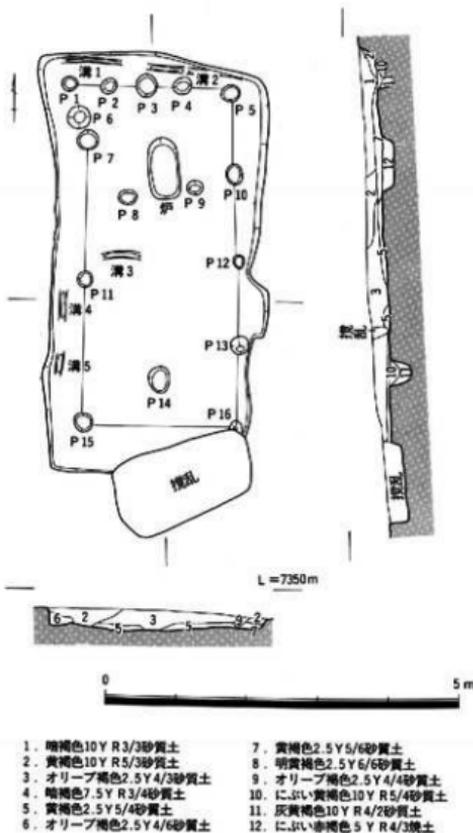
第22图 S B 1004出土遺物実測図 (3)

元は一連のものであったと考えられる。床面の中央部に検出された溝3は床を南北に分ける形に設けられており他の周壁溝とは異なる目的、たとえば間仕切の様な機能を持つものと考えられる。覆土は炭化物を多く含み、9層に分層できる。本住居跡の覆土中より弥生土器片530点、石器4点、サヌカイト片が出土している。

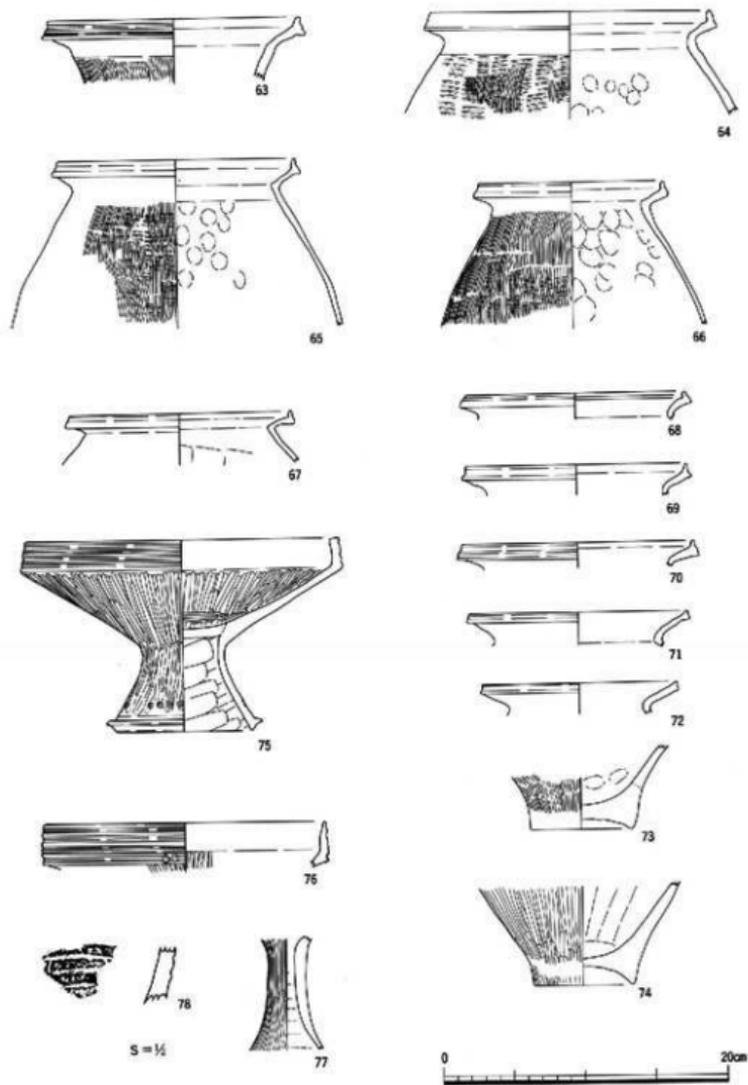
#### 出土遺物 (第24・25図)

63は壺形土器である。頸部から口縁部にかけて外反する。口縁端部を上下に拡張し擬凹線を2条施す。64~72は甕形土器である。64は口縁部をわずかに肥厚し端部をつまみ上げ擬凹線を1条施す。体部外面にはタタキのちたてハケを部分的に施す。65は口縁端部を上下に拡張し擬凹線を1条施す。体部外面はタタキのちたてハケを施しタタキを消している。体部内面にはユビオサエを明瞭にとどめる。66は

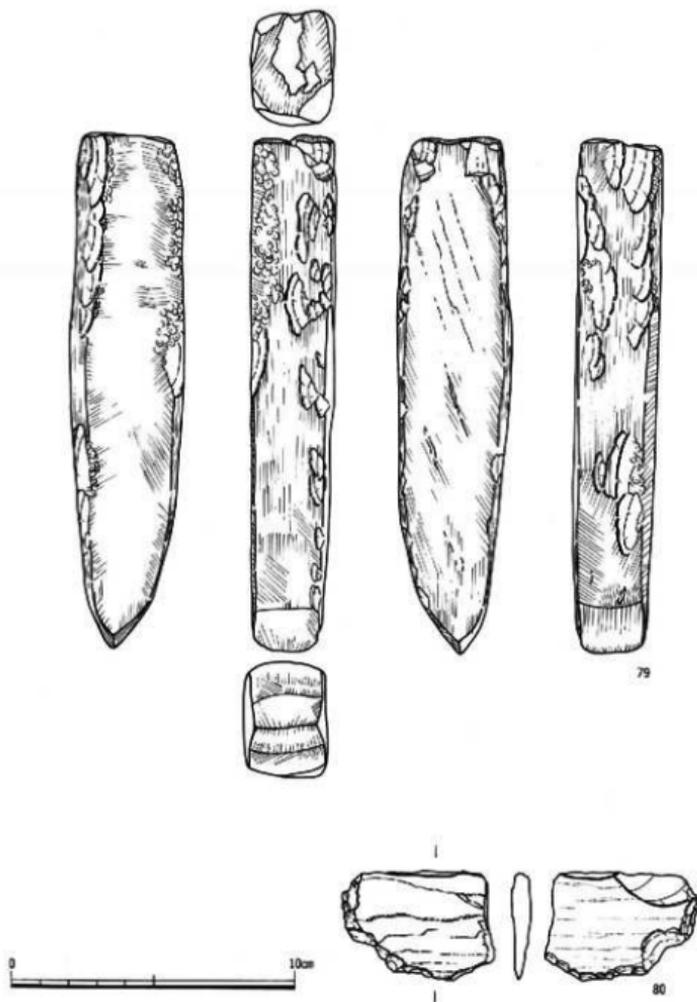
口縁部を強く外反し端部を上方につまみ上げ擬凹線を1条施す。体部内面はタタキのちたてハケを施しタタキを消している。内面にはユビオサエを明瞭にとどめる。67は口縁部を強く「く」字状に外反し端部を上方につまみ上げ擬凹線を1条施す。体部内面には口縁直下までの横位のヘラケズリが認められる。68は口縁端部を上方につまみ上げ擬凹線を1条施す。69は端部を上下に拡張し擬凹線を1条施す。70は口縁部を若干肥厚、上方につまみ上げ擬凹線を2条施す。71は口縁端部を若干上下に拡張し、擬凹線を1条施す。72は口縁端部を方形気味におさめ擬凹線を1条施す。73・74は甕形土器の底部と考えられる。73は外面タテハケ。



第23図 SB 1005実測図

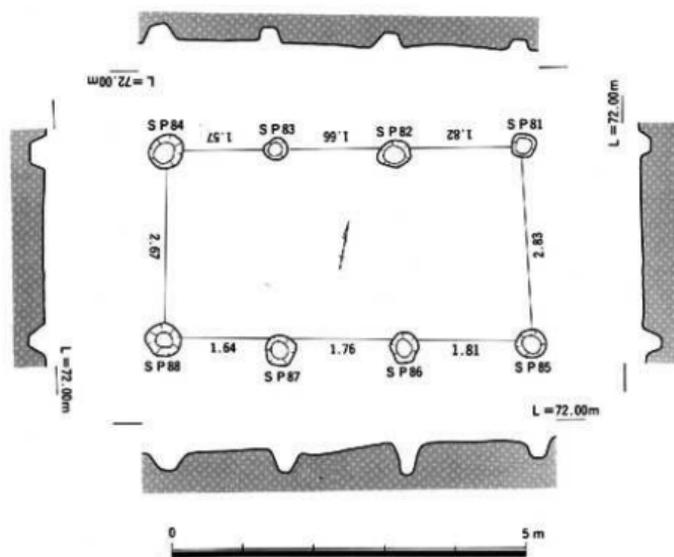


第24图 SB 1005出土遗物实测图 (1)



第25图 SB 1005出土遗物实测图 (2)

74は外面縦位のヘラミガキ、内面ヘラケズリを施す。75はほぼ完形の高杯形土器である。直線的な体部から内傾気味に直立する口縁部を持つ。口縁部外面には凹線を4条施す。体部は内外面ともヘラミガキを密に施す。脚柱部は短く外下方へ開き、裾部に4個1組の竹管による刺突文を巡らせる。76は高杯形土器の口縁部である。直立する口縁は端部を尖り気味におさめ外面に凹線を5条施す。また口縁部と体部の境に2個1組の棒状工具による刺突文を施す。体部は内外面ともヘラミガキを施す。77は高杯形土器の脚柱部である。外面には細い縦位のヘラミガキを入念に施し内面には横位のヘラケズリを施す。78は縄文土器の体部の破片である。数条の平行沈線間を何ヶ所かを沈線で区画する。79は完形の柱状片刃石斧である。全面にわたり研磨痕が認められる。研磨方向は前主面、後主面とも長軸に平行しているが側面において斜行するものが認められる。基部の稜付近には敲打痕をとどめる。80は結晶片岩製の打製石庖丁である。扁平な横長の剣片の一侧縁に調整を加えて刃部を作り出している。本住居跡の時期は出土した土器から考えて弥生時代中期末葉におさまるものと考えられる。

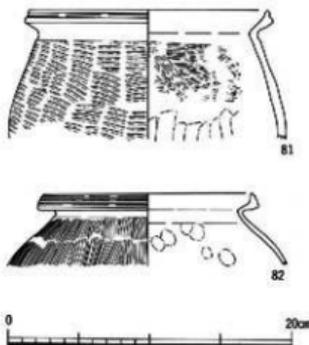


第26図 SA 1001実測図

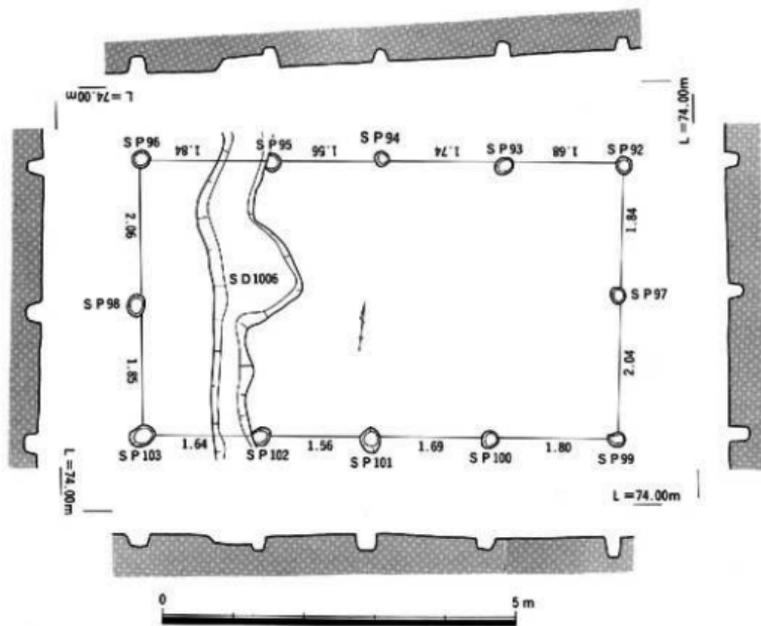
## 掘立柱建物跡

### 1号建物跡 (SA1001) (第26図)

第7調査区南西隅、E・F-26で検出した8基の柱穴により構成される。1～4号竪穴住居の南にあり、東側には近接して7号建物跡 (SA1007) が検出されている。梁間1間 (2.7m)、桁行3間 (4.3m) で、棟方向N-80°-Eであり、斜面に対し平行に向く。柱間寸法は、梁間約2.7m、桁行1.5～1.8mを測る。柱穴掘り方は不整形円形または方形を呈し径35～50cm、深さ15～45cmを測る。埋土は灰黄褐砂質土で、柱痕をとどめるものはない。柱穴掘り方内部より弥生土器片が出土している。



第27図 SA1001出土遺物実測図



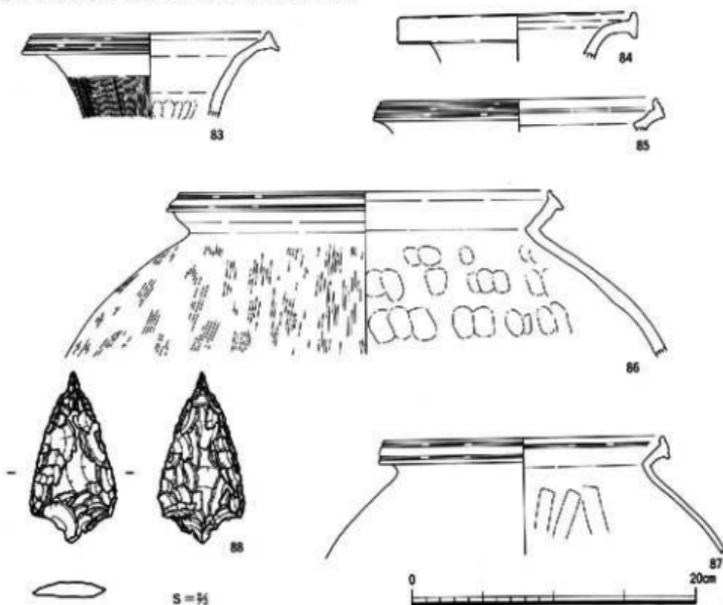
第28図 SA1002実測図

### 出土遺物 (第27図)

81・82は壺形土器である。81は口縁端部に凹線1条、体部外面にタタキ、内面上半にヨコハケ、下半には縦位のヘラケズリを施す。82は口縁端部に凹線3条、体部外面にタテハケ、内面にユビオサエをとどめる。1号建物跡の時期は、出土した土器から考えて、弥生時代中期末葉と考えられる。

### 2号建物跡 (S A 1002) (第28図)

第2調査区の南東隅、L-19~21で検出した12基の柱穴により構成される。1~4号竪穴住居の西側に位置し、近接して3号建物跡 (S A 1003) と4号建物跡 (S A 1004) が検出されている。西側の柱穴は、一部を近世の溝 (S D 1006) により切られている。梁間2間 (3.9 m)、桁行4間 (6.8 m) を測り、本遺跡で検出された建物跡の中では最大の規模である。棟方向はN-84°-Eであり、斜面に対し平行に向く。柱間寸法は、梁間1.8~2.0m、桁行1.5~1.8mを測る。柱穴掘り方は不整形形を呈し、径は20~38cm、深さ24~37cmを測る。埋土は暗褐色砂質土と褐色砂質土の2層に分層でき、柱痕をとどめるものはない。柱穴掘り方内部からは弥生土器片と石器が出土している。



第29図 S A 1002出土遺物実測図

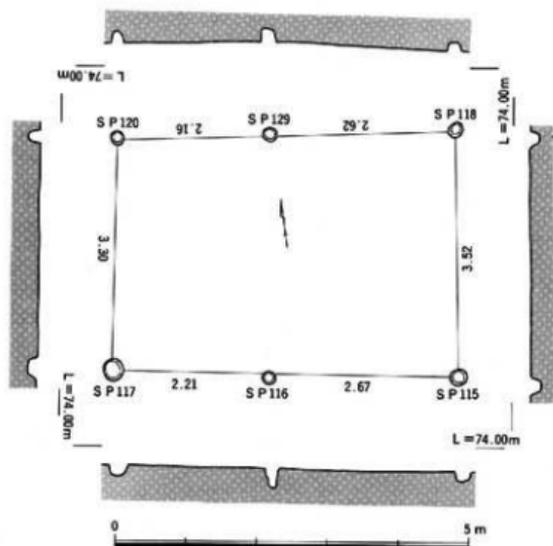
### 出土遺物 (第29図)

83・84は壺形土器、85～87は甕形土器である。83は口縁端部に凹線3条、頸部外面にタテハケを施す。84は口縁端部は付着物により不明、頸部内外面はヨコナデを施す。85は口縁端部に凹線3条を施す。86は口縁端部に凹線2条、体部外面にタテハケを施す。87は口縁端部に凹線2条を施す。88はサヌカイト製の石鏃で大型の有茎鏃である。縁辺全周に入念な調整を加え、先端部には更に微細な調整を加え、鋭く作り出している。

本遺構の所属時期であるが、86の甕形土器は別々の2基の柱穴より出土したものが接合したものであり、これが本遺構の廃絶時の状況を示すものであるとすれば、弥生時代中期末葉におさまるものと考えられる。

### 3号建物跡 (S A 1003) (第30図)

第2調査区中央部、L・M-18で検出した6基の柱穴で構成される。1～4号竪穴住居の西方に位置し、近接して東側に2号建物跡(S A 1002)、南側に4号建物跡(S A 1004)が検出されている。梁間1間(3.4m)、桁行2間(4.8m)で、棟方向はN-80°Wであり、斜面に対し平行に向く。柱間寸法は梁間約3.4m、桁行2.1～2.6mを測る。柱穴掘り方は不整形を呈し、径20～32cm、深さ13～28cmを測る。埋土は褐色砂質土で柱痕はとどめない。柱穴内部から少量の弥生土器片が出土している。



第30図 S A 1003実測図



第31図 S A 1003出土遺物実測図

#### 出土遺物 (第31図)

89は高杯形土器である。外反気味の口縁部外面に3条の凹線、体部内外面には縦位のヘラミガキを施す。本遺構の所属時期は弥生時代中期末葉におさまるものと思われる。

#### 4号建物跡

(S A 1004)

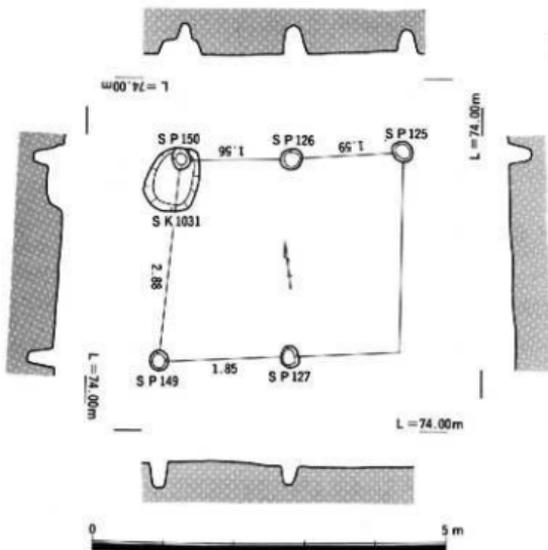
(第32図)

第2調査区の南端K-17で検出された5基の柱穴により構成される。このうち

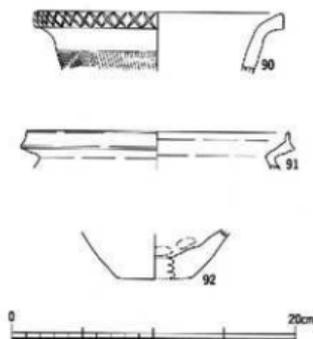
北西隅のS P 1150は同じく弥生時代の土坑S K 1031により切られている。また南東隅の1基は確認できなかったが柱穴の配置状況から1棟の建物をなすものと考えられる。第2調査区で検出された建物跡の内では最も南に位置する。梁間1間(2.9m)、桁行2間(3.1m)で平面形はやや方形に近い形を呈する。柱間寸法は、梁間約2.9m、桁行1.5~1.6mを測る。棟方向はN-79°-Wで斜面に対し平行に向く。柱穴掘り方は不整形形もしくは楕円形を呈し、径約30cm、深さ23~41cmを測る。埋土は黄褐色砂質土で柱痕はとどめない。柱穴掘り方内部より少量の弥生土器片が出土した。

#### 出土遺物 (第33図)

90は壺形土器の口縁部である。端部に篋状工具の側面圧痕による斜格子文を施し、頸部外



第32図 S A 1004実測図



第33図 S A 1004出土遺物実測図

面にはタテハケを施す。91は甕形土器である。口縁端部に擬凹線を施す。92は壺形土器の底部であると思われる。

本遺構の所属時期であるが、90の壺形土器の口縁部には、加飾性が認められ、弥生時代中期後半の土器相を呈しているが、91の壺形土器の口縁部にみられるヨコナデ状の擬凹線はより新しい様相を示す。こうしたことから考えて弥生時代中期後半から末葉にかかるものと捉えておきたい。

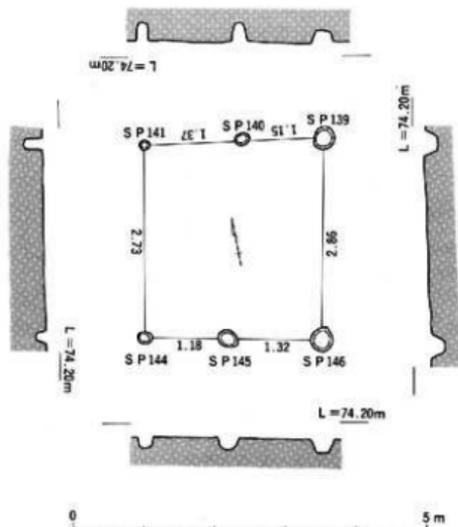
#### 5号建物跡 (S A 1005) (第34図)

第1調査区の西端、K-9、10で検出した6基の柱穴により構成される。本遺跡で検出された建物跡の内でも最も西に単独で位置している。梁間1間(2.7m)、桁行2間(2.4m)で方形に近い平面形を呈する。柱間寸法は、梁間約2.7m、桁行1.2~1.4mを測り、梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法の2倍以上になる。棟方向はN-76°-Wであり、斜面に対し平行に向く。柱穴掘り方は不整形円形を呈し、径は14~37cm、深さ16~27cmを測る。埋土は黄褐色砂質土で柱痕はとどめない。

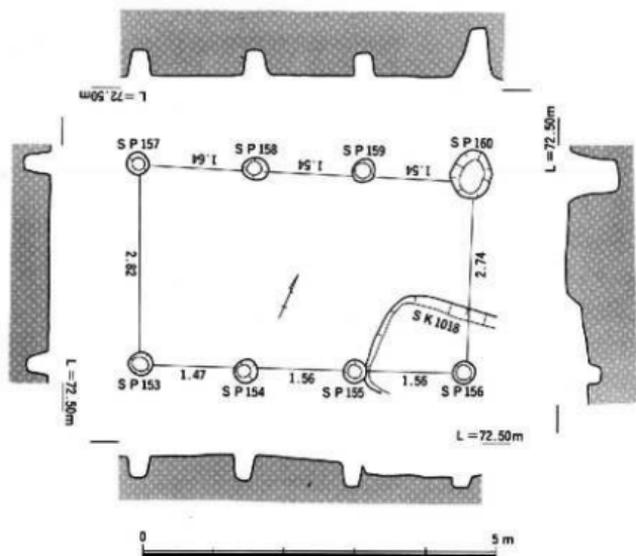
本遺構の所属時期であるが、柱穴掘り方内部からの出土物がないため特定は困難であるが周囲の弥生時代の掘立柱建物跡の配置から考えて弥生時代の所産と考えることは可能である。

#### 6号建物跡 (S A 1006) (第35図)

第7調査区南端、E・F-27・28で検出した8基の柱穴により構成される。1~4号竪穴住居跡の南に位置し、近接して西側に1号建物跡(S A 1001)が検出されている。南東隅の2基の柱穴は弥生時代の土坑SK1018を切っている。梁間1間(2.8m)、桁行3間(5.8m)であり、柱間寸法は、梁間約2.8m、桁行1.4~1.6



第34図 S A 1005実測図

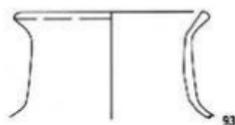


第35図 S A 1006実測図

mを測り、梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法の2倍以上になる。棟方向は $N-73^{\circ}-E$ であり斜面に対し平行に向く。柱穴掘り方は不整形円形を呈し、径は33~68cm、深さ32~65cmを測る。このうち北東隅の柱穴SP 1160は径68cm、深さ65cmと他の柱穴に比べ倍の規模を持つ。埋土は黄褐色砂質土と灰黄褐色砂質土の大要2層に分層でき、柱底はとどめない。柱穴掘り方内より少量の弥生土器片が出土した。

#### 出土遺物 (第36図)

93は壺形土器である。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。94~96は甕形土器の口縁部である。いずれも体部との境で強く外反し、端部に1~3条の凹線を施す。



93



94



95

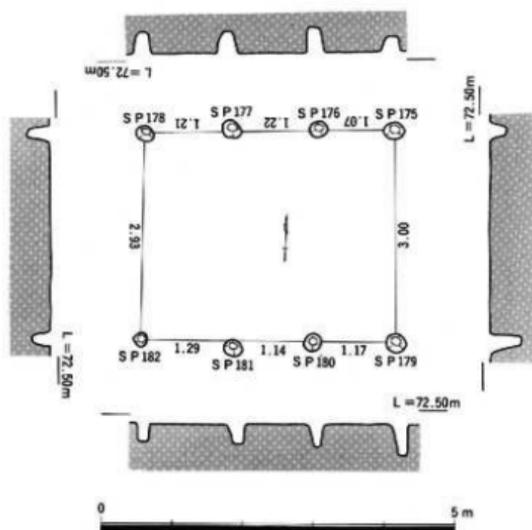


96



第36図 S A 1006出土遺物実測図

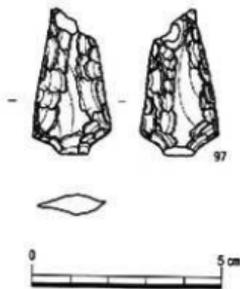
本遺構の所属時期であるが、本建物跡と西側において検出された1号建物跡とは柱穴同士の切り合いや平面形の重複こそ見られないもののほとんど「軒を接する」ほどの近さでありこれらが同時に存在したとは考えにくい。両者の出土遺物を比べると6号建物跡の甕形土器の口縁端部にみられる凹線文の方がより古い様相を示す。このことから本建物跡は1号建物跡より古く、時期的には弥生時代中期末葉におさまるものと思われる。



第37図 SA 1007実測図

#### 7号建物跡 (SA 1007) (第37図)

第3調査区の中央部北寄り、G・H-16で検出した8基の柱穴により構成される。梁間1間(2.9m)桁間3間(3.6m)で柱間寸法は梁間約2.9m、桁行1.0~1.4mを測り、梁間の柱間寸法が桁行の柱間寸法の2倍以上になる。棟方向はN-89°-Eであり、斜面に対し平行に向く。柱穴掘り方は不整形を呈し、径20~30cm、深さ28~45cmを測る。埋土は褐色灰土砂質土と褐色砂質土の主要2層に分層でき、柱痕はとどめない。柱穴掘り方内部からは、石鏃、サヌカイトの剥片等が出土している。

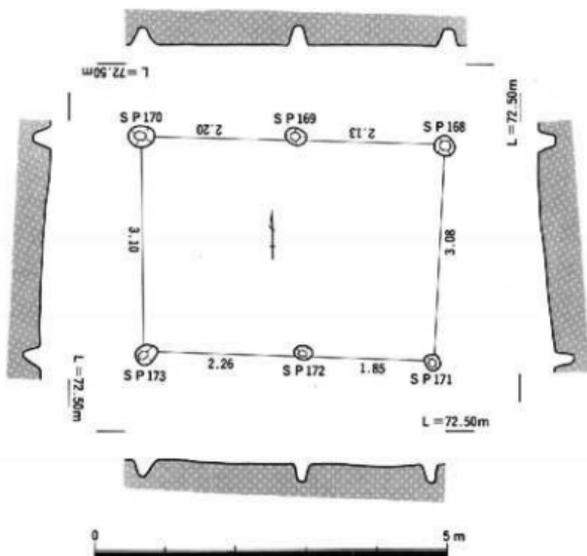


第38図 SA 1007出土遺物実測図

#### 出土遺物 (第38図)

97はサヌカイト製の石鏃である。大形の有茎鏃で先端を欠損しているものの鏃身は長い三角形になるとと思われる。

本遺構の所属時期であるが、出土した少量の土器が細片であり、確定は困難であるが近接して展開する弥生時代の土坑群との関連も考えられ一応弥生時代の所産と考えられる。



8号建物跡  
(S A 1008)  
(第39図)

第3調査区南  
東隅、E-18で  
検出した6基の

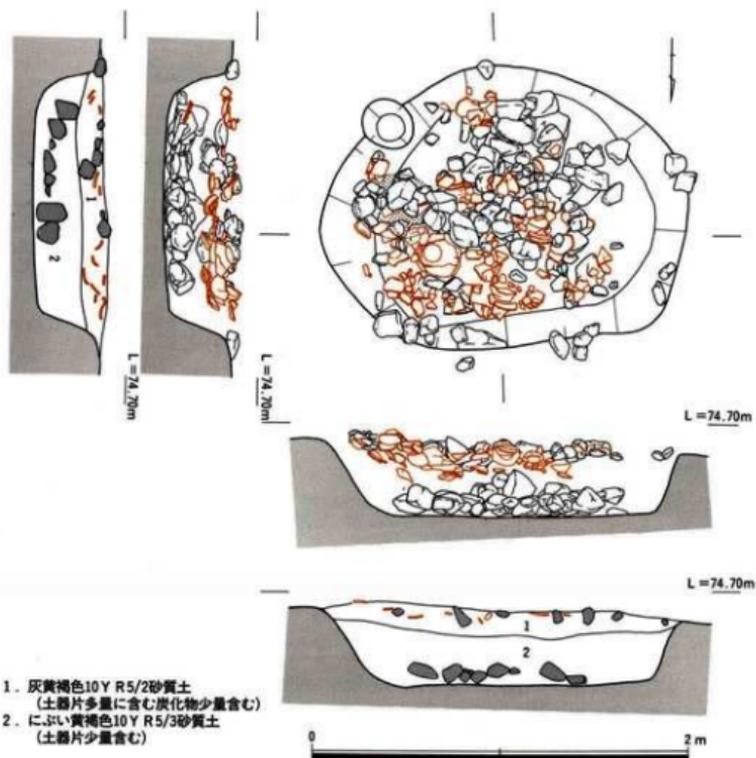
第39図 S A 1008実測図

柱穴により構成される。本遺跡で確認された建物跡の内では最も南に位置しており、周囲には弥生時代の土坑群が展開する。梁間1間(3.0m)、桁行2間(4.2m)であり、柱間寸法は、梁間約3.0m、桁行1.8~2.2mを測る。棟方向はN-86°-Wであり、斜面に対し平行に向く。柱穴掘り方は不整形円形を呈し、径23~49cm、深さ23~29cmを測る。埋土は柱痕をとどめず、暗褐色砂質土とに黄褐色砂質土の大要2層に分層できる。柱穴掘り方内部より遺物の出土を見なかったため本建物跡の所属時期についての特定は困難であるが、他の弥生時代の建物跡の柱穴の配置状況との共通点や周囲の弥生時代の土坑群の存在から考えると弥生時代のものである可能性が高い。

集石土坑

4号土坑 (S K 1004) (第40図)

第6調査区北西寄り、P-26・27で検出した。南東側の一部を時期不明の柱穴に切られている。前述の壑穴住居群の北側15m程の地点に位置する。土坑の規模は、検出面で長軸197cm、



第40図 SK1004実測図

短軸151cm、深さ40cm、底面で長軸148cm、短軸115cmを測る。平面形はやや角の張った不整な楕円形を呈し、断面は船底形、底面は平坦である。長軸の方向はN-81°-Eである。確認した時点では表面に砂岩礫や土器片が若干認められる程度であったが、数cm掘り下げると土坑の東寄りに多量の弥生土器片と礫が検出された。土器はおもに壺形土器と甕形土器で大型の破片が多い。礫はほとんどが砂岩であり5~20cmの角礫が多い。また、これらの土器片や礫に混じって、東側の壁際にエゴノキの実が40cm四方の範囲に固まって検出された。こうした堆積は厚さ20cmに及ぶ。その下層では、底面の南寄りに10~30cmの砂岩礫が検出された。この底面上の砂岩礫は、それぞれがあまり重なり合うことなく、平坦面を下にして敷き詰められたかの様相を呈し、単に投棄されたものではなく意図的に配置されたものと考えられる。

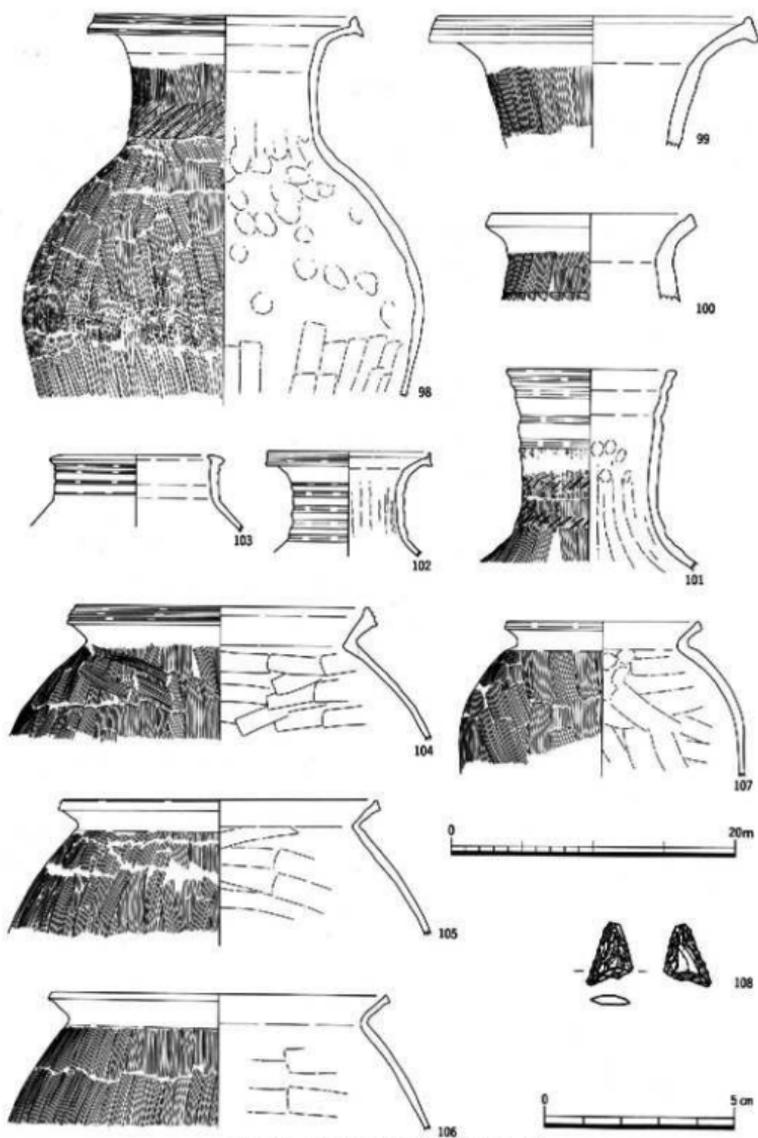
覆土は灰黄褐色砂質土とぶい黄褐色砂質土の2層に分層できる。第1層中に多くの土器片やエゴノキの実、炭化物を含むが、第2層中には遺物はほとんど見られない。こうした堆積状況から本土坑の構築過程を考えると、1・土坑を掘る。2・底面に礫を並べる。3・土をかぶせる。4・礫、土器片、エゴノキの実（固めて配置）、炭化物、土で更に埋める。というようになる。土坑の肩にかかるいくつかの礫は、土坑がこの高さから掘り込まれたことを意味する。更にこの上部に盛り土、あるいは集石による被覆の存在については不明である。

このようにして形成された本土坑第1層出土土器は、それほどの時間差を持たず、むしろ高い同時性を持つと考えられる。覆土内より弥生土器片791点、石器1点、エゴノキの実等が出土した。

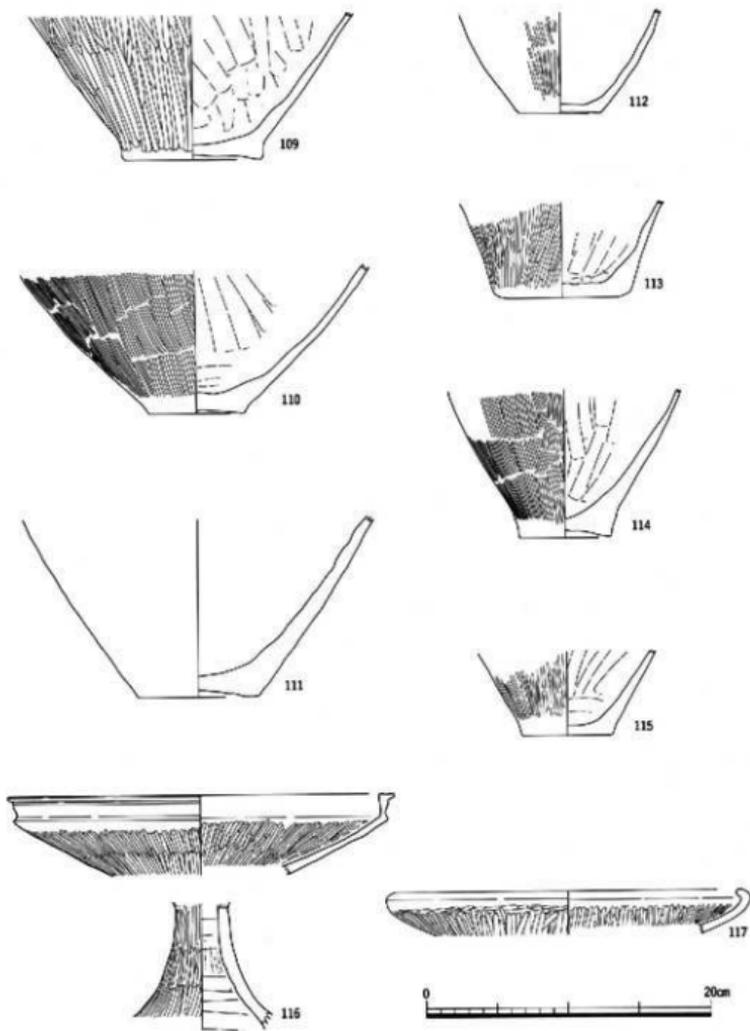
#### 出土遺物（第41・42図）

98～103は甕形土器である。98は口縁端部に凹線3条、頸部外面に篋疋痕文、体部外面はタテハケで下半は縦位のヘラミガキを施す。99は口縁端部に不明瞭な凹線2条を施す。100は短い内傾気味の頸部で口縁端部を方形におさめる。101はいわゆる直口甕である。口縁部から頸部にかけての4条の幅広の浅い凹線を施し、篋疋痕文を2段に巡らせる。102はやや小形の壺形土器で口縁端部に凹線2条、頸部に幅広の凹線5条を施す。103は無頸甕である。口縁端部を内外に拡張し、口縁外面に凹線4条を施す。104～107は甕形土器である。104は口縁端部に凹線3条を施す。105・106は口縁端部を方形におさめる。107は口縁端部に擬凹線を1条施す。これら甕形土器はすべて内面に口縁直下までのヘラケズリを施す。109～115は底部である。109・112・113は外面ヘラミガキを施す。110・114・115は外面にタテハケを施す。116・117は高杯形土器である。116は口縁部が直立し、体部との境に稜を持つ。内外面は縦位のヘラミガキを施す。117は口縁端部が著しく内傾するもので、内外面ヘラミガキを施す。108はサヌカイト製の石甕である。基端部を欠損しているが凹基式甕と認められる。

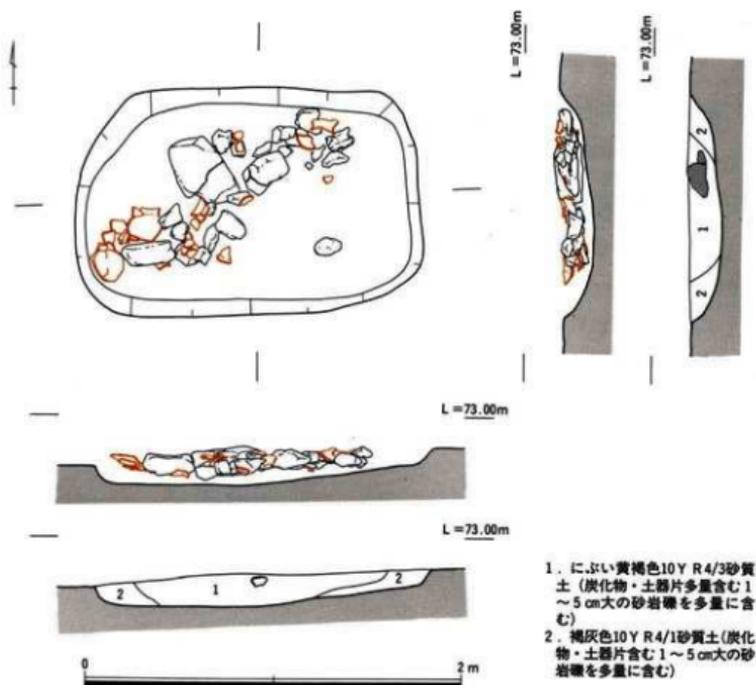
本遺構の構築時期であるが、前述したような構築法をとるのであれば、図示した一連の第1層出土土器が本遺構の構築時ともなうものと考えられる。98～103の甕形土器の口縁端部や頸部外面にみられる凹線文や篋疋痕文等は弥生時代中期末葉に多くみられる特徴であるが、104～107の甕形土器にみられる体部内面口縁部直下までのヘラケズリ、116の高杯にみられる直立した口縁などより弥生時代後期の土器相を含むことを考え合わせれば弥生時代後期の初頭に位置づけられるであろう。



第41图 S K1004出土遗物实测图 (1)



第42图 S K1004出土遺物実測図 (2)

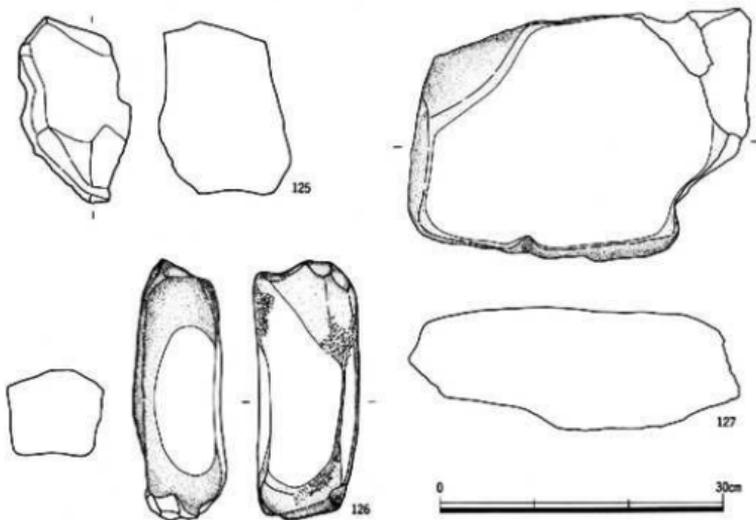
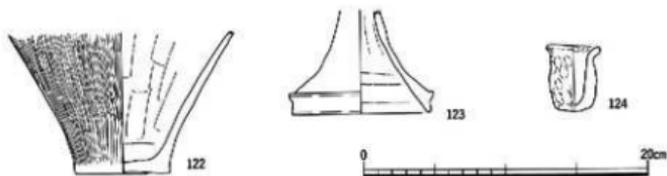
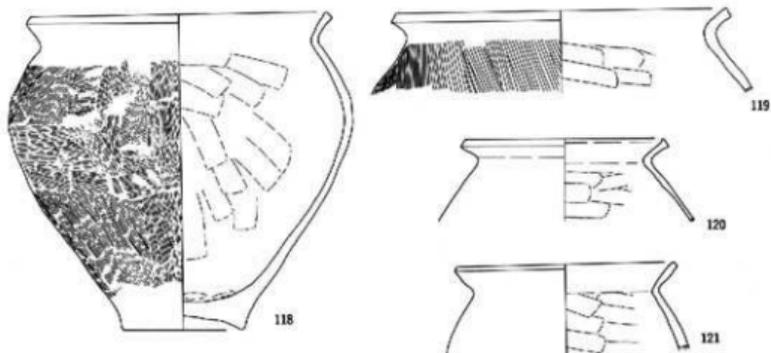


第43図 SK1060実測図

60号土坑 (SK1060) (第43図)

第12調査区中央部、K-46・47で検出した。調査地の西側に集中する弥生時代の遺構群から東側になり離れた地点に単独で位置する。検出面での長軸は178cm、短軸は122cm、深さ17cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し断面は船底形、底面は丸みを持っている。長軸の方向はN-89°-Eである。確認面から数cm掘り下げた時点で弥生土器片や砂岩礫、炭化物などが多量に出土した。これらは土坑の中央部を南西から北東部に向かい帯状に広がっていた。土器は何ヶ所かのまとまりが認められ、投棄されたというよりも意図的に配置されたかの様相を呈する。また中央部やや北寄りには、ミニチュア土器が出土している。土器片は主に壺形土器のもので、およそまとまりごとに復元が可能であった。砂岩礫は大きなもので50cm大のものもあるがほとんどは10~30cmの間におさまる。砂岩礫の中には、砥石として使用されたものや被熱痕のあるものも認められる。埋土はにぶい黄褐色砂質土、褐色砂質土の2層に分層できる。第2層は壁ぎわに堆積し、礫や土器片など多量に含む第1層は中央部に堆積

1. にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土(炭化物・土器片多量含む) 1~5cm大の砂岩礫を多量に含む)
2. 褐色10Y R4/1砂質土(炭化物・土器片含む) 1~5cm大の砂岩礫を多量に含む)



第44図 S K 1060出土遺物実測図

し底面に達する。こうした堆積状況からは土坑を2回に分けて埋め、2度目の時点で礫、土器、炭化物を混入するといった構築法が窺われ、前出の4号土坑との共通点が見いだされる。出土遺物は、おもに第1層中より弥生土器片69点、石器3点、チャート剥片、結晶片岩片等が出土している。

#### 出土遺物 (第44図)

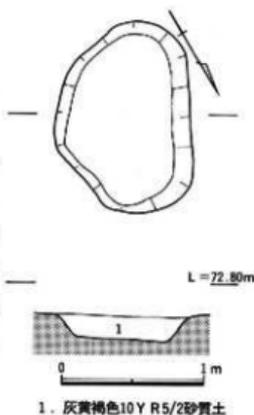
118~121は甕形土器である。118は口縁端部を方形におさめ、外面はタテハケ、ヨコハケ、内面には口縁直下までのヘラケズリを施す。119は口縁端部を方形におさめ外面タテハケ、内面口縁直下までのヘラケズリを施す。120は口縁端部をつまみ上げ、内面には口縁直下までのヘラケズリを施す。121は口縁端部をやや肥厚し方形におさめ内面に口縁直下までヘラケズリを施す。122は甕形土器の底部と思われる。外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。123は高杯形土器の脚部である。脚端部を上下に拡張し幅広い面を作り出し、内面にヘラケズリを施す。124はミニチュア土器である。手づくねで成形されており、全体にユビオサエをとどめる。125・126は砂岩製の砥石である。127は砂岩製の台石である。

本遺構の構築時期であるが、第1層出土の甕形土器はいずれも口縁端部に凹縁や擬凹縁を施さず内面に口縁直下までのヘラケズリなど本県で弥生時代後期とされている土器にみられる特徴を有している。また中期の甕形土器にみられる口縁の強い外反もここでは認められない。こうしたことから、本遺構は弥生時代後期初頭に位置づけられよう。

#### 土坑

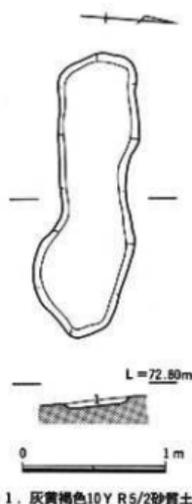
##### 15号土坑 (S K 1015) (第45図)

第7調査区の中央部南寄り、G-28・29で検出した。長軸137cm、短軸95cm、深さ18cmを測り、不整形円形を呈する。覆土は灰黄褐砂質土1層である。覆土中より甕形土器の口縁部を含む弥生土器片が45点出土したが図示可能なものはない。



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土

第45図 S K 1015実測図



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土

第46図 S K 1016実測図

##### 16号土坑 (第46図)

第7調査区中央部、G-28で検出した。竪穴住居群と建物跡（1号・7号）の間やや南寄りに位置する。長軸203cm、短軸46cm、深さ4cmを測り、長楕円形を呈する。覆土は灰黄褐色砂質土1層である。覆土内からは20点余りの弥生土器片が出土したが、図示可能なものはない。

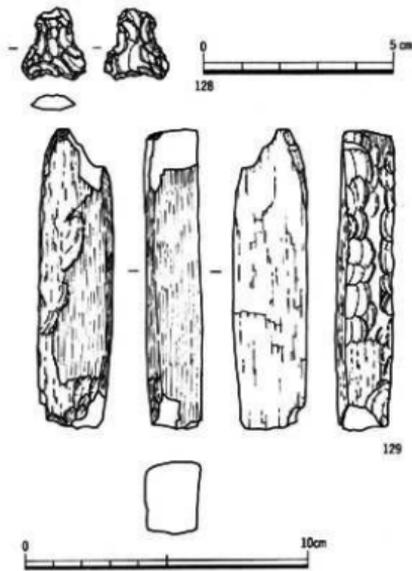


1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土（炭化物・土器片含む）

第47図 SK 1018実測図

#### 18号土坑（SK 1018）（第47図）

第7調査区南隅、F-28で検出した。東側は後世の攪乱に切られ、中央部はSA1007の柱穴により切られる。残存する規模は、長軸275cm、短軸152cm、深さ12cmを測り、隅丸の長方形を呈すると思われる。覆土中より弥生土器片100点、石器2点、サヌカイト剥片などが出土している。



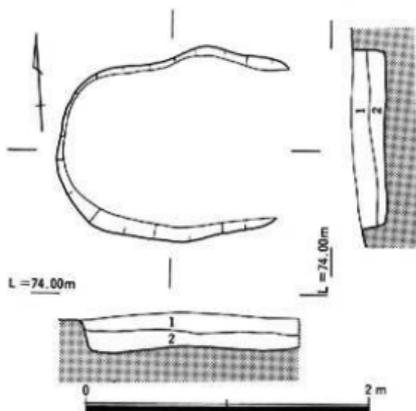
第48図 SK 1018出土遺物実測図

#### 出土遺物（第48図）

128はサヌカイト製の石鏃である。先端が欠損しているが凹基式で全面に丁寧な調整を施している。129は柱状片刃石斧の未成品と思われる。基部と刃部を欠失しており、主面と側面に剝離痕をとどめる。

#### 24号土坑 (SK 1024) (第49図)

第2調査区中央部、M-17・18で検出した。第2調査区で確認された掘立柱建物跡(2号、3号、4号)の北側に位置し、本調査区で検出した土坑の中では最も北に位置する。東側は、後世の削平を受ける。残存する規模は長軸158cm、短軸128cm、深さ26cmを測る。平面形はおおよそ楕円形を呈するものと思われる。覆土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土と含まないにぶい黄褐色砂質土の2層に分層でき、下層により多くの砂岩礫を含む。覆土中より弥生土器片が60点余り出土した。

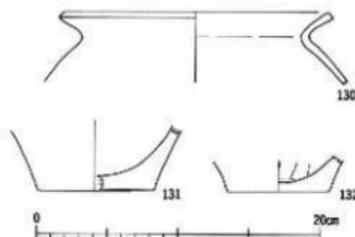


1. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土

第49図 SK 1024実測図

#### 出土遺物 (第50図)

130は壺形土器である。「く」字状に外反する口縁で端部は方形におさめる。内外面の調整は、磨滅のため不明である。131・132は弥生土器の底部である。共に内面にヘラケズリが認められる。



第50図 SK 1024出土遺物実測図

#### 27号土坑 (SK 1027) (第51図)

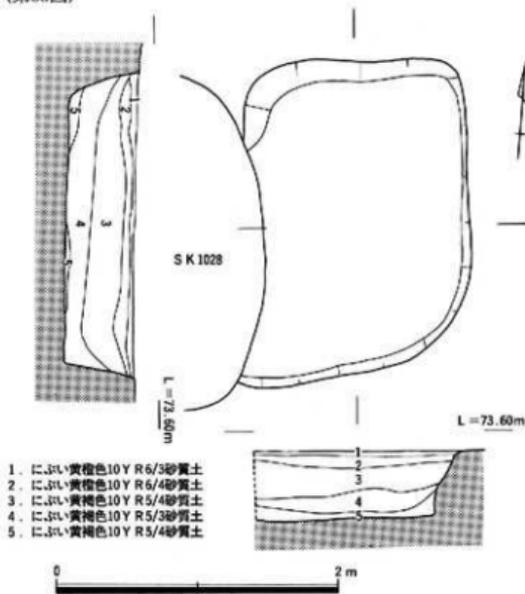
第2調査区南東隅J・K-19で検出した。第2調査区で確認された掘立柱建物(2号、3号、4号)の南側に位置する。西側の一部を28号土坑により切られる。残存する規模は、長軸218cm、短軸150cm、深さ50cmを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の大意2層であるが、炭化物や土器片、砂礫の含みぐあいで5層に細分できる。覆土中より弥生土器片が200点余り出土した。

#### 出土遺物 (第52図)

133・134は壺形土器である。ともに口縁端部を上下に拡張し、凹線を3条施す。内外面はヨコナデである。135は壺形土器の底部と思われる。外面にタテハケを施す。136は鉢形土器である。体部外面は磨滅が著しいが一部にヘラミガキが認められる。

31号土坑 (S K 1031) (第53図)

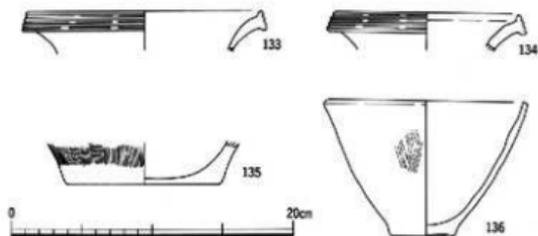
第2調査区の中央部南寄り、K-17で検出した。4号建物跡の北西隅の柱穴(S P 1150)を切っている。長軸95cm、短軸74cm、深さ23cmを測る。平面形は隅丸の方形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は、褐色砂質土にふい黄褐色砂質土の2層に分層でき、下層において土器片の出土がみられた。覆土中より弥生土器片が20点ほど出土しているが、いずれも細片のため図示可能なものはない。



第51図 S K 1027実測図

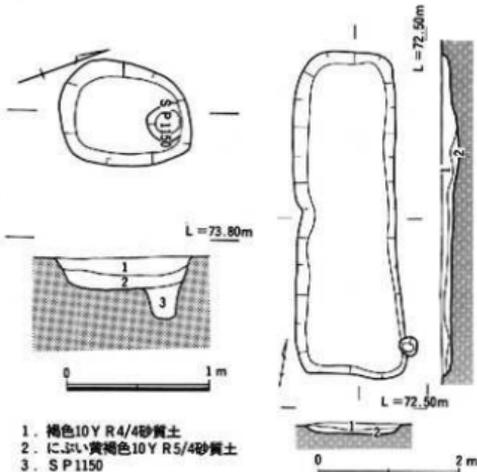
37号土坑 (S K 1037) (第54図)

第3調査区北東隅、H・I-19・20で検出した。第3調査区検出の土坑群とは北側に離れた地点に位置する。長軸462cm、短軸135cm、深さ25cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し、底面は北よりでややくぼむが概ね平坦である。本土坑の規模や平面形は、本遺跡検出



第52図 S K 1027出土遺物実測図

中の土坑の中では特異であり、他の土坑とは性質を異にする可能性がある。覆土は灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の2層に分層でき、上層において大型の礫を多く含む傾向が認められる。遺物も上層部に集中してみられ、弥生土器片が50点余り、石器1点、サヌカイト剥片などが出土した。



1. 褐色10Y R4/4砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
3. SP1150

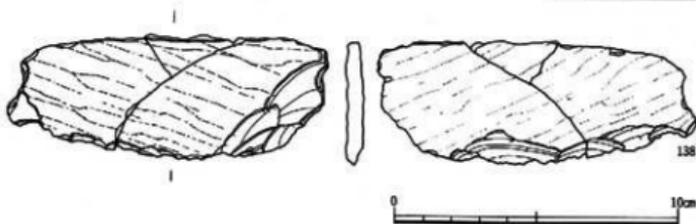
第53図 SK 1031実測図

1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第54図 SK 1037実測図

#### 出土遺物 (第55図)

137は壺形土器である。緩く外反する口縁で端部は方形におさめる。外面の調整は磨滅のため不明であるが内面は口縁直下まで横位のヘラケズリを施す。138は結晶片岩製の打製石庖丁である。横長の扁平な剥片を素材として、一側縁に両面から調整を加えやや曲線的な刃部を作り出しており、両端には持ちを持つ。



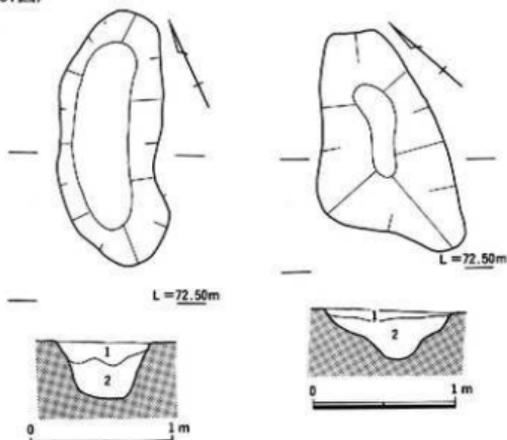
第55図 SK 1037出土遺物実測図

#### 39号土坑 (SK 1039) (第56図)

第3調査区東隅、F-20で検出した。第3調査区に集中する弥生時代の土坑群の内の一つである。長軸180cm、短軸68cm、深さ40cmを測る。平面形は長楕円形を呈し、底面は平坦である。覆土は灰黄褐色砂質土と暗褐色砂質土の2層に分層できる。覆土中より弥生土器片8点、サヌカイト剥片が出土しているが図示可能な遺物はない。

43号土坑 (SK1043) (第57図)

第3調査区中央部、F・G-18で検出した。第3調査区の弥生時代土坑群の中では最も北に位置する。長軸171cm、短軸91cm、深さ35cmを測る。覆土は褐色砂質土と暗褐色砂質土の2層に分層できる。覆土中より弥生土器片が2点出土しているが、図示可能な遺物はない。



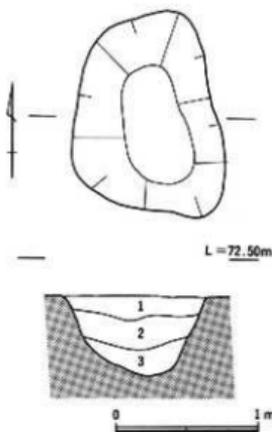
1. 灰黄褐色10Y R4/2砂質土
2. 暗褐色10Y R3/3砂質土

1. 褐色10Y R4/4砂質土
2. 暗褐色10Y R4/3砂質土

44号土坑

(SK1044) (第58図)

第3調査区中央部南寄り、E・F-14で検出した。第3調査区の弥生時代土坑群の内の一つである。長軸147cm、短軸101cm、深さ58cmを測る。覆土は灰黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、褐色砂質土の3層に分層できる。覆土中より弥生土器片が2点出土しているが、図示可能なものはない。



1. 灰黄褐色10Y R5/4砂質土
2. 暗褐色10Y R3/4砂質土
3. 褐色10Y R4/4砂質土

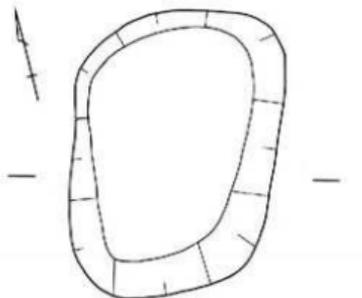
45号土坑 (SK1045) (第59図)

第3調査区南東隅、F-17で検出した。第3調査区の弥生時代土坑群の内の一つである。長軸100cm、短軸70cm、深さ18cmを測る。覆土は灰黄褐色砂質土と褐色砂質土と灰黄褐色砂質土の3層に分層できる。第3層、第2層と堆積しそこへ第1層が切り込む形で堆積する。第2層中より壺形土器の口縁部が出土している他、覆土中より、弥生土器片26点、石器1点が出土している。

第58図 SK1044実測図

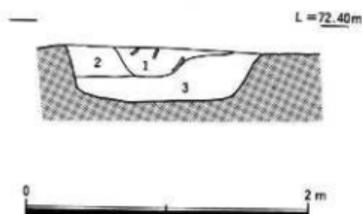
### 出土遺物 (第60図)

139は第2層より出土した壺形土器である。口縁端部は上下に拡張され、不明瞭な凹線が2条施される。頸部外面はタテハケ内面はヨコナデで頸部と体部の境に篋圧痕文を施す。241は結晶片岩製の打製石庖丁である。扁平な横長の剥片の両側縁に両面から調整を加えそのまま両端に及び、曲線的な刃部を作り出している。



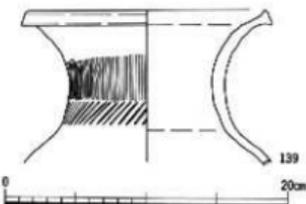
### 49号土坑 (S K 1049) (第61図)

第3調査区南端、D-17で検出した。南側は調査区の南壁により切られている。第3調査区の弥生時代土坑群中最も南に位置する土坑である。残存部の長軸254cm、短軸150cm、深さ48cmを測る。覆土は褐色砂質土と暗褐色砂質土の主要2層に分層できるが、炭化物、礫の含まれ具合により3層に細分できる。覆土中より、弥生土器片60点余り、土製品1点、チャート剥片などが出土した。本土坑は南側の形状が不明であるが、残存部の規模や平面形態から推しはかると、前出の37号土坑に近い規模、形態を示すものと考えられる。



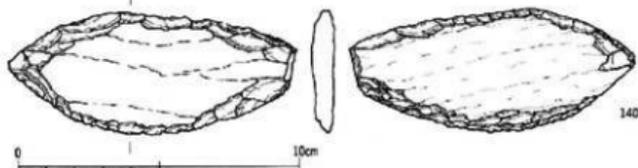
1. 灰黄褐色10Y R 5/4砂質土
2. 褐色10Y R 5/1砂質土
3. 灰黄褐色10Y R 5/2砂質土

第59図 S K 1045実測図

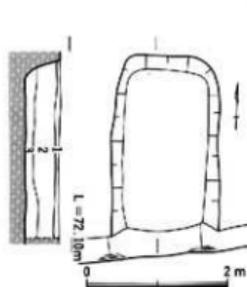


### 出土遺物 (第62図)

141は土器片利用の紡錘車である。表面にヘラミガキをとどめ、未穿孔である。

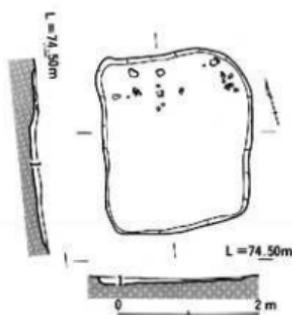


第60図 S K 1045出土遺物実測図



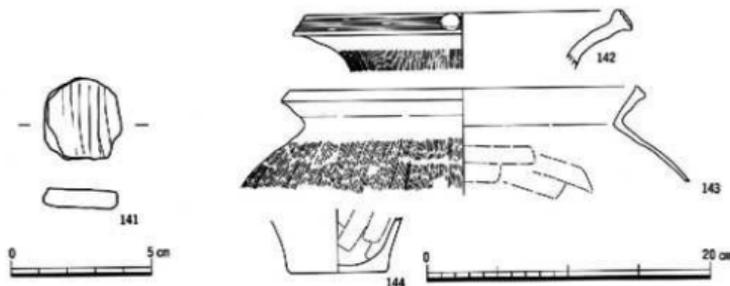
1. 褐色10Y R4/4砂質土
2. 暗褐色10Y R3/4砂質土
3. 暗褐色10Y R3/3砂質土

第61図 SK 1049実測図



1. にぶい黄褐色10Y R6/3砂質土

第63図 SK 1063実測図



第62図 SK 1049出土遺物実測図

第64図 SK 1063出土遺物実測図

### 63号土坑 (SK 1063) (第63図)

第14調査区中央部やや西寄り、S・T-69・70で検出した。東側約20mの地点では5号竪穴住居跡が検出されている。長軸257cm、短軸220cm、深さ11cmを測る。平面形は、隅丸の不整形を呈し、底面は平坦である。覆土は1層で特に北側に遺物の集中がみられ、弥生土器片175点、サヌカイト片が出土した。

### 出土遺物 (第64図)

142は壺形土器である。口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線を施し、円形厚文を貼付ける。頸部外面はタテハケ、内面はヨコナデ。143は壺形土器である。口縁は「く」字状に屈曲し端部は方形気味におさめる。体部外面タテハケ、内面は口縁部直下まで横位のヘラケズリを施す。144は平底の底部である。内面に縦位のヘラケズリが認められる。

## 柱穴内出土遺物（第65図）

ここでは特に掘立柱建物跡を構成するにいたらなかった柱穴の出土遺物の内、図化可能な遺物を取り上げる。

145～147は第14調査区、V-77で検出したSP1426より出土した。145は壺形土器である。直立する頸部からわずかに外反する口縁で、端部を上下に拡張している。体部外面はタテハケを施す。146・147は甕形土器である。146は強く屈曲し外反する口縁で端部を上方につまみ上げる。体部外面はタタキ後タテハケ、内面はユビオサエ後タテハケを施す。147は「く」字状に外反する口縁で端部を方形におさめる。

148は第6調査区、L-30で検出したSP1057より出土した甕形土器である。「く」字状に強く外反する口縁で端部を上方につまみ上げ、擬凹線を施す。

149は第2調査区、P-19で検出したSP1089より出土した甕形土器である。強く屈曲し外反する口縁で端部を上下に拡張し凹線を3条施す。

150は第7調査区、L-29・30で検出したSP1059より出土した甕形土器である。やや小形で緩やかに外反する口縁を持ち、端部は方形におさめる。内面は口縁直下までヘラケズリを施す。

151は第7調査区、H-26で検出したSP1079より出土した甕形土器である。「く」字状に強く外反する口縁の端部を肥厚させ、方形気味におさめる。内面は口縁直下まで横位のヘラケズリを施す。

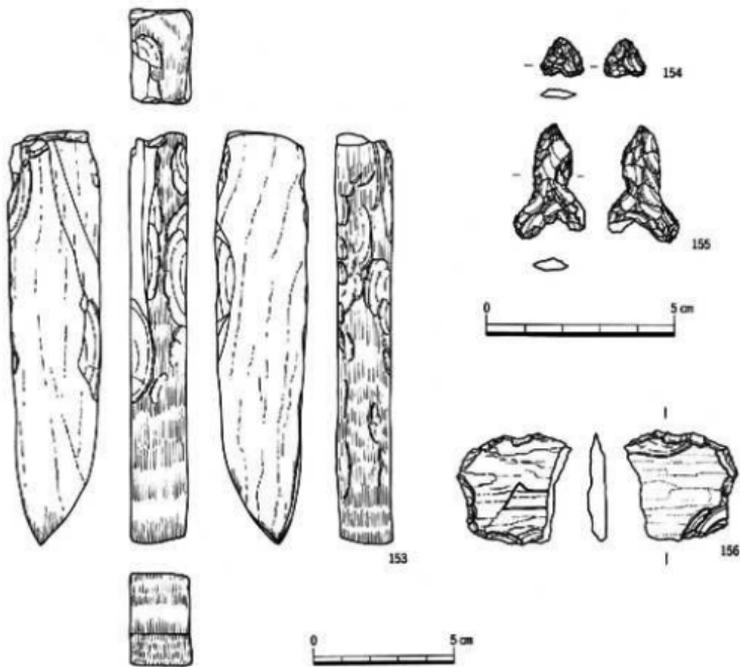
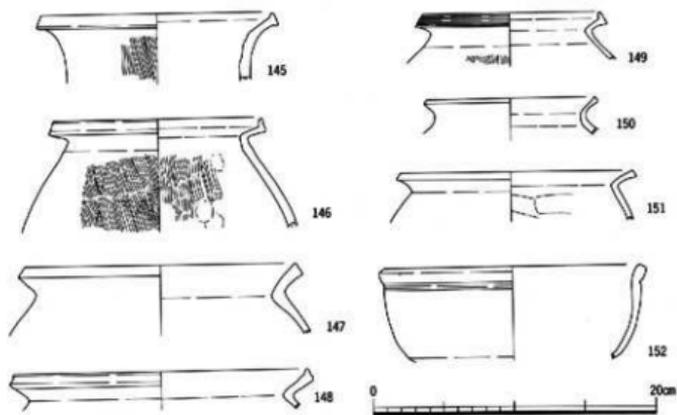
152は第6調査区、H-26で検出したSP1058より出土した鉢形土器である。丸みを持った体部で、口縁部は若干外反する。口縁部下に1条の幅広の凹線を施す。

153は第14調査区、U-72で検出したSP1414より出土した柱状片刃石斧である。前主面、後主面ともに長軸に平行に研磨痕が残り、側縁には敲打痕をとどめる。

154は第11調査区、Q-51で検出したSP1331より出土したチャート製の凹基式石鏃である。非常に小さなものであるが、全面に入念な調整を加える。

155は第14調査区、U-70で検出したSP1405より出土したサヌカイト製の凹基式石鏃である。大形で、全面に入念な調整を施し、基部と先端部の境に抉りを加える。

156は第6調査区、N-31で検出したSP1038より出土した結晶片岩製の打製石胞丁である。欠損品であるが、扁平な横長の剥片を素材として一側縁に調整を加え、刃部を作り出す。



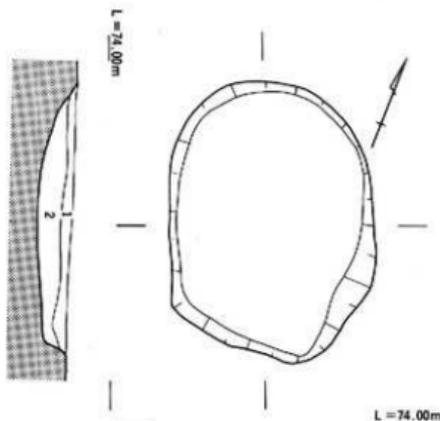
第65図 柱穴出土遺物実測図

### (3) 古代

#### 土坑

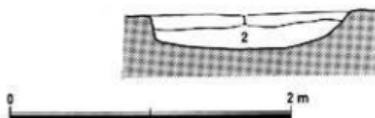
##### 25号土坑 (SK1025) (第66図)

第2調査区南東部、L-19で検出した。長軸194cm、短軸144cm、深さ25cmを測る。平面形は楕円形を呈する。覆土は褐色砂質土にふい黄褐色砂質土の2層に分層できる。覆土中より土師器片が30点余り出土している。



##### 出土遺物 (第67図)

157は土師器の杯である。底部を回転ヘラ切りした後ナデる。体外外面には一部赤彩をとどめる。

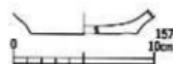


1. 褐色10Y R4/4砂質土
2. ぶい黄褐色10Y R5/4砂質土

第66図 SK1025実測図

##### 34号土坑 (SK1034) (第68図)

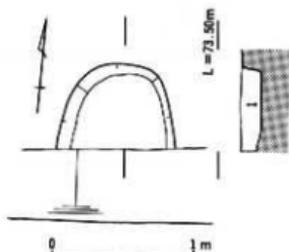
第2調査区の南端、J-17で検出した。南半分は調査区外に延びており確認できなかった。残存部は長軸60cm、短軸82cm、深さ14cmを測る。覆土は、1層であり覆土中より土師器片77点、須恵器片2点が出土している。



第67図 SK1025出土遺物

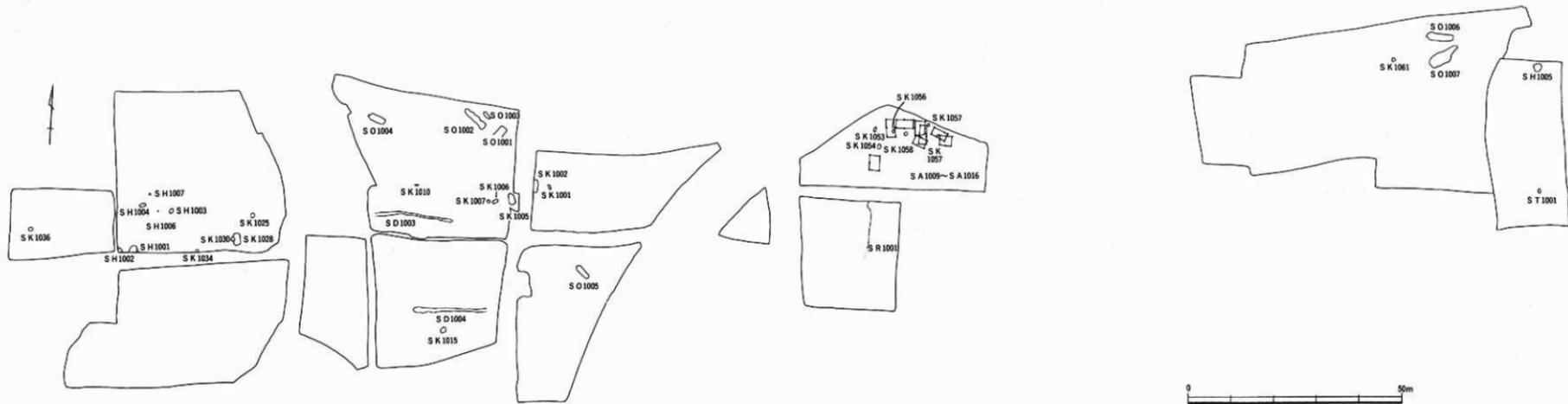
##### 出土遺物 (第70図)

158は土師器の杯である。体部は外反気味に立ち上がり端部を尖り気味におさめる。内外面ともヨコナデを施す。159は土師器の皿である。口径20.8cmを測る。底部は回転ヘラ切りした後ナデる。160は須恵器の杯蓋である。焼成が軟質で赤褐色を呈する。161は須恵器の杯身の底部である。外方へ張り出す断面方形の高台を持つ。



1. ぶい黄褐色10Y R5/4砂質土

第68図 SK1034実測図



第69図 古代～近世の遺構配置

### 52号土坑 (SK1052) (第71図)

第3調査区南西部、E-14・15で検出した。長軸200cm、短軸122cm、深さ49cmを測る。平面形は不整楕円形で底面の南側が一段落ち込む。覆土は褐色砂質土であるが礫の含み具合、色調により3層に細分できる。覆土中より土師器片8点、須恵器片1点が出土している。

### 出土遺物 (第72図)

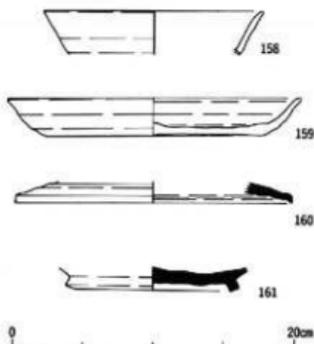
162は須恵器の杯蓋である。天井部は平坦で口縁端部を屈曲させ尖り気味におさめる。

### 1号自然流路 (SR1001) (第73図)

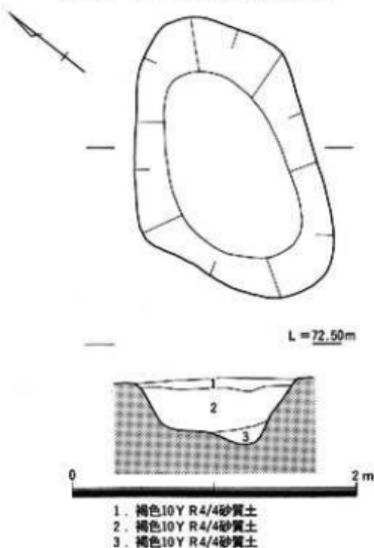
自然流路は本遺跡においては幾筋かが確認されているが、ここでは平安時代の須恵器を出土した1号流路について述べる。

第12調査区において確認された。12調査区では調査区のほぼ全域にわたり2筋の自然流路が確認されているが、西側の流路の埋土より遺物の出土はなく、東側の平安時代の遺物を多量出土した流路を1号流路とした。1号流路は、12区の基盤層を削り込んだ形で南流している。埋土は大要5層に分層できる。このうち下層の3・4層は無遺物層であり、2・3層より遺物の出土がみられた。流路の幅は東側が調査区外に延びており不明であるが、少なくとも5m以上であり、深さは確認面から1.5mを測る。本流路は北側の11調査区の地形から判断すると北東方向から流れていた可能性が強く、調査区の東30mを南流する熊谷川の出河道であったものと思われる。

### 出土遺物 (第74図)



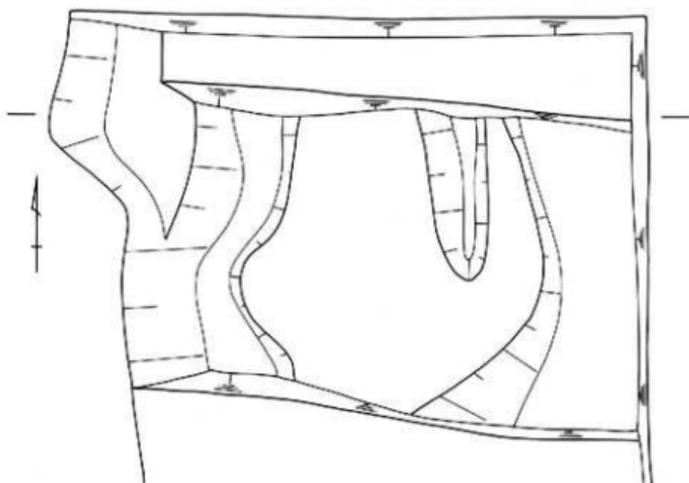
第70図 SK1034出土遺物実測図



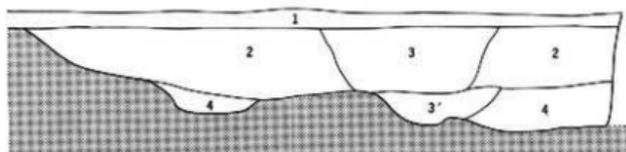
第71図 SK1052実測図



第72図 SK1052出土遺物実測図

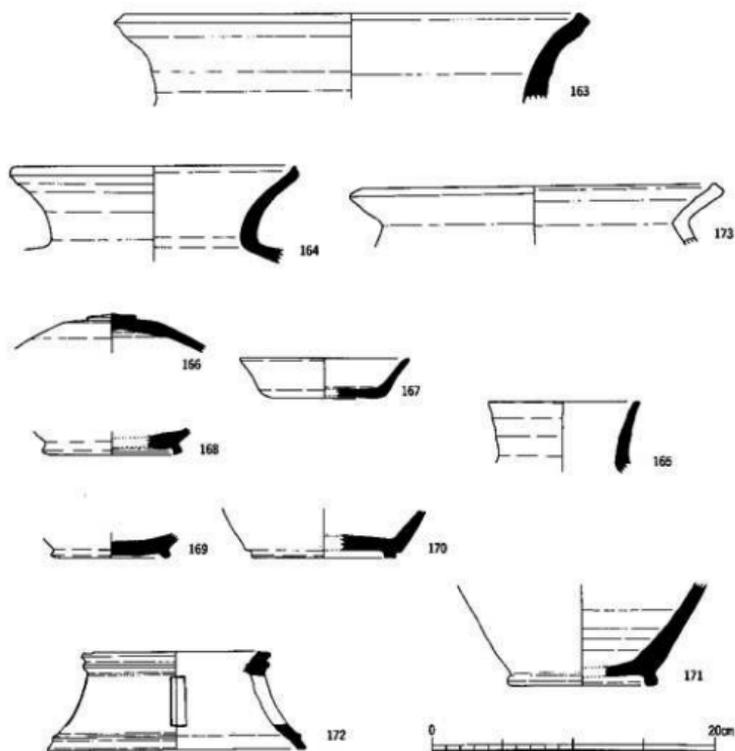


L = 74.00m



1. 表土
2. 砂礫層2.5 Y 4/5 3 cm~50cm大の礫を多量に含む
3. 砂礫層2.5 Y 4/5 2 cm~5 cm大の礫を多量に含む
- 3'. 砂礫層2.5 Y 4/5 2 cm~4 cm大の礫を多量に含む
4. 砂礫層2.5 S Y 4/5 2 cm~4 cm大の礫を多量に含む

第73図 S R 1001実測図



第74図 S R 1001出土遺物実測図

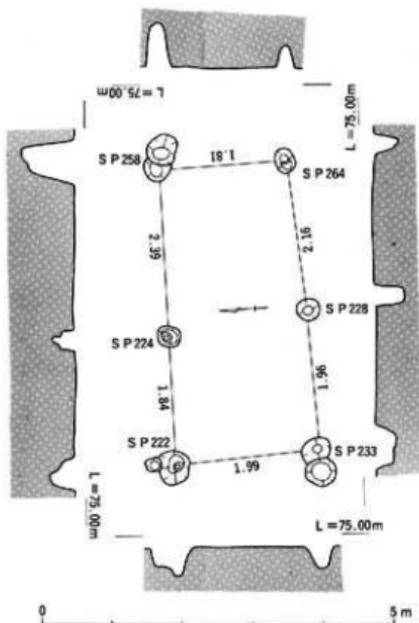
163・164は須恵器の甕である。163は口縁部が直立気味に立ち上がり端部を方形におさめる。164は口縁部が大きく外反し端部を方形気味におさめる。165は須恵器の壺である。外反気味に開く口縁部で端部を方形におさめる。166は須恵器の杯蓋である。扁平なつまみを持ち、天井部から口縁部にかけて屈曲する。167は須恵器の杯身である。外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味におさめる。168～170は須恵器の杯身の底部である。168・169は断面方形の外方へ張り出した高台を貼り付ける。171は須恵器の壺の底部である。内外面ヨコナデで断面方形の高台を貼り付ける。172は須恵器の円面甕である。甕部は圈台により支えられ、圈台は長方形の透しを4ヶ所に持つ。173は土師器の甕である。口縁部は強く外反し端部を方形におさめる。

#### (4) 中世

##### 掘立柱建物跡

##### 9号建物跡 (S A 1009) (第75図)

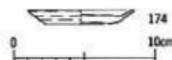
第11調査区北壁際、Q・R-49・50で検出した6基の柱穴により構成される。S A 1014、S A 1015と切り合い関係にあり、S A 1009はS A 1014、S A 1015に切られる。梁間1間(1.55m)桁行2間(3.8m)で棟方向N-89°-Eを測り、斜面に対し平行に向く。柱間寸法は、梁間約1.55m、桁行1.5~2.0mを測る。柱穴掘り方は他の柱穴と切り合うものもあるが、概ね円形ないし楕円形を呈し、径32~48cm、深さ30~70cmを測る。埋土は褐色砂質土で、柱痕をとどめる柱穴が1基確認できた。これによると、柱径は15cm程度となる。柱穴内より土師質土器の杯、皿、釜、瓦質土器の小片などが出土している。



第75図 S A 1009実測図

##### 出土遺物 (第76図)

174は土師質土器の皿である。底部を回転糸切りし、口縁部は直線的に外側に開く。13世紀代のものであろう。



第76図 S A 1009出土遺物実測図

##### 10号建物跡 (S A 1010) (第77図)

第11調査区北側やや東寄り、Q-50で検出した6基の柱穴により構成される。S A 1009のすぐ東に位置し、S A 1013、S A 1015と重複する。梁間1間(1.3m)、桁行2間(3.9m)で棟方向はN-2°-Eであり、斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は梁間約1.3m、桁行約1.4~2.2mを測り、北側の1間に対し南側の1間がやや長い。柱穴掘り方は他の柱穴と切り合うものもあるが、概ね不整形円形ないし楕円形を呈し、径20~46cm、深さ25~48cmを測る。埋土は褐色砂質土で柱痕をとどめるものはみられなかったが、平面形楕円形の柱穴に抜き取

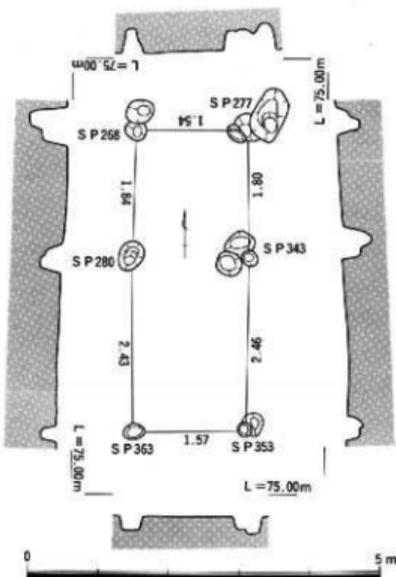
り痕状の段を持つものがみられた。柱穴内より土師質土器の杯、皿、瓦質土器の小片が出土している。13～14世紀のものであろう。

#### 11号建物跡 (S A 1011) (第78図)

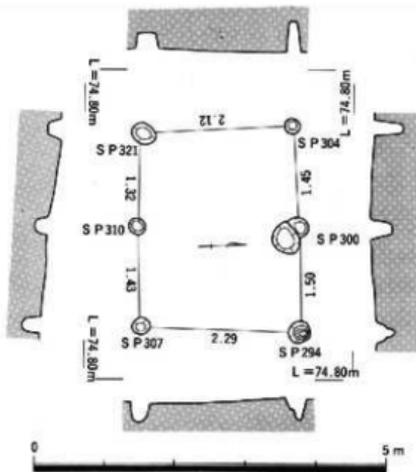
第11調査区北壁際の東寄り、Q-51・52で検出した6基の柱穴により構成される。S A 1010の東側に位置し、西半分がS A 1012と重複する。梁間1間(1.9m)桁行2間(2.6m)で棟方向はN-89°-Eであり、斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は梁間約1.9m、桁行約1.0～1.2mを測り桁行の1間に対し梁間の1間の方が長い。柱穴掘り方は一部に切り合いがみられるがほぼ円形を呈し、径22～32cm、深さ16～30cmを測る。埋土は褐色砂質土で1ないし2層に分層できるが柱痕をとどめるものはない。柱穴内より土師質土器の小片が出土している。13～14世紀のものであろう。

#### 12号建物跡 (S A 1012) (第79図)

第11調査区北壁際東寄り、Q-51で検出した6基の柱穴により構成される。東半分がS A 1011と重複する。梁間1間(1.5m)、桁行2間(3.2m)で棟方向はN-65°-Wであり、斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は梁間約1.5m、桁行約0.7～2.1mを測り南側の桁行列の中央の柱穴が東偏しているのが特徴である。柱穴掘り方は一部他の柱穴と切り合うがほぼ円形を呈し、径



第77図 S A 1010実測図



第78図 S A 1011実測図

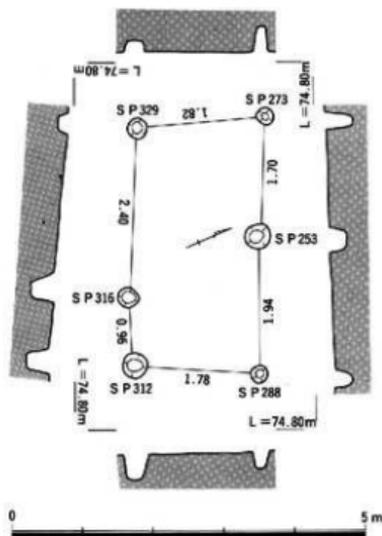
15~40cm、深さ15~40cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で柱痕をとどめるものが1基確認できた。これによると柱径は15cm前後と推定できる。柱穴内より土師質土器皿、鍋の小片が出土している。14~15世紀のものであろう。

#### 13号建物跡 (S A 1013) (第80図)

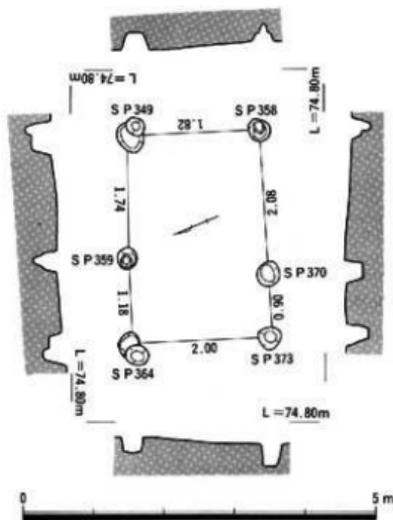
第11調査区中央部やや西寄り、Q-50で検出した6基の柱穴により構成される。S A 1010と重複し、S A 1014に切られる。梁間1間(1.6m)、桁行2間(2.6m)で棟方向はN-70°-Wであり、斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は梁間約1.6m、桁行0.9~1.7mを測り、南北桁行列の中央の柱穴が西偏しているのが特徴である。柱穴掘り方は一部他の柱穴と切り合うが概ね円形ないし楕円形を呈し、径30~45cm、深さ30~50cmを測る。埋土は黄褐色砂質土で柱痕をとどめるものはなかった。柱穴内より、土師質土器杯、皿、瓦器碗の小片が出土している。13世紀のものであろう。

#### 14号建物跡 (S A 1014) (第81図)

第11調査区中央部やや北寄り、Q・R-50で検出した5基の柱穴により構成される。S A 1009と切り合い関係にありS A 1014はS A 1009を切っている。梁間1間(1.5m)、桁行2間(3.6m)であるが北東隅の柱穴は確認できなかった。棟方向はN-5°-Wであり斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は、梁間1.5m、桁行1.6~1.7mを測る。柱穴掘り方は一部他の柱穴と切り合うが概ね円形ないし楕円



第79図 S A 1012実測図



第80図 S A 1013実測図

形を呈し、径25～45cm、深さ20～40cmを測る。埋土は概ね黄褐色砂質土と暗褐色砂質土の2層に分層でき、柱痕をとどめるものはない。柱穴内より土師質土器の皿、瓦質土器、須恵質土器の小片が出土している。13～14世紀のものであろう。

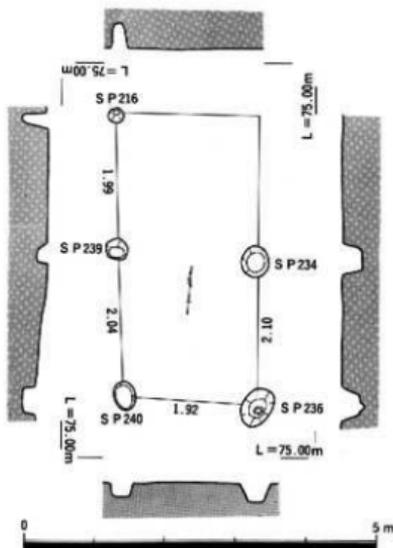
#### 15号建物跡 (S A 1015) (第82図)

第11調査区北壁際やや東寄り、Q・R-49で検出した6基の柱穴により構成される。S A 1010と重複しS A 1009、S A 1013を切っている。梁間1間(2.1m)、桁行2間(2.7m)で棟方向はN-5°-Wであり、斜面に対し垂直に向く。柱間寸法は、梁間約2.1m、桁行約0.9～1.5mを測り、桁行の1間に対し梁間の1間が長いのが特徴である。柱穴掘り方は一部他の柱穴と切り合うが、概ね不整形円形を呈し径30～50cm、深さ20～50cmを測る。柱穴内部より土師質土器の杯、皿、須恵質土器の小片が出土した。13～14世紀のものと思われる。

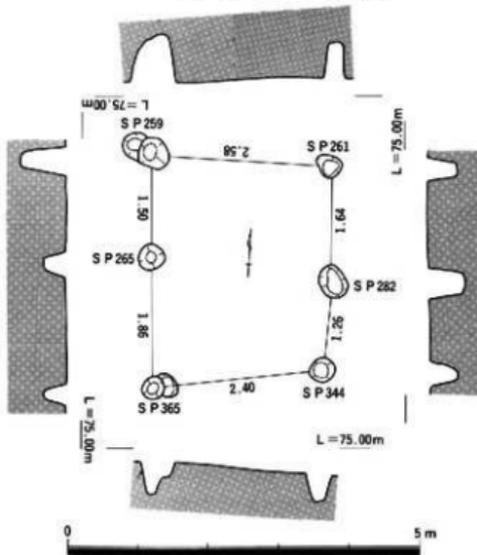
#### 16号建物跡 (S A 1016)

(第83図)

第11調査区南壁寄り、O・P-48で検出した5基の柱穴により構成される。他の建物跡とは南側に離れた地点に単独で検出された。梁間1間(2.1m) 桁行2間(1.5m)



第81図 S A 1014実測図



第82図 S A 1015実測図

で棟方向はN-2°-Eであり、斜面に  
 対し垂直に向く。柱間寸法は、梁間約  
 2.1m、桁行約1.5mを測り、桁行の1  
 間に対し梁間の1間が長いのが特徴で  
 ある。柱穴掘り方は一部他の柱穴と切  
 り合うが概ね円形を呈し、径20~30cm、  
 深さ15~30cmを測る。柱穴内部より土  
 師質土器の小片が出土している。出土  
 遺物より、13~14世紀のものと考えら  
 れる。

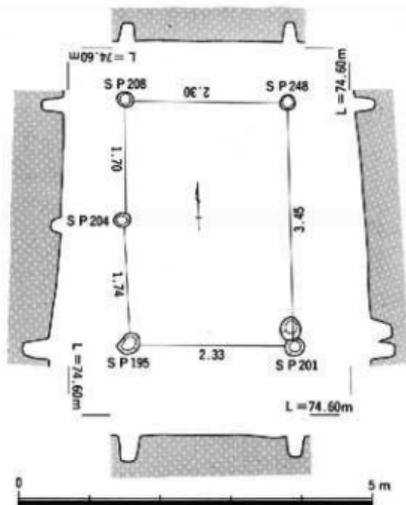
## 土坑

### 1号土坑 (SK1001) (第84図)

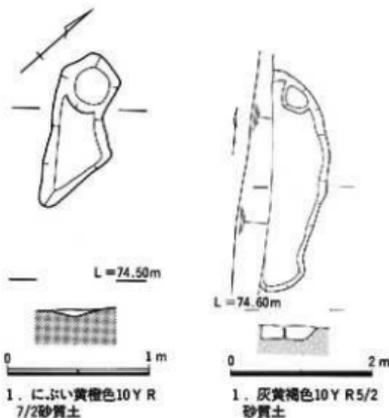
第8調査区西寄りN-33で検出し  
 た。長軸100cm、短軸36cm、深さ5cmを  
 測り平面形は北側に径40cmの円形の掘  
 り込みを持ちそれに接続する形で南側  
 に長方形の浅い掘り込みを持つ。覆土  
 はにぶい黄橙色の砂質土1層であり、  
 土師質土器、瓦器の小片が少量出土し  
 ている。13世紀代のものであろう。

### 2号土坑 (SK1002) (第85図)

第8調査区西壁際M・N-33で検出  
 した。西側は調査区外に延びており確  
 認できなかった。長軸307cm、短軸87cm、  
 深さ20cmを測る。平面形は長楕円形を  
 呈すと思われる。北側の一端に径40  
 cm余りの円形の掘り込みを持つ。埋土  
 は灰黄褐色砂質土の1層であり、土師  
 質土器、瓦器の小片が少量出土してい  
 る。



第83図 SA 1016実測図

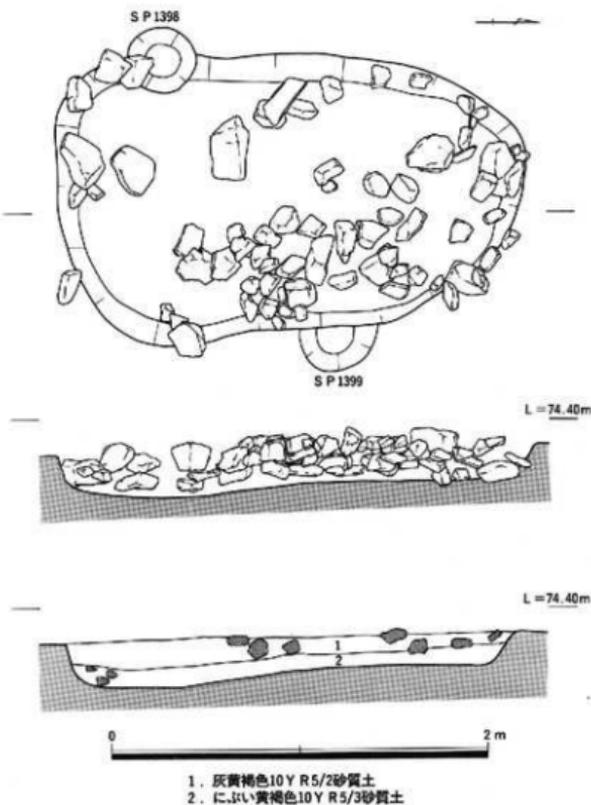


第84図 SK1001実測図

第85図 SK1002実測図

5号土坑 (SK 1005) (第86図)

第6調査区東壁際 M-31・32で検出した。東側でSP 1399を切り西側でSP 1398に切られている。長軸240cm、短軸143cm、深さ26cmを測り底面は南側がやや深く、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。平面形は楕円形を呈し上面は15~30cmの礫で覆われている。配置状況に規則性は認められないものの北東部に礫が集中している。覆土は灰黄褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土の2層に分層できるが、礫は上層中により多くみられる。遺物は第1層中に多く、土師質土器を中心として瓦器、中国産青磁などの小片が80点余り出土している。図示可能なものはないが、土師質土器は底部回転糸切りであり瓦器は和泉型の碗である。中国産青磁は龍泉窯系の碗である。本土坑はその形状から推測して中世墓の残欠としての可能性が考えられる。時期は出土遺物からして13世紀代であろう。



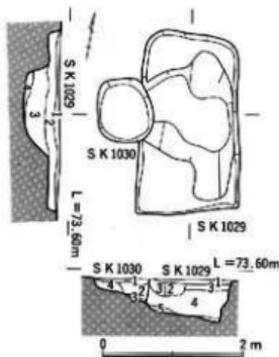
第86図 SK 1005実測図

心として瓦器、中国産青磁などの小片が80点余り出土している。図示可能なものはないが、土師質土器は底部回転糸切りであり瓦器は和泉型の碗である。中国産青磁は龍泉窯系の碗である。本土坑はその形状から推測して中世墓の残欠としての可能性が考えられる。時期は出土遺物からして13世紀代であろう。

29号土坑 (SK 1029) (第87図)

第2調査区南東隅 J・K-19で検出した。SK 1027・SK 1028と並列し、西側の一部をS

K1030により切られている。長軸257cm、短軸136cm、深さ60cmを測る。平面形は長方形を呈し底面は2段に掘り込まれている。覆土は5層に分層でき土師質土器、瓦器の小片が若干出土している。



### 30号土坑

(SK 1030)

(第87図)

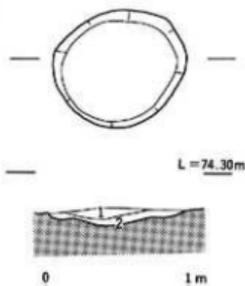
### 第2調査区南東隅

K-19で検出した。

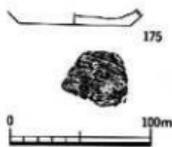
SK 1029を切って掘 第87図 SK 1029・SK 1030実測図

り込まれている。長軸92cm、短軸80cm、深さ34cmを測る。平面形は不整形円形を呈する。覆土は4層に分層でき、土師質土器、瓦器の小片が若干出土している。

- SK 1030
1. にぶい黄褐色10Y R 6/4砂質土
  2. 褐色10Y R 4/4砂質土
  3. 褐色10Y R 4/4砂質土
  4. 明黄褐色10Y R 6/6砂質土
- SK 1029
1. にぶい黄褐色10Y R 6/4砂質土
  2. にぶい黄褐色10Y R 6/3砂質土
  3. にぶい黄褐色10Y R 5/4砂質土
  4. 褐色10Y R 4/4砂質土
  5. 褐色10Y R 4/4砂質土



1. 黒褐色10Y R 2/2粘性砂質土
  2. 暗褐色10Y R 3/3砂質土
- 第88図 SK 1036実測図



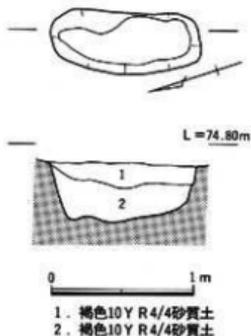
第89図 SK 1036出土遺物実測図

### 36号土坑 (SK 1036) (第88図)

第1調査区西寄りJ・K-9で検出した。長軸96cm、短軸81cm、深さ13cmを測り、平面形は不整形円形を呈する。土坑の上面は後世の削平を受けているが覆土は黒褐色粘性砂質土、暗褐色砂質土の2層に分層でき、土師質土器片が出土している。

### 出土遺物 (第89図)

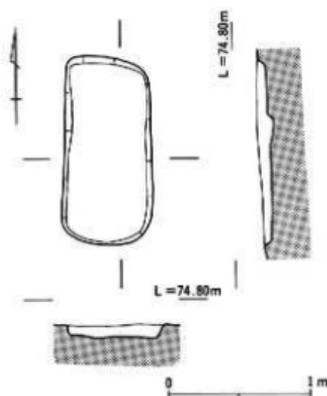
175は土師質土器の皿の底部である。外底面は静止糸切りにより切り放される。15世紀代のものであろう。



第90図 SK 1053実測図

### 53号土坑 (SK 1053) (第90図)

第11調査区中央部北寄りQ-48で検出した。SA 1015の西側に位置する。長軸104cm、短軸43cm、深さ41cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。覆土は褐色砂質土であるが礫の含み具



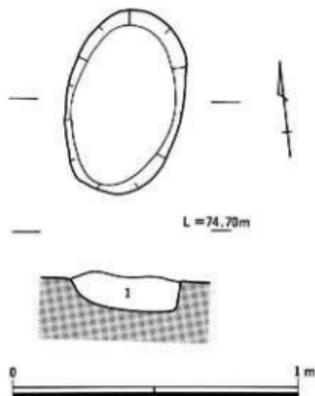
1. 褐色10Y R4/4砂質土

第91図 SK 1054実測図

合により2層に分層できる。覆土中より土師質土器、瓦器の小片が若干出土している。

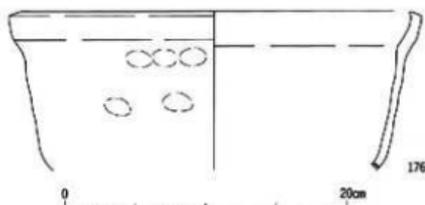
54号土坑 (SK 1054) (第91図)

第11調査区中央部P・Q-48で検出した。SA1015とSA1016の間に位置する。長軸132cm、短軸68cm、深さ12cmを測り、平面形は隅丸の長方形を呈する。底面は北側に若干の落ち込みが認められる。覆土は褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器の小片が若干出土している。



1. 褐色10Y R4/4砂質土

第92図 SK 1055実測図



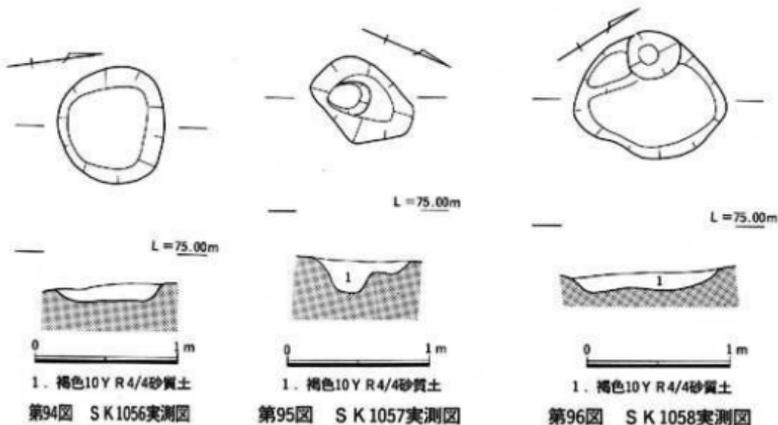
第93図 SK 1055出土遺物実測図

55号土坑 (SK 1055) (第92図)

第11調査区中央部P-49で検出した。SA1015とSA1016の間に位置する。長軸66cm、短軸39cm、深さ13cmを測り、平面形は隅丸の長方形を呈する。覆土は褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器鍋が出土している。

出土遺物 (第93図)

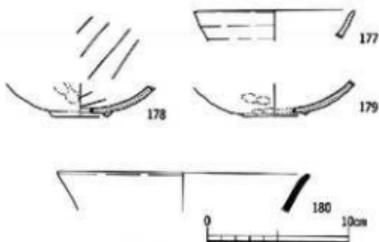
176は土師質土器の鍋である。口縁部が外反し体部外面にはユビオサエをとどめている。時



期は口縁部の形態より14世紀代のものと思われる。

#### 56号土坑 (SK1056) (第94図)

第11調査区中央部Q-49で検出した。SA1015と重複する。長軸78cm、短軸63cm、深さ12cmを測り、平面形は不整形を呈する。覆土は褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器の小片が若干出土している。



第97図 SK1058出土遺物実測図

#### 57号土坑 (SK1057) (第95図)

第11調査区北壁隙Q-R-51で検出した。SA1010を切って構築されている。長軸73cm、短軸49cm、深さ24cmを測り、平面形は不整形を呈する。底面中央にピット状の掘り込みを持つ。覆土は褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器蓋の小片が出土している。図示することはできないが内傾する口縁に短い鈎のつくもので14~15世紀のものであろう。

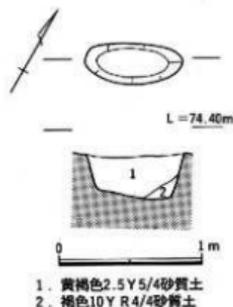
#### 58号土坑 (SK1058) (第96図)

第11調査区中央部で検出された。SA1009の南側に位置し、西側の一部をSP1229に切られる。長軸103cm、短軸80cm、深さ14cmを測り、平面形は不整形を呈する。覆土は褐色砂質

土1層である。覆土中より土師質土器、瓦器、中国産青磁等が出土している。

#### 出土遺物 (第97図)

177は土師質土器の杯である。178・179は瓦器碗の底部である。ともに焼成が軟質で炭素の吸着が不良である。体部外面にユビオサエを施し内面にはヘラミガキを施す。180は中国産青磁で龍泉窯系の碗である。時期は13～14世紀にかけてのものと思われる。



1. 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
2. 褐色10Y R4/4砂質土

第98図 S K 1059実測図

#### 59号土坑 (S K 1059) (第98図)

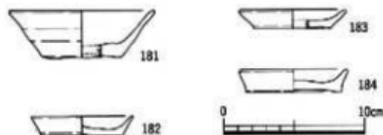
第11調査区西寄り北壁際Q-51で検出した。SA 1012と重複する。長軸70cm、短軸30cm深さ30cmを測り平面形は楕円形を呈する。覆土は黄褐色砂質土と褐色砂質土の2層に分層できる。埋土中より土師質土器、瓦器の小片が若干出土している。

#### 61号土坑 (S K 1061) (第99図)

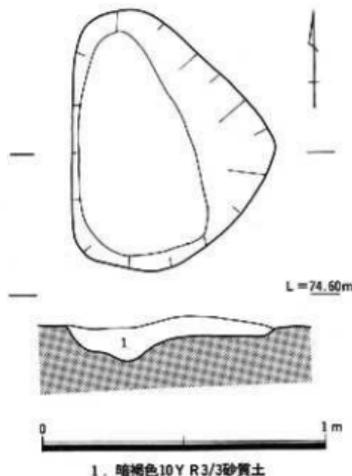
第14調査区中央部で検出された。SO 1006・SO 1007の西側に位置する。長軸88cm、短軸72cm、深さ10cmを測り、平面形は隅丸の三角形を呈する。上面は削平を受けており、埋土は暗褐色砂質土1層である。覆土中より土師質土器杯、皿が出土している。

#### 出土遺物 (第100図)

181は土師質土器の杯である。182～184は土師質土器の皿である。いずれも内外面ヨコナデ、底部は回転糸切りである。技法の特徴からすると、13世紀代のものと思われる。



第100図 S K 1061出土遺物実測図



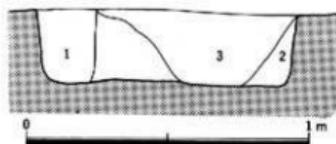
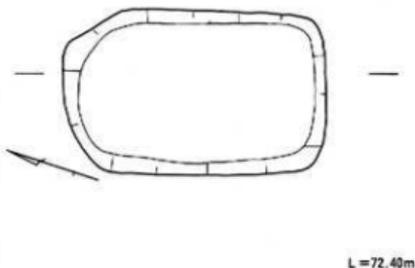
1. 暗褐色10Y R3/3砂質土

第99図 S K 1061実測図

## 土壌墓

### 1号土壌墓 (S T 1001) (第101図)

第16調査区南側P-79で検出した。周囲に遺構はみられず単独で検出されている。長軸93cm、短軸58cm、深さ26cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し、底面は平坦、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。長軸方向はN-18°-Wに向く。覆土は3層に分層でき、人為堆積の状況を示す。底面に木棺の痕跡は確認できず、釘等の出土も見られないため直接埋葬されたものと思われる。覆土中より骨片、土師質土器片が出土している。

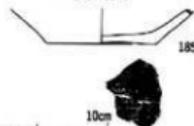


1. 補灰色10Y R5/1砂質土
2. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
3. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土

第101図 S T 1001実測図

### 出土遺物 (第102図)

185は土師質土器杯の底部である。内外面ヨコナデで底部は静止糸切りされる。15世紀代のものであろう。



第102図 S T 1001出土遺物実測図

## 鍛冶関連遺構

ここでは第2調査区において集中的に検出された土坑、小ピットで焼土、鉄滓などを出土した鍛冶にともなうと思われる遺構について述べる。

### 1号鍛冶遺構 (S H 1001) (第103図)

第2調査区南西隅、J-13で検出した。西側のS H 1002とともに、第2調査区で検出された鍛冶炉群中最も南に位置する。1基の土坑と2基の小ピットにより構成される。土坑は南側が調査区外に延びており全容は不明であるが長軸193cm、短軸124cm、深さ12cmを測る。平面形は隅丸の長方形を呈し底面は平坦、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。小ピットP1は土坑の東側に接する形で掘られており直径36cm、深さ28cmを測り平面形は不整形を呈する。P2は土坑の北壁に沿う形で掘られており直径38cm、深さ28cmを測り、平面形は不整形を呈する。土坑内は底面から壁にかけて焼けており焼土、炭化物が広がっている。覆土は黒褐色砂質土、褐色砂質土の2層に分層できるが、特に上層において焼土の充満が観察された。

覆土中より鉄滓、小鉄塊、土師質土器、瓦器などが出土している。2基の小ピット内からも同様に焼土、鉄滓の出土がみられたが、土坑内に比べて鉄滓、小鉄塊の出土が目立った。

#### 出土遺物 (第104図)

186は瓦器碗である。器壁が厚く、焼成が軟質で炭素の吸着は不良である。体部内面にはヘラミガキ、外面下半にはエビオサエをとどめる。187は土師質土器の皿である。内外面ヨコナデで底部回転糸切りである。

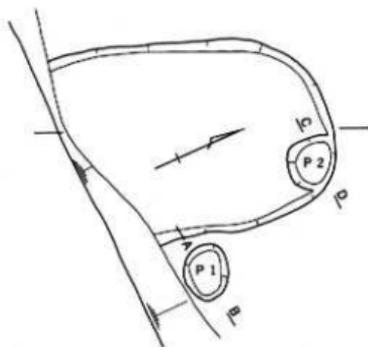
本遺構はその形状や遺物の出土状況からすると「野鍛冶」に関連するものと思われる。特に小ピットは鍛冶炉に相当するものと考えられる。操業時期は出土物より13世紀代と考えられる。

#### 2号鍛冶遺構 (SH1002) (第105図)

第2調査区南西隅、J-14で検出された。南半分は調査区外に延びており全容は不明であるが長軸90cm、短軸66cm、深さ14cmを測る。平面形は一方の尖る楕円形を呈すると考えられる。底面は平坦、壁は急角度で立ち上がる。覆土はにぶい黄褐砂質土1層で、鉄滓、瓦器碗などが少量出土している。

#### 出土遺物 (第106図)

188は瓦器碗の底部である。見込みに斜格子のヘラミガキを施し断面三角形の高台を貼り付ける和泉型瓦器碗である。



L=73.80m



L=73.80m A B L=73.80m C D



1. 黒褐色10Y R3/2砂質土(炭化物、焼土、土器片含む)
2. 褐色10Y R4/4砂質土
3. 黒褐色10Y R3/1砂質土(炭化物、焼土、鉄滓を多量に含む)

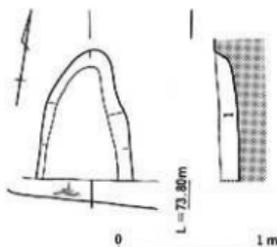
第103図 SH1001実測図



第104図 SH1001出土遺物実測図

### 3号鍛冶遺構 (SH1003) (第107図)

第2調査区中央部南寄り、J-16で検出した。SH1001・SH1002の北側に位置する。長軸112cm、短軸68cm、深さ28cmを測り平面形は楕円形、底面は平坦であり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。底面及び壁面は火熱を受け赤変している。覆土は、にぶい黄褐色砂質土であり礫の含み具合により2層に分層できる。覆土中より炭化物、鉄滓、土師質土器片が少量出土している。



1. にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土  
(炭化物、鉄滓含む礫多量に含む)

第105図 SH1002実測図

### 出土遺物 (第108図)

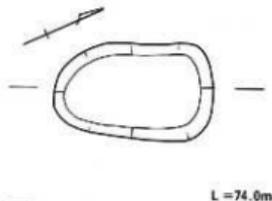
189は土師質土器である。立ち上がりの形状より杯の底部と思われる。内外面ヨコナデで底面は回転糸切りされている。時期は13世紀代であろう。



第106図 SH1002出土遺物実測図

### 4号鍛冶遺構 (SH1004) (第109図)

第2調査区中央部西寄り、L-14で検出された。SH1003の西側に位置する。長軸142cm、短軸80cm、深さ17cmを測り、平面形は楕円形、底面は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。覆土は褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の2層に分層でき、上層において炭化物、鉄滓を出土している。覆土中より弥生土器壁の小片が出土したが、混入によるものと思われる。良好な出土遺物がないため時期の特定は困難であるが、周囲の同様の遺構の時期から考えると、本遺構も13世紀代の所産であると考えるのが妥当であろう。



1. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土  
(炭化物、鉄滓含む)  
2. にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土  
(礫多量に含む)

第107図 SH1003実測図

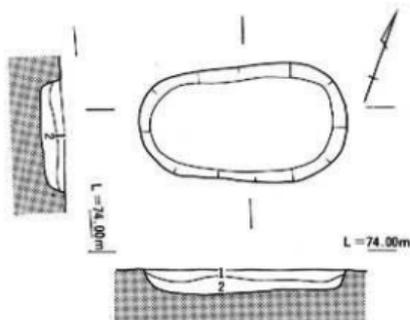
### 6号鍛冶遺構 (SH1006) (第110図)

第2調査区中央部西寄りK-15で検出した。SH1003とSH1004の間に位置する小ビット状の遺構で長軸55cm、短軸31cm、深さ16cmを測る。平面形は楕円形を呈し、底面はやや丸く壁は急角度で立ち上が



第108図 SH1003出土遺物実測図

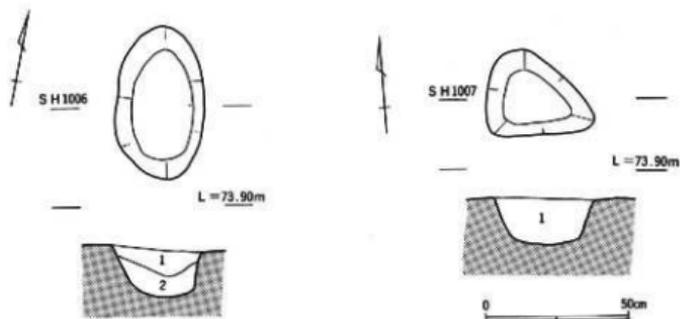
る。壁及び底面は被熱により赤変している。覆土は黒褐色砂質土と褐色砂質土の2層に分層でき、上層において焼土、炭化物、鉄滓が多く出土した。本遺構はSH1001の小ピットと同様の鍛冶炉に相当するものと思われる。時期を特定できる出土遺物はないがSH1001の小ピットとの類似や周囲のSH1003SH1004との関連を考えると13世紀代と考えられる。



1. 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物、鉄滓含む)
2. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土(炭化物少量含む)

第109図 SH1004実測図

7号鍛冶遺構(SH1007) (第110図)  
第2調査区中央部西寄り、L-15で  
検出された。SH1004・SH1006の北



- SH1006
1. 黒褐色10Y R2/3砂質土(炭化物、焼土、鉄滓を多量に含む)
  2. 褐色10Y R4/4砂質土

- SH1007
1. 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物、土師片、鉄滓を含む)

第110図 SH1006・SH1007実測図

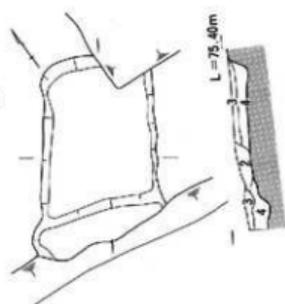
側に位置する小ピット状の遺構で長軸40cm、短軸30cm、深さ17cmを測る。平面形は楕円形を呈し底面はやや丸く壁は急角度で立ち上がる。壁及び底面は被熱により赤変している。覆土は黒褐色砂質土1層で炭化物、鉄滓、土師質土器片などが出土した。本遺構もSH1006と同様の鍛冶炉にあたるものと思われる。土師質土器が細片であり時期の特定は困難であるが、SH1001、SH1006同様13世紀代におさまると考えられる。

## 炭窯

ここでは平面形が長楕円形または長方形を呈する土坑で、壁及び底面が焼け、覆土中に炭化物を多量に含む、木炭を焼成するのに用いられたと思われる炭窯について述べる。

### 1号炭窯 (S O 1001) (第111図)

第6調査区東より、P-31で検出した。S O 1002・S O 1003の東側に位置する。北東側の一角は攪乱により切られており、南西側は削平を受けている。残存部の長軸244cm、短軸158cm、深さ20cmを測る。長軸方向N-35°-Eであり、等高線に対し斜めに向く。平面形は残存部からすると隅丸の長方形を呈するものと思われ南西側の削平部分のあたりでやや外側に張り出す。底面は南西側から北東側に向かい緩やかに登るが、張り出し部分を境にテラス状の高まりを見せる。壁は北東側では急角度に立ち上がる。覆土は4層に分層でき、特に第4層において多量の炭化物を含む。覆土中より少量の土師質土器片、須恵質土器片が出土している。

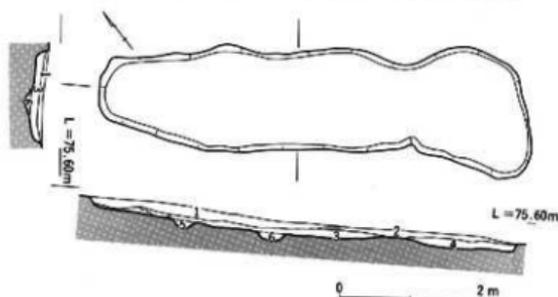


L = 75.40m

0 2m

1. 明黄褐色10 Y R 6/6砂質土
2. にぶい黄褐色10 Y R 5/3砂質土
3. 褐灰色10 Y R 5/1砂質土
4. 暗褐色10 Y R 3/3砂質土 (炭化物多量に含む)

第111図 S O 1001実測図



L = 75.60m

L = 75.60m

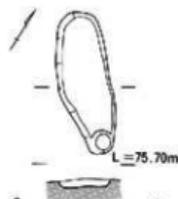
0 2m

1. 黒褐色10 Y R 2/2砂質土 (炭化物多量に含む)
2. 黒褐色10 Y R 2/3砂質土 (炭化物少量含む)
3. 黄色10 Y R 5/2砂質土 (炭化物少量含む)
4. にぶい黄褐色10 Y R 4/3砂質土
5. 黒褐色10 Y R 3/1砂質土 (炭化物多量に含む)
6. 黒褐色10 Y R 3/2砂質土 (炭化物少量含む)

第112図 S O 1002実測図

### 2号炭窯 (S O 1002) (第112図)

第6調査区東寄り北壁際P・Q-29・30で検出した。S O 1001の西側に位置しS D 1002の北側を切っている。長軸610cm、短軸120~136cm、深さ20cmを測り、本調査において確認された炭窯の中では大型である。長軸方向はN-46°-Wであり等高線に対し斜めに向き、S O 1001とは



L = 75.70m

0 2m

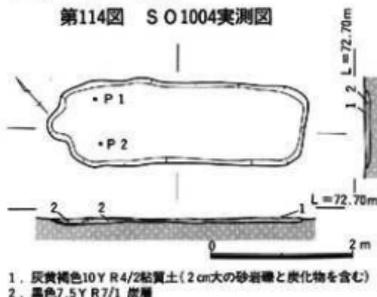
1. 褐灰色 10 Y R 5/1砂質土

第113図 S O 1003実測図

直交する。平面形は隅丸の長楕円形であるが北西端がやや尖り気味である。南東側は北西端から440cmあたりで狭くなり、南東端に向かい不整形形状に広がる。底面は南東端から北西端に向かい緩やかに登る。北西側に2箇所落ち込みがあり南東側の狭い部分は土手状の高まりが認められる。壁は北西端に比べ南東端が急角度に立ち上がる。底面や壁の傾斜から考えると、北西端が焚口、南東端が煙道にあたるものと思われる。覆土は6層に分層できるがいずれも炭を含み、底面には焼土が広がる。遺物は覆土中より土師質土器の小片が若干出土している。出土遺物から考えると操業時期は13世紀代となろう。



第114図 SO1004実測図

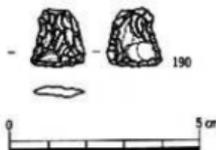


第115図 SO1005実測図

### 3号炭窯 (SO1003) (第113図)

第6調査区北東隅Q-30で検出した。S

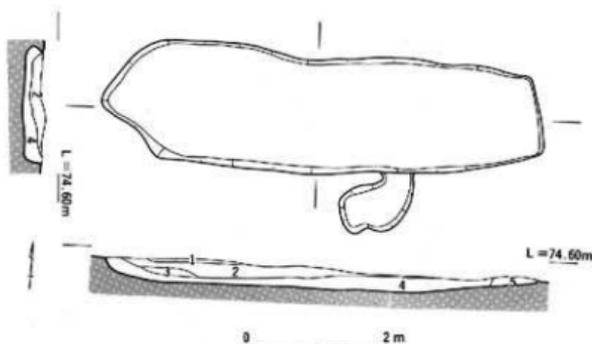
O1002の北側に位置する。長軸210cm、短軸67cm、深さ12cmを測り、本調査において確認された炭窯の中では最も小型である。長軸方向はN-43°-Wで等高線に対し斜めに向きSH1002とは平行に並ぶ。平面形は楕円形であるが南東端に直径30cmの小ピットを持つ。煙道にあたるものと思われる。底面は平坦であり特にピット状の掘り込みはみられない。覆土は褐灰色砂質土1層であり炭を少量含む。覆土中より遺物の出土を見ないため時期の特定は困難であるがとなりのSO1002と長軸方向が一致することから、本遺構もほぼ同時期に存在したものと思われる。



第116図 SO1005出土遺物実測図

### 4号炭窯 (SO1004) (第114図)

第6調査区北西隅P・Q-25で検出した。SO1001~1003の西に位置し、単独で検出されている。長軸417cm、短軸146cm、深さ16cmを測る。長軸方向はN-72°-Wで等高線に対し平



- |                      |                             |
|----------------------|-----------------------------|
| 1. にじい黄褐色10Y R4/3砂質土 | 4. 黒色10Y R1.7/1砂質土(炭化物多量含む) |
| 2. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土   | 5. 黒褐色10Y R3/2炭層            |
| 3. 褐色10Y R4/4砂質土     |                             |

第117図 SO1006実測図

行に向く。平面形は楕円形を呈し北西端に50×68cmの突出部を持つ。この突出部が煙道にあたり、反対の南東端が焚口にあたるものと思われる。底面は中央部と煙道部分が落ち込み、焚口から煙道に向かい緩やかに下っている。底面には焼土が広がる。覆土は3層に分層でき、いずれも炭を含む。特に煙道部分の落ち込みには多量の炭が堆積している。覆土中より弥生土器、土師質土器の小片が出土しており、採業時期としては13世紀代が考えられる。



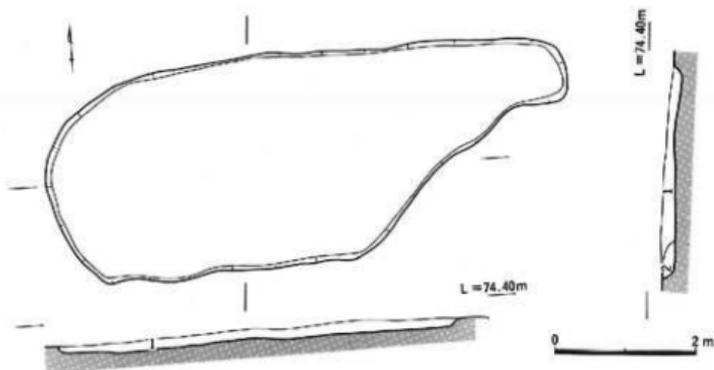
第116図 SO1006出土遺物実測図

#### 5号炭窯 (SO1005) (第115図)

第9調査区北壁寄りJ-35で検出された。付近に遺構はなく1基のみ単独で検出されている。長軸357cm、短軸111cm、深さ6cmを測る。長軸方向はN-45°-Wで等高線に対し斜めに向く。平面形は隅丸の長方形であり、北西端に25×56cmの突出部を持つ。この突出部が煙道にあたり反対側の南東端が焚口にあたるものと思われる。底面は平坦であるが焚口部分が若干落ち込んでいる。壁は焚口に対し煙道部分の方が緩やかに立ち上がる。また煙道寄りに直径5cmの小ピット2基が左右2箇所に対置されており、煙道と炭化室を区切る架構物のために設けられたものと考えられる。底面には焼土が広がる。覆土は2層に分層でき、下層において多量の炭の堆積がみられた。覆土中より石鏃が1点出土しているが混入によるものである。

#### 出土遺物 (第116図)

190はサメカイト製の石鏃である。先端部を欠損しているが平基式である。



1. 黒色10Y R5/3砂質土(炭化物多量に含む)
2. 黒色10Y R1.7/1砂質土(炭化物含む)

第119図 SO1007実測図

#### 6号炭窯 (SO1006) (第117図)

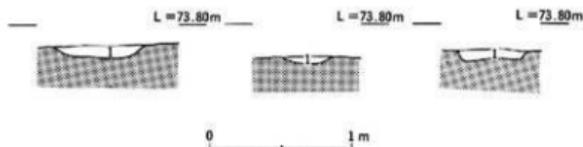
第14調査区中央部西寄り、V-74・75で検出した。SO1007の北側に位置する。南側で土坑を切っている。長軸628cm、短軸162cm、深さ36cmを測る。長軸方向はN-88°-Wで等高線に対し斜めに向く。平面形は隅丸の長方形であり西端に72×120cmの突出部を持つ。この突出部を煙道として東端に焚口を持つ。底面は焚口から炭化室に向かい下った後平坦になり、煙道部分で急角度に立ち上がる。覆土は5層に分層でき、特に下層の4・5層に多量の炭が堆積する。上層の1～3層は炭を余り含まず、落下した上部構造の痕跡とも考えられる。覆土の炭層中より土師質土器の皿が1点出土している。

#### 出土遺物 (第118図)

191は土師質土器の皿である。内外面ヨコナデ、底部回転糸切りの13世紀代のものである。

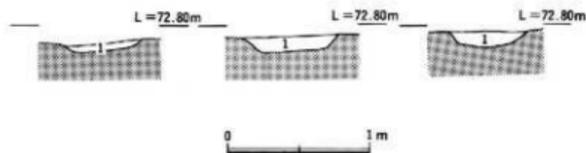
#### 7号炭窯 (SO1007) (第119図)

第14調査区中央部西寄りT・V-74・75で検出した。SO1006の南側に位置する。長軸570cm、短軸120～298cm、深さ19cmを測る。長軸方向はN-53°-Eで斜面に対し平行に向く。平面形は楕円形的一端が細長く突出する形を呈し、底面は平坦である。楕円形の広い部分が炭化室、突出した部分が煙道にあたると思われる。覆土は2層に分層でき、内部には炭化物が充満している。覆土中より弥生土器の細片と須恵質土器の小片が少量出土している。操業時期は北側のSO1006の操業時期とほぼ同じ13世紀代と考えると大過なからう。



1. 灰黄褐色10Y R5/2砂質土(1~4cm大の砂礫を多量に含む)

第120図 SD1003実測図



1. にぶい黄褐色10Y R5/3砂質土(1~4cm大の砂礫を多量に含む)

第121図 SD1004実測図

## 溝

### 3号溝 (SD1003) (付図3、第120図)

第6調査区南側L-26~29を東西に横切る形で17.5mにわたり検出された。弥生時代の住居跡SB1003とSB1004を切っている。幅は37~80cm、深さ10cm余りである。覆土は1層であり、砂礫を多く含んでいる。覆土中より土師質土器、瓦器、須恵質土器の細片が出土している。

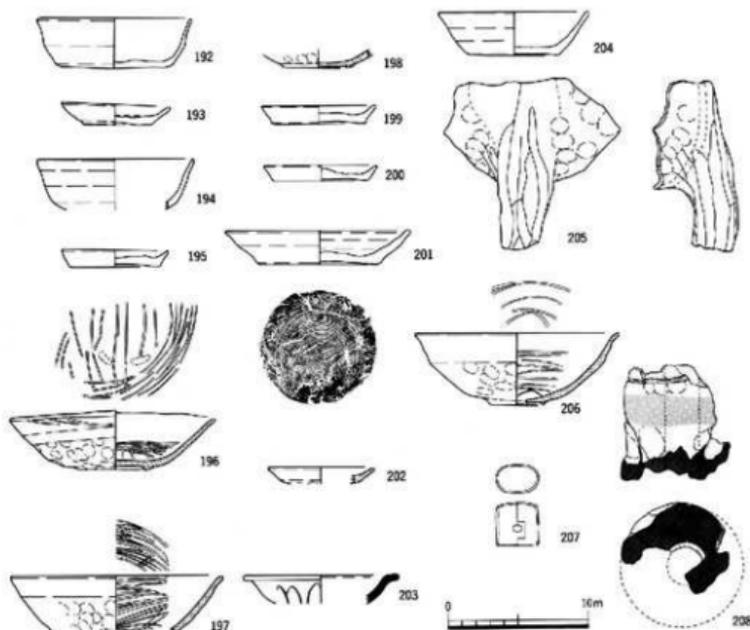
### 4号溝 (SD1004) (付図3、第121図)

第7調査区中央部H-27~30を東西に直線的に横切る形で17mにわたり検出された。斜面に対し平行に向き、北側のSD1004と平行する。幅は46~117cm深さ10cm余りで底面は平坦である。覆土は1層で砂礫を多く含む。覆土中より土師質土器の細片を出土している。

## 柱穴出土遺物 (第122図)

ここでは掘立柱建物跡を立てるにいたらなかった柱穴、小穴内より出土した遺物の内、図示可能なものを取り上げる。

192・193は11区、O-48で検出したSP1197より出土した土師質土器の杯と皿である。共に内外面ヨコナデ、底部回転糸切りである。194~197は11区、P-50で検出したSP1385よ



第122図 柱穴出土遺物実測図

り出土した。194・195は土師質の杯と皿であり、196・197は瓦器碗である。瓦器碗は体部外面にユビオサエをとどめ、内面にあらいへらミガキを施す。196は内面見込みに目跡状の重ね焼きの痕跡を残す。198～200は11区、O-47・48で検出したS P 1193より出土した。198は焼成が軟質で炭素の吸着も不十分な瓦器碗の底部である。199・200は底部回転糸切りの土師質土器皿である。201は11区、O-48で検出したS P 1200より出土した完形の土師質土器皿である。底部は回転糸切りであり、他の小皿というべき皿に比べると大形であり焼成も堅緻である。202は11区、P-49で検出したS P 1251より出土した瓦器の小皿である。底部にユビオサエをとどめる。203は11区、Q-51で検出したS P 1287より出土した青磁の小碗である。口縁部で外反し、体部に蓮弁文を施す龍泉窯系青磁杯Ⅲ-4<sup>(1)</sup>であり13世紀後半に位置づけられる。204・205は11区、P-48で検出したS P 1249より出土した。204は土師質土器の杯、205は瓦質土器の鍋あるいは釜の脚部である。206は14区、T-71で検出したS P 1415より出土した瓦器碗である。体部外面にユビオサエをとどめ、内面にあらいへらミガキを施す。和泉型瓦器碗Ⅲ期<sup>(2)</sup>のものである。207は11区、Q-51で検出したS P 1350より出土した銅製の刀

装具と思われる。中央に懸通孔を持つ。208は6区、O・P-30で検出したSP1018より出土した鑄羽口である。外径9cm、内径2.8cmを測り、内面には成形時の擦痕をとどめる。先端部に黒色のガラス状に溶融した鉛滓が付着している。

## (5) 近世

### 梵鐘鑄造関連遺構

#### SH1005 (第123図)

第14調査区北端、U・V-79で検出した。北から南に向かい緩やかに下る斜面上に掘り込まれた土坑であり、確認面での規模は長軸2.04m、短軸1.94m、深さ1.2mを測る。平面形は不整形円形を呈し北東部が若干突出する。底面は平坦であり長軸1.71m、短軸1.56mを測る。底面に小ビット状の掘り込みや溝などは認められなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北東部と南西部の上部でやや緩やかになる。覆土は9層に分層できる。各層からは鋳型片、溶解炉片、銅滓、粘土、白色塊、銅製品、瓦、焼けた砂岩礫等の遺物が多量に出土した。鋳型片、溶解炉片は土坑内全体に見られ、銅滓は南西側から南側にかけて集中して出土した。粘土はブロック状に各部に散在していた。これらは、いずれも鑄造作業にともなう遺物であり、出土状況からすると鑄造作業が終了した後に使用済みの鋳型片や溶解炉片等を一括して廃棄したものと思われる。鑄造作業の行われた年代であるが、覆土中より出土した寛永通宝、煙管雁首の形態から考えて17～18世紀におさまると考えておきたい。

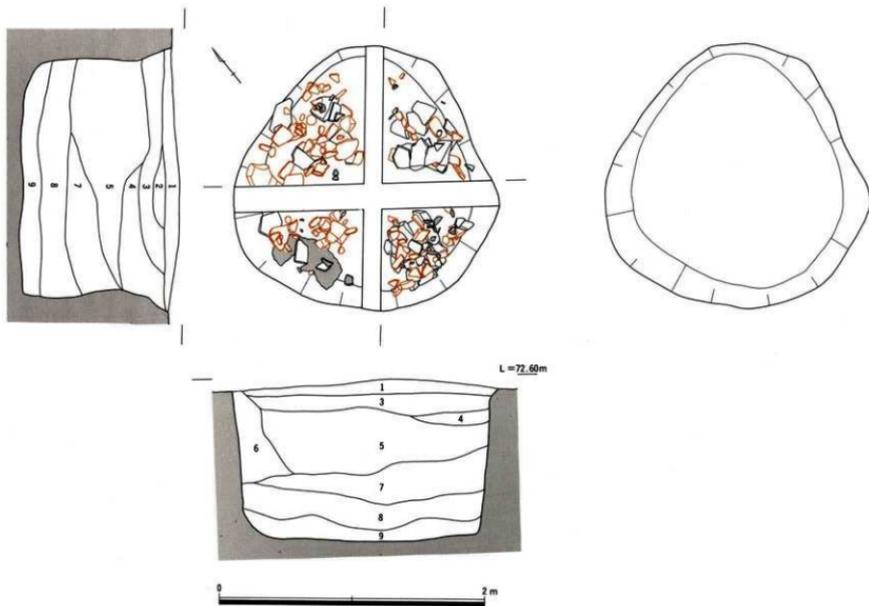
#### 出土遺物 (第124～133図)

土坑内からは鋳型片、定盤と考えられるもの、溶解炉片、銅滓、粘土、白色塊、銅製品、瓦、焼けた砂岩が出土している。

鋳型片はすべて梵鐘の鋳型であるが、①粗・中・仕上げの真土の三層構造が認められ、鋳型面にクロミを塗布するもの。②これら鋳型の外枠にあたるアラ型の破片。の2種類に分けられる。アラ型の内面の一部には鋳型部分の粗真土が付着しており、梵鐘鋳型のほとんどはこのアラ型から遊離したものであることがわかる。出土総点数は2556点を数え、総重量にして153.8kgを測る。

梵鐘鋳型を掘り付ける土台にあたる定盤は復元すると直径90cm余りの輪状を呈する。総点数は52点、総重量は52.1kgを測る。他の鋳型やアラ型の破片に比べて破損の度合いは低い。

溶解炉片は復元の結果、地金、燃料の投入口にあたる装入口(上こしき)、羽口を装着し送風、地金の溶解を行う溶解帯(こしき)、溶解した金属を溜める湯溜(鑪)の3部分が確認で



1. にじい黄褐色10 Y R 4/3砂質土(炭化物含む1~3 cm次の砂岩礫を含む)
2. にじい黄褐色10 Y R 5/4砂質土(炭化物含む1~3 cm次の砂岩礫少量に含む)
3. 褐色10 Y R 4/4砂質土(炭化物含む1~3 cm次の砂岩礫少量含む)
4. にじい黄褐色10 Y R 5/4砂質土(炭化物含む1~3 cm次の砂岩礫を含む)
5. にじい黄褐色10 Y R 5/4砂質土(炭化物含む1~50 cm次の砂岩礫多量に含む)
6. にじい黄褐色10 Y R 4/3砂質土(炭化物含む1~5 cm次の砂岩礫を含む)
7. 反黄褐色10 Y R 4/2砂質土(炭化物含む1~3 cm次の砂岩礫少量に含む)
8. にじい黄褐色10 Y R 5/3砂質土(炭化物含む1~5 cm次の砂岩礫多量に含む)
9. にじい黄褐色10 Y R 4/3砂質土(炭化物極少量含む1~3 cm次の砂岩礫少量含む)

きた。<sup>(3)</sup> これら溶解炉の破片は、こしきに装着された羽口も含め778点を数え、総重量で85.1kgを測る。

この他に定盤と同じく輪状を呈する大形の土製品が2個体分出土している。総点数98点、総重量は17.6kgを測る。また円筒状で壁面に直径3cm弱の円孔を巡らせた土製品が総点数62点、総重量7.5kg程出土している。

銅滓はその外観から3種類ほどに大別できる。①球状の銅の塊や緑青を吹き木炭や砂礫をかみ込んだもの。②表面がなめらかで光沢を持つガラス状の滓で全体に暗青色～青灰色を呈する。破面に0.5～5mm程の気孔が観察できる。一部に緑青が認められ、木炭をかみ込んだもの。③表面がややざつており、光沢がなく暗赤色を呈する。全体に緑青が付着するものがあり、表面には0.5～2mm程の気孔が観察できる。破面は鈍い赤色を呈し、0.5～5mm程の気孔が多数認められる。これら銅滓は総点数で626点を数え、総重量で11.5kgを測る。

粘土は粒子が細かく浅黄色を呈するもので、5～15cm大のブロック状のものが多く、また一部に浅黄色のものより異なり被熱し灰赤褐色を呈し、胎土中に稷、粟を含むものがある。これらは片面に真土砂がつくものや梵鐘アラ型の形状に類似するものも見られることからアラ型の未製品と考えられる。こうしてみるとこれら粘土塊は梵鐘鋳型の原料として用意されたものである可能性が高い。このような鋳型の未製品と考えられる粘土塊が75点、原料となる粘土塊が145点のあわせて9.5kg分出土している。

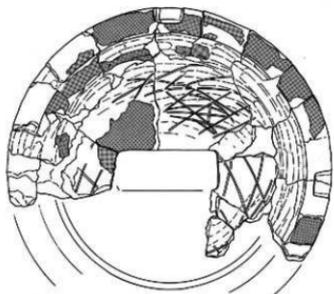
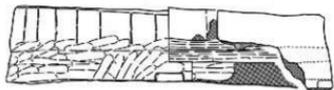
瓦は出土したすべてが平瓦であり、総点数149点、総重量30kgを測る。瓦の中には被熱により白色化したものや銅滓の付着したものなどがみられ、これら瓦も鋳造工程の何らかの過程において使用されたものと考えられる。白色塊は非常に細かい粒子からなっており内部に砂粒をかみ込んでいる。外観は、地金の溶解に際し副原料として用いられる石灰<sup>(4)</sup>に酷似しているが、X線解析を行った結果、二酸化ケイ素を主成分とした耐火性の高い物質であることが判明した。総数で36点、総重量2.1kg分出土している。炭は年輪が明瞭に認められ、脆く、軽いなどの点から考えると木炭というよりは消炭に近いものであるといえる。砂岩は拳大のものが168点出土している。大半は被熱により赤変しており、鋳造作業場の近辺で使用されたものであると考えられる。また煙管、銅銭を始めとする銅製品が30点余り出土している。これら銅製品は多種にわたり破損品が多いことから、梵鐘の鋳造にあたり鋳込み用の銅原料として集積されたものと考えられる。こうした鋳造関連の出土遺物が本遺構内だけで総数4745点、377.2kg分出土した。

以下に出土遺物の内、図示可能なものをあげ、順次説明を加える。

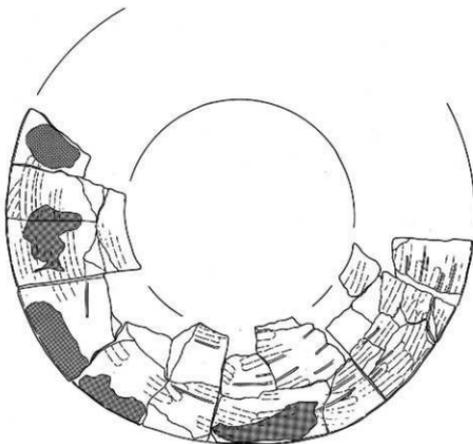
209～211は梵鐘鋳型の外枠にあたるアラ型である。209はアラ型の最上部、笠型部分にあたる。稷、粟を混ぜた粘土で形造られており、外面の上半は桶状の圧痕がつき、下半には指ナデの痕跡が認められる。全周の2/5程を欠損しているが上端の直径60.6cm、下端の直径

64.8cmと若干下方に開く台形状となる。また上面の中央には20.4×10.8cmの長方形の龍頭埋けこみ孔が設けられている。湯口に関しては確認できなかったが、欠損部分に設けられていたものと考えておきたい。内面は段状になっており全面に指ナデの痕跡が認められた。また中央の平坦面には龍頭孔を中心として菱垣状の沈線が巡らされている。こうした菱垣状の沈線や指ナデの痕跡をかかりとして内面に真土砂を塗布し挽き型によって鑄型面を形成したもののと思われる。こうした真土砂が一部に残存しているが鑄型面となる部分は全て剝離しており、鑄型から製品を取り出す際に破壊されたものと思われる。またこのアラ型の下端面には2ヶ所に6×3cmの方形の切り込みがあり、第2段目のアラ型との合印と考えられる。現存する切り込みは2ヶ所であるがこれらはおよそ90°の位置にあり、元々は4ヶ所に設けられていたものであろう。また下端面上には薄く真土砂が塗布されており、何段かに積み上げられたであろうアラ型同士を接合する際の位真土と考えられる。

210は下端に接合面を持ち内傾している。209と同様糶、糶を混ぜた粘土で形造られている。外面は平滑に仕上げられているが内面には指ナデの痕跡をとどめる。211も同様であるが内面には竪穴または斜位の沈線が施されている。212は梵鐘鑄型の土台となる定盤と呼ばれるものである。大形の輪状を呈し外径93cm、内径45.6cm、高さ11.4cmを測る。梵鐘アラ型と同様糶、糶を混ぜた粘土で形造られており、成形後に20~30cm大のブロック状に切断されている。現存部では6ヶ所で確認でき、元々は10~12のブロックに分割されていたと考えられる。上面及び側面には指ナデの痕跡をとどめる。また上面には幾筋かの沈線が刻まれており、真土砂の塗布も一部にみられる。こうした真土砂は梵鐘のアラ型を定盤の上に固定する際に用いられたものと考えられる。213~215は龍頭の鑄型である。213・214は鑄型面を明瞭にとどめておりいずれも龍の額から龍頭と笠型をつなぐ円柱部分までが認められる。共に接合面を持ち213と214は互いに接合面で左右対象となることからこの2点は二頭一對の龍頭の内の片方であると思われる。215~217は鑄型面が剝落しているがいずれも213・214と同様の胎土、形状を示し、接合面を持つもう一方の龍頭鑄型にあたるものと思われる。これら龍頭鑄型は他の部位の鑄型とは胎土が異なり、微砂粒を含む肌理の細かい黄褐色の粘土を用いて内部には少量の糶を混入している。内面にクロミの塗布は認められず鑄型面は橙色を呈する。218~230はいずれも縦方向にカーブを持ち笠型付近の鑄型にあたる。残存厚は概ね1~2.5cmほどで背面はいずれも破損している。断面を観察すると外側から内側に向かい真土砂が三層に分かれ内側に向かうほど粒子が細くなるのが観察できる。これは鑄型形成時のいわゆる粗真土、中真土、仕上真土に相当するものである。比較的厚みのある220を例にとると、鑄型面から背面に向かい4mm程が灰オリーブ色の仕上真土、10mm程が黒褐色の中真土、13mm以上が暗褐色の粗真土となっている。仕上真土、中真土には混入物はなく、粗真土には糶や砂粒が含まれている。220~224・226・227は鑄型面にクロミが残存している。231~243は平坦な鑄型面を



209



210



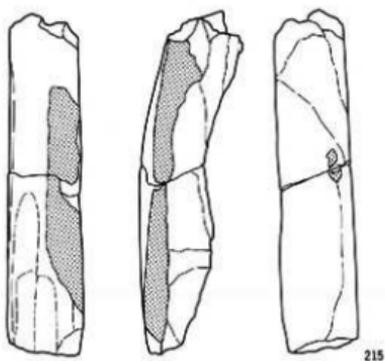
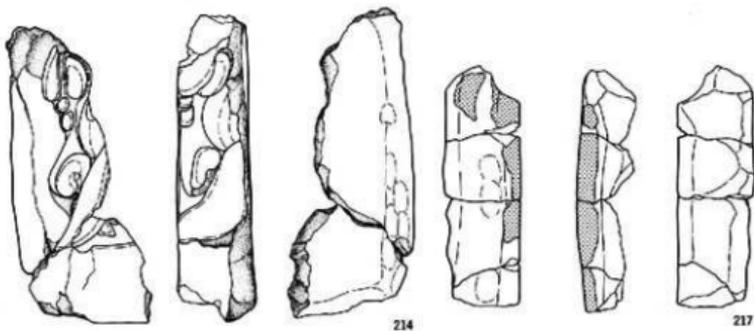
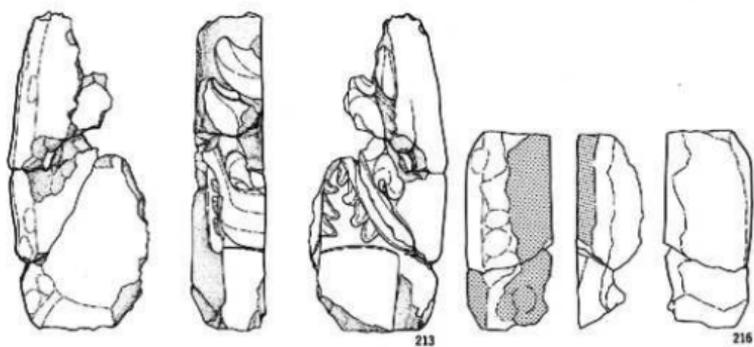
212



211

スタリールートンは真土付層部分

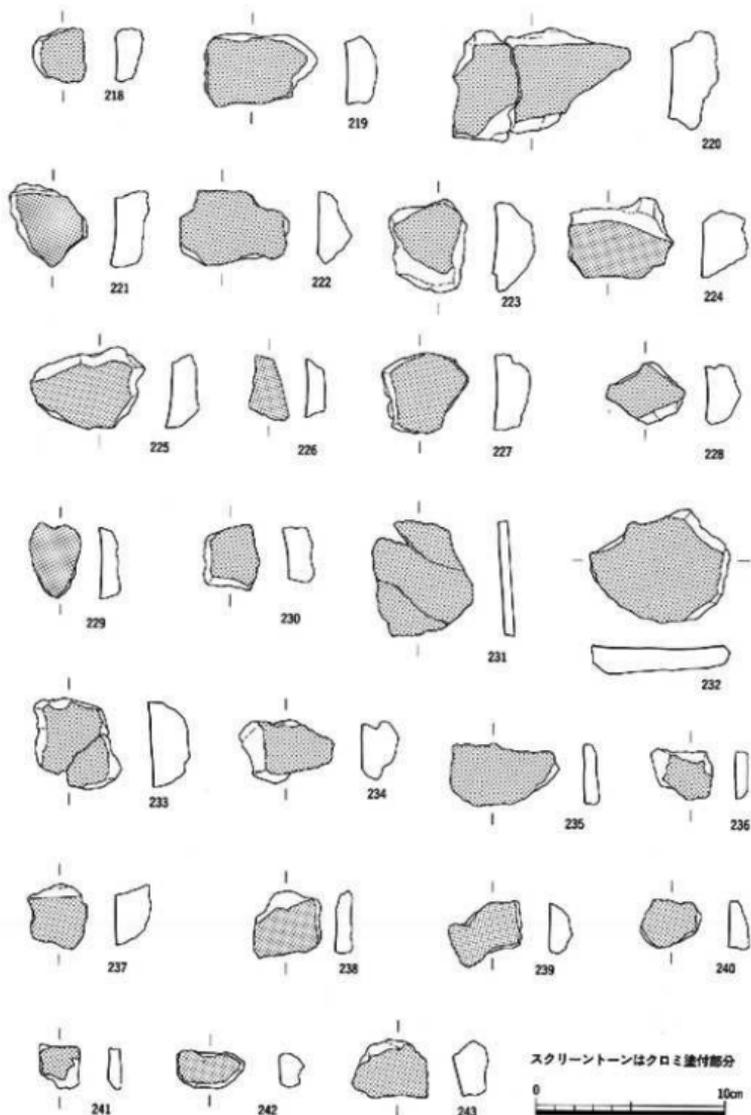




スクリーントーンは真土付着部分



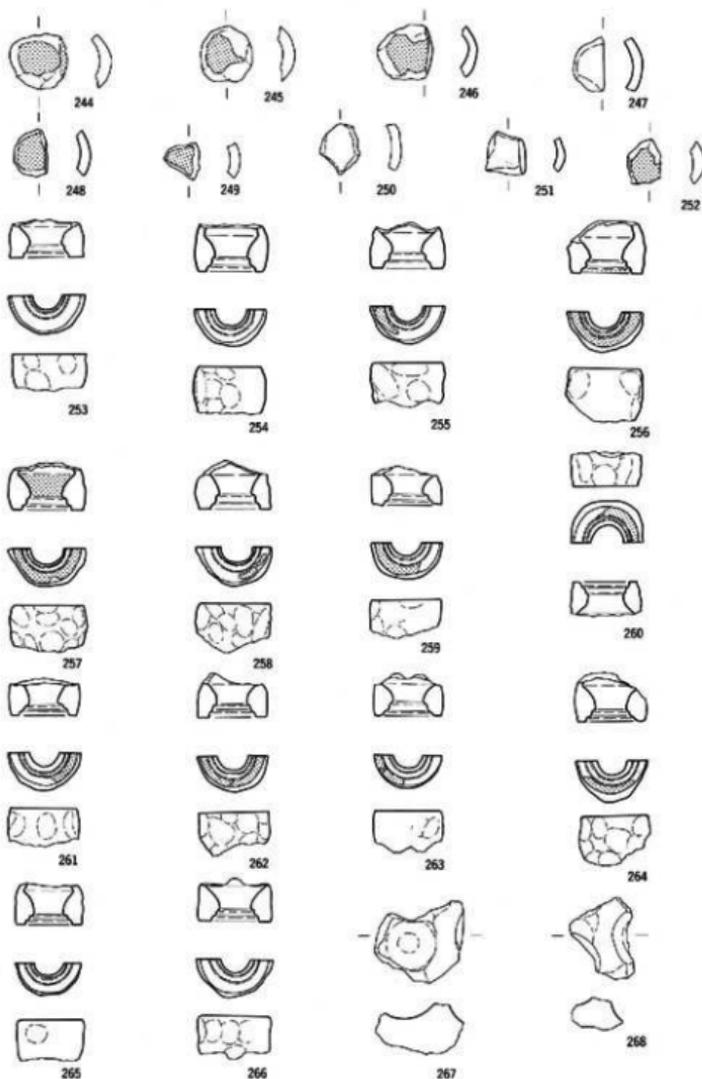
第125図 S H1005出土遺物実測図 (2)



第126図 S H 1005出土遺物実測図 (3)

持ち、池の間あるいは草の間付近の鋳型であろう。厚さは概ね0.5~2cmほどで、いずれも粗真土から仕上げ真土の層状構造が認められる。クロミは232・234~236・238・241に残存する。244~266は乳の鋳型である。244~252は乳頂部である。246~248は接合面を持つ。253~266は乳体部の鋳型である。下部に二段の段を持つ宝珠型をなす。両端に接合面を持ち、背面には鋳型成形時のユビオサエを残し、部分的に鋳型埋め込み時の真土砂が付着するものもある。鋳型下端は平滑に仕上げられており、クロミを塗布するものも認められる。乳径は2.6~2.7cmであり、乳高は復元値で3.2cmほどである。いずれも逆勾配のつく乳頂部との境で破損しており、鋳造終了後の型ばらし時に破壊されたものと思われる。乳鋳型の胎土は龍頭胎土と近似しており、龍頭鋳型と同じく梵鐘外型に埋め込むため抜型を用いて別途製作されたものと考えられる。267・268は粗真土で、隣合う円形のくぼみが認められる。これが乳頂部鋳型の背面のカーブと一致することから、乳鋳型を埋め込んだ部分(乳の間)にあたると思われる。269・270は縦帯部分の鋳型である。いずれも縦方向の沈線を持ち、269では3本、270では2本認められる。271~298は中帯を中心とした帯部の鋳型である。272は中帯部分が比較的良好に復元できたもので中央に幅広い凹線を持ち、上に1本、下に2本の沈線が確認できる。273・280・284・287~290は中帯中央の凹線部分である。277・278は中帯凹線の上下いずれかの沈線であり381・382も帯部の沈線部であろう。283も帯部の一部であろうが他の鋳型に比べ鋳型面の還元状態が著しく鋳型面は灰黄色を呈する。299~339は上帯あるいは下帯の唐草部分の鋳型であろう。いずれも小片であり唐草などの込み入った文様部分は型ばらし時に細かく破碎を受けたものと思われる。沈線によって構成され曲線を持つもの(299~307・324・325)、直線的なもの(308~323・326~339)の二者がある。また直線的な二本の沈線を持つものには、沈線間が狭いもの(1.2cm前後)、広いもの(3.5cm前後)の2者があり、後者は帯部の鋳型にあたる可能性もある。340~343は下帯から駒の爪にかけての鋳型である。340・341は鋳型面をとどめる。クロミは刷毛状の工具で横位に塗布されている。342・343は一部に鋳型面をとどめているが、下帯にあたる部分は粗真土まで剝離しており、粗真土の表面には指ナゲ状の痕跡が認められる。

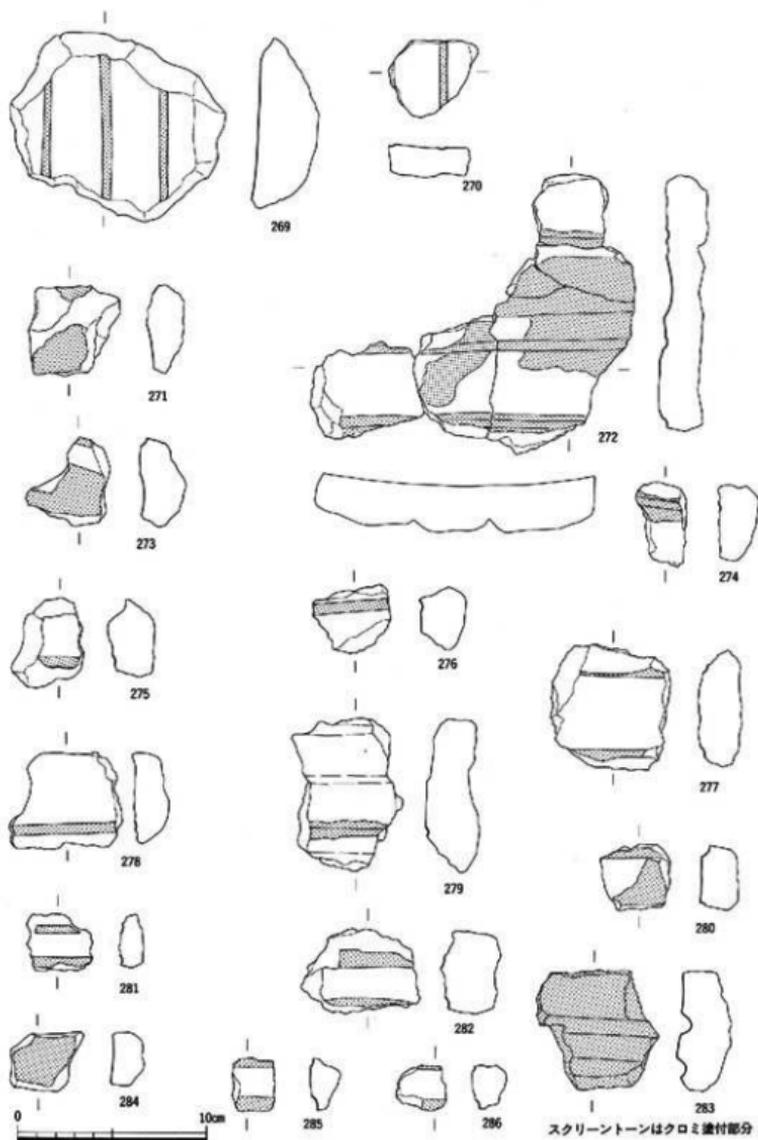
344~346は溶解炉である。溶解炉は「倉吉の鋳物師」に見られる「こしき」と呼ばれた分割可能な溶解炉に構造類似するものと思われ、送風のための羽口を装着した溶解帯(こしき)を中心に、上部の原料投入のための装入口(上こしき)、下部の溶解した金属を溜める湯溜の3部分が確認できた。344は上こしきの下部に相当する。全周の1/3程が復元できた。直径86.4cmを測り、高さは20cm以上の円筒状を呈する。外面は成形時の指ナゲが、下部は横位に上部は縦位に施されている。また下部に4段ほどの縄の圧痕が認められた。内面は被熱のため表面が暗赤褐色のガラス状を呈し細かいひび割れが全面にわたり認められた。また下端には下部の炉体との接合のための位として用いられた幅6cmほどの真土の帯が指ナゲによ



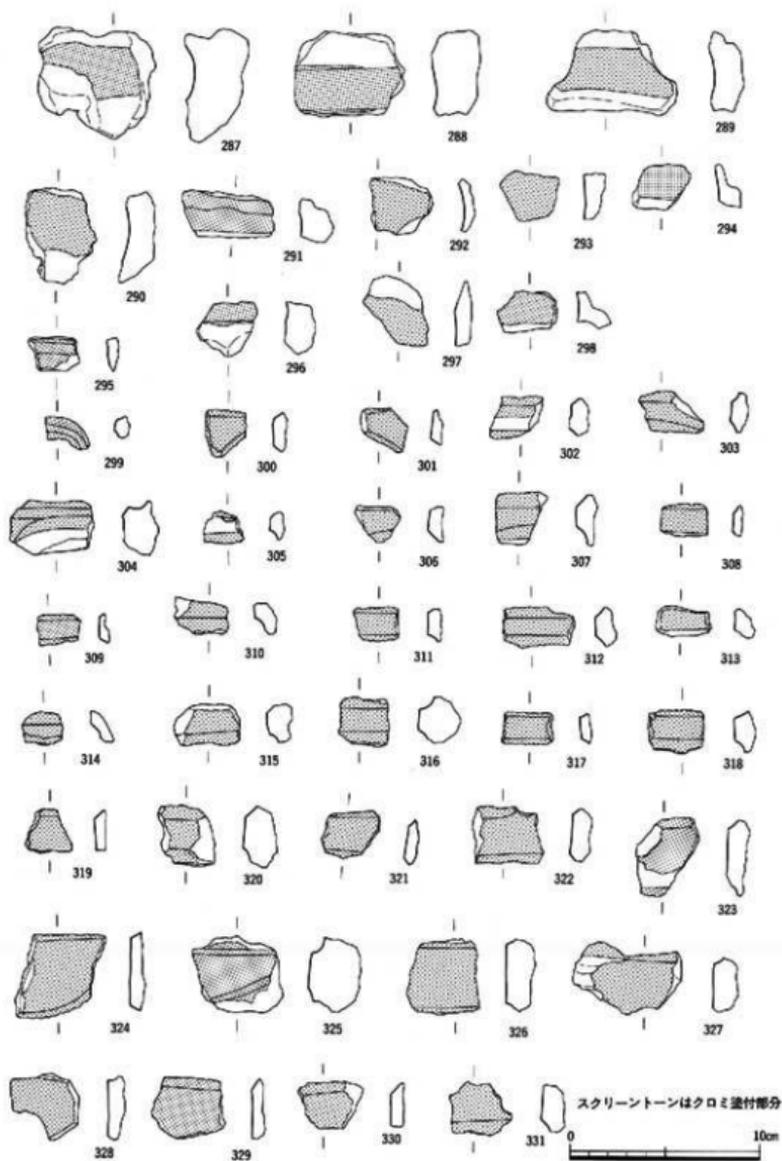
スクリーントーンはクロミ塗付部分



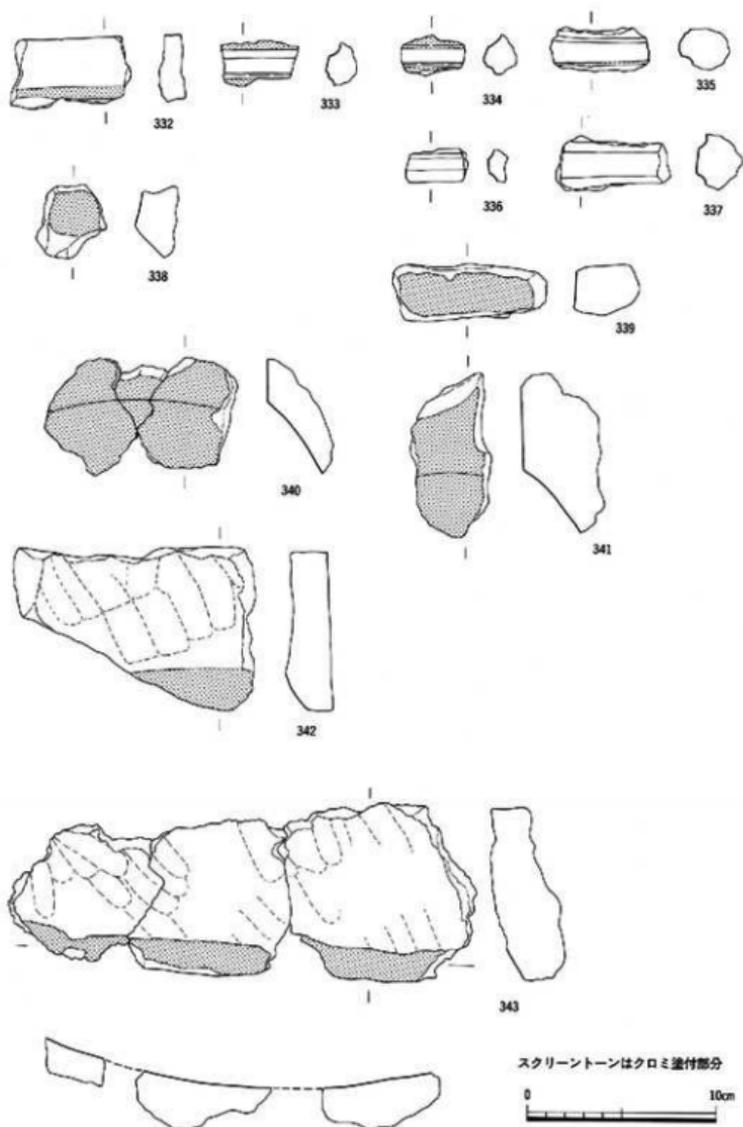
第127図 S H1005出土遺物実測図 (4)



第128図 S H 1005出土遺物実測図 (5)



第129図 S H 1005出土遺物実測図 (6)

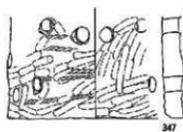
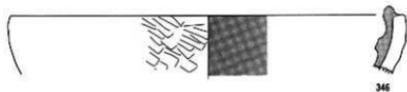
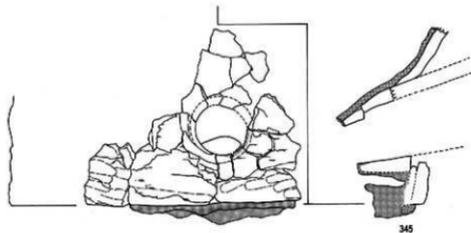


第130図 S H1005出土遺物実測図 (7)

りなでつけられている。345は羽口を装着したこしきである。全周の1/6程が復元できた。直径81.6cmを測り、高さは34.8cm以上のやや外開きの円筒状を呈する。胎土は粉、糞、小石などを含み、梵鐘のアラ型と同様であるが成形はやや粗いという印象を受ける。上端部の構造は不明であるが下端部は残りが良く、下部の炉体との接合のための位が認められた。外面は下部に指ナデの痕跡をとどめ、下端から9cmほど上部に羽口を装着するための楕円孔が設けられる。羽口は吸気部の復元径で外径16.8cm、内径11.6cm、残存長で11.2cmを測り、炉体に対して74°程の角度で装着される。羽口の上下は粘土を充填し固定している。炉体外部に延びる部分は破損により確認できなかった。内面の滓は羽口の外面及び羽口の下部に特に厚く付着し、暗赤褐色～暗青色を呈するもので全体に緑青が付着し一部に炭の噛み込みが観察できる。炉壁自体は高温で浸食を受け器厚を減じ、厚さ1cmほどとなる部分もある。346は湯溜と考えられる。他の炉体より器壁が厚く、外面に叩き目が残ることからもわかるようにかなり強いたつき締められている。上端部から下部にかけて緩やかに弧を描き、底部は丸底になると思われる。内面には赤褐色～黒色の滓が厚く付着する。

347は直径35cm高さ20.4cm以上の円筒状の土製品である。内外面に指ナデをとどめ、径2.8cmほどの円孔を施す。外面には縄の圧痕が5段以上認められる。内面に真土もしくは滓の付着はなく、形態、規模からして鋳型や溶解炉に関わるものではなさそうである。用途としては「倉吉の鋳物師」に見られる鋳型の乾燥の際に用いられる「火焼き」に類似しており、本品もそのような鋳型製作時に用いられた道具と考えられる。348と349は同様の規模、形態であり、348は外径76.8cm、内径40.8cm、高さ8.4cm、349は外径81cm、内径48cm、高さ7.8cmを測る。共に大形の輪状を呈し、側面、上面に指ナデ痕をとどめ、上面に真土を塗布する。また348は3ヶ所の切断部分が確認でき、349は5ヶ所で切断され5ブロックに分かれる。348・349は規模、形態からすると212の定盤に近いものであるといえる。またこれを梵鐘鋳型のアラ型と考えることもできるが、内径部分は被熱し薄い滓状の皮膜が付着し、高さもアラ型の一段分としては低いといえる。確証はないものの神奈川県長福寺遺址<sup>(3)</sup>において報告された溶解炉台がこれに近いものではないかと考える。ただ長福寺の炉台には被熱の痕跡はほとんど認められないとのことであり、348・349の用途については更に検討を要する。

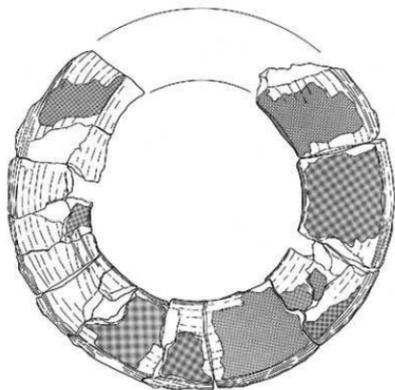
350～355は銅製の煙管である。350～352は雁首である。いずれも火皿を欠失しているが、脂返して上方に湾曲する。351・352は補強帯を持ち、352は線刻による装飾を持つ。353・354は吸口である。355は火皿である。356～360は銅製品である。357・356は筒状、358は細板状、359は鐘状に湾曲し、360は両端に孔を持つ。361はL字状の屈曲を持つ。362は銅製の鋸で表面に鍍金されている。363は円丘状の打ち出しを持つ薄板状の飾り金具である。364・365は銅製容器の破片である。366は中実の八角形宝珠型銅製品である。367は円柱状の木製品で、両端がすばまる。外面には、銅滓、木炭などが付着しており、あるいは溶解炉の湯溜のノミ口



スクリントン泥は、位冨土  
 スクリントン泥は、津付層部分



第131図 SH1005出土遺物 (B)



348

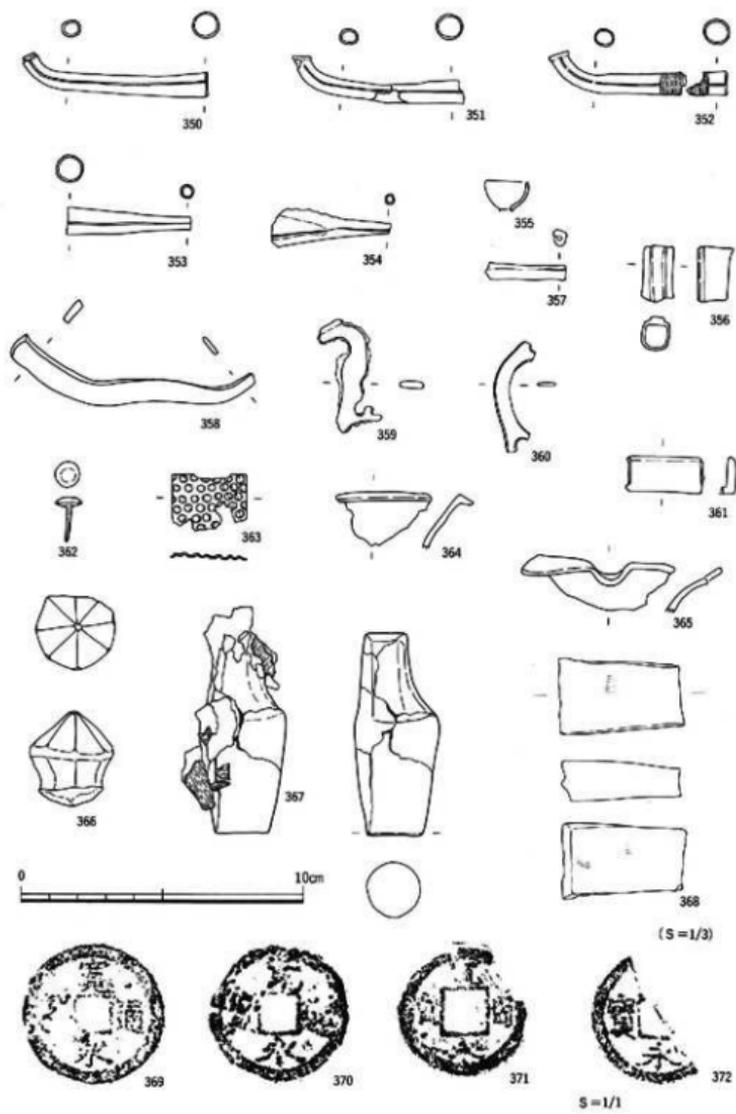
スクリーントーン濃は、真土  
スクリーントーン濃は、漆付層部分



349



第132図 S H 1005出土遺物 (9)



第133图 SH 1005出土遺物 (10)